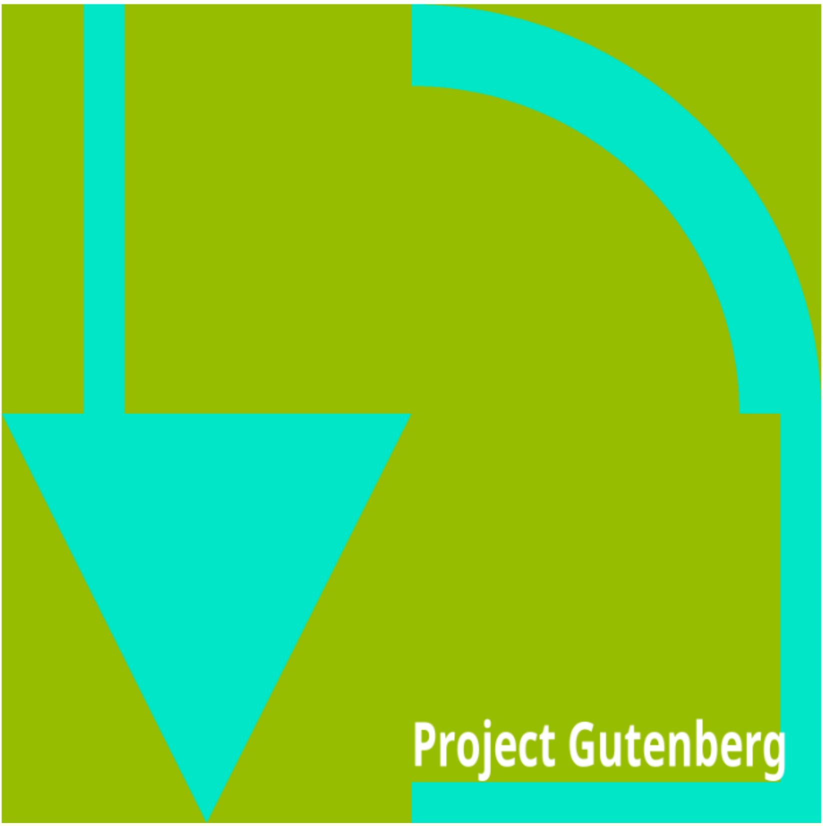
あめりか物語

Kafu Nagai



The Project Gutenberg eBook of あめりか物語

Title: あめりか物語

Author: Kafu Nagai

Release date: February 19, 2011 [eBook #35327]

Most recently updated: March 3, 2021

Language: Japanese

Credits: Produced by Sachiko Hill and Kaoru Tanaka

あめりか物語

明治三十六年の秋十月の頃より米國に遊びて今茲明治四十年の夏七月フランスに向ひてニューヨークを去るに臨み、日頃旅窗に書き綴りたるものを採り集めて、あめりかものがたりと題し、謹んでわが恩師にして恩友なる小波山人巖谷先生の机下に呈す。明治四十年十一月里昂にて永井荷風。

船房夜話

　何處いづこにしても陸を見る事の出來ない航海は、殆ど堪へ難い程無聊ぶれうに苦しめられるものであるが、横濱から亞米利加あめりかの新開地シアトルの港へ通ふ航海、此れもその一ツであらう。

　出帆した日、故國の山影に別れたなら、船客は彼岸の大陸に達する其の日まで、半月あまりの間、一ツの島、一ツの山をも見る事は出來ない。昨日も海、今日も海———何時見ても變らぬ太平洋の眺望ながめと云ふのは唯だ茫漠として、大きな波浪なみの起伏する邊に翼の長い嘴くちばしの曲つた灰色の信天翁あはうどりの飛び廻つてゐるばかりである。その上にも天氣は次第に北の方へと進むに連れて心地よく晴れ渡る事は稀になり、まづ毎日のやうに空は暗澹たる鼠色の雲に蔽ひ盡さるゝのみか動やゝもすれば雨か又は霧になつて了ふ。

　私は圖らずも此淋しい海の上の旅人になつた。そして早くも十日ばかりの日數を送り得た處である。晝間ならば甲板で環投わなげの遊び、若しくは喫煙室で骨牌かるたを取りなぞして、どうか斯うか時間を消費する事が出來るけれど、さて晩餐の食卓テーブルを離れてからの夜になると、殆ど爲す事が無くなつて了ふ。且つ今日あたりは餘程氣候も寒くなつて來たやうだ。外套なしではとても甲板を歩いて喫煙室へも行かれまいと思ふ所から、私は其の儘船房キヤビンに閉じ籠つて、日本から持つて來た雜誌でも開かうかと思つて居ると、其の時室の戸を指先でコト□□と輕く叩くものがある。

「お這入んなさい。」と私は半身を起しながら呼掛けた。

　戸が開いて、「どうした。又少し動くやうぢや無いか。弱つとるのかね。」

「寒いから引込んで了つた。まア掛け給へ。」と云ふと、

「全く寒いな。アラスカの沖を通るんだと云ふからな。」と餘り濃くない髯を生やした口許に微笑を浮べながら、長椅子ソフワーの片隅へ腰を下したのは柳田君と云つて航海中懇意になつた紳士である。

　中肉中丈、年は三十を一ツ二ツも越して居るらしい。縞地しまぢの背廣の上に褐色ちやいろの外套を纏ひ、高い襟カラーの間からは華美はでな色の襟飾ネキタイを見せて居る。何處となく氣取つた様子で膝の上に片脚を載せ、指輪を穿めた小指の先で葉巻シガーの灰を拂ひ落しながら、

「日本なら今頃は隨分好い時候なんだがな…………。」

「さう、全くだよ。」

「何か思ひ出す事でもありやしないかね。」

「はゝは。其ア君お隣りの先生へ云ふ事だ。」

「うむ。お隣りの先生と云へば如何して居る。又例の如く引込んで居るんだらう。呼んで見やうぢや無いか。」

「よからう。」と私は壁をトン〳〵と二三度叩いて見た。少時しばらくは答へが無かつたが、軈て隣りの船房に居る岸本君と云ふのが、私の船室の戸口へ顔を出した。

「ハロオ、カムイン。」とハイカラの柳田君は早速氣取つた發音で呼掛けると、

「有難う。此樣風をして居るですから………。」と岸本君は其の儘佇立んで居る。
「さ、這入り給へ。」と私は長椅子から立つて立掛けてある疊椅子を廣げた。
　岸本君と云ふのは矢張三十近くの稍身丈せいの低い男で、紬の袷とフランネルの一重を重着かさねぎした上に大島の羽織を被つて居る。
「ぢや、失禮します。」と鳥渡腰を屈めて椅子に坐りながら、「洋服はどうも寒くて不可んですから、寢衣ねまきで寢やうかと思つて居たです。」
　すると柳田君は、岸本君の顏を見ながら、
「洋服は寒いですか。」と如何にも不審だと云ふ語調で、「私なんぞは、然うすると全く反對ですね。增して此樣航海中なんか日本服を着やうものなら、襟首が寒くて忽ち風邪を引いて了ふです。」
「さうですかなア。其れぢやア、私は未だ洋服に慣れ無いんですな。」
「柳田君、君は飮いける口なんだから、どうです、命じませうか。」
「いや、今夜は餘り欲しくは無いです。唯だ退屈だから談話はなしに遣つて來たです。」
「だから、話をするには矢張やつぱりコツプが無いと面白くないでせう。」と私は鈴ベルを押しながら、「又例の氣焔を聞かうぢやありませんか。ねえ、岸本君。」
　然し岸本君は返事をせず傾けた顏を起して、「又、大分動いてゐ

る様ですね。」

「君。何にしても太平洋だよ。」と柳田君は再び薄い髯ひげを拈ひねつた。ボーイが戸を開ける。

「柳田君、君は例の如くウヰスキーですか。」

「勿論オフコース」と云ふ返事を聞いてボーイは靜に戸を閉めて立去つたが、其の時吠るやうな太い汽笛の響に續いて、甲板へ打上げる波の音がした。

「成程、少し動搖するね。まア可いさ。今夜は一ツ愉快な雜談會を催したいもんだな。」と柳田君は安樂さうに足を踏み伸したが、和服の岸本君は明い電氣燈の輝ひかつて居る室の天井を見廻しながら、

「どうしたんです。非常に汽笛を鳴らずぢやありませんか。」

「霧が深いからでせう。」と柳田君が說明し掛けた時ボーイは命じた酒類を盆にのせて持運んで來た。そしてベツドの傍の小いテーブルの上に置きコツプへついだ後再び室を出て行く。

「グツドラツク。」と柳田君が第一にコツプをさゝげたので、私等も同じやうに笑ひながらグツドラツクを繰返した。

　何時になつたのか遙に時間を知らせる淋しい鐘の音が聞える。波は折から次第に高まり行くと見え、今はベツドの上の丸い船窓へ凄じく打寄せる響がすると、甲板の方に當つて高い檣ほばしらを掠める風の音が、丁度東京で云ふ二月のカラ風を聞くやうで、其れに連れては何處とも知らずギイ□□と何か物の軋きしむ響も聞え始めた。然し私等は最早や航海には馴れて了つた處から別に醉ふやうな虞うれひは無い。窓や戸へ帷幕カーテンを引き蒸氣スチームの溫度

で狹い船室の中を暖かにして、安樂椅子へ凭れながら外部おもての暴風雨を聞いてゐると、却つてそれとも無しに冬の夜に於ける爐邊の愉快が思ひ出される。ハイカラの柳田君も同じ感情に誘はれたのであらう、ウヰスキーの洋盞さかづきを下に置いて、

「ねえ、君。自分の身體が安全だと云ふ事を信じて居ると、外を吹いて居る暴風雨ストームと云ふものは、何となしに趣味のあるやうに聞えるですな。」

「眞實、これが大船に乘つた心持と云ふのでせうな。然し若しか、帆前船見たやうなものだつたら、如何でせう。隨分難船しないとも云へませんぜ。」と岸本君は眞面目らしく云つた。

「何事に寄らず皆な然うですよ。一方で愉快を感ずるものがあれば、其の爲めに一方では屹度苦痛を感ずるものが起るです。火事なんぞは燒かれるものこそ災難だが、外のものには三國一の見物だからね。」とウヰスキーの醉が廻つたのか、私は何か分らぬ屁理窟を云ふと、

「眞理だよ、實際眞理だよ。」と柳田君は深くも何か感じたらしい樣子になつて、「君の比喩に從ふと、僕なんぞは正に燒出された方の組なんだな。燒出されて亞米利加三界へ逃げ出すんだ。僕は實際去年日本へ歸つたばかりなんだ、行李トランクを開けるか開けない中、又候またぞろ海外へ行かうなぞとは、全く自分でも意外な心持がするです。」

　私も岸本君もとも□□熱心に柳田君が今回の渡米に付いての抱負を質問した。鳥渡した話にも柳田君は必ず大陸の文明島國の狹小と云ふ事を口癖のやうにしてゐるので、定めし大抱負を持つて居る事

と想像したからである。

「はゝゝは。其様抱負なぞと云ふ大したものは無いです。しかし、、、……」と濃くない髯を拈ひねつて柳田君は自家の經歷を述べ始めた。

　彼は最初或學校を卒業した後、直樣會社員となつて、意氣揚々と濠洲の地へ赴いたのである。そして久振に故鄉の日本へ歸つて來たが、満々たる胸中の得意と云ふものは、最初出立した時の比ではない。舊友の歡迎會を始めとして、彼は到る所逢ふ人毎に大陸の文明と世界の商況とを說き且つ賞讃した。豆粒のやうな小な島國の社會は必ず自分を重く用ひてくれるに違ひ無いと深く信じて疑はなかつた。處が事實は本社詰めの飜譯掛にされて了つて、其の月給幾何かと問へば、本位ほんゐの低い日本銀貨の僅か四十圓と云ふのであつた。然し彼はよく□□日本の事情を考へて、先づ默して此れを受取つたものゝ、胸中には絕えず不平が蟠わだかまり易い。で、此の不平を慰むべく、彼は軈て才色優れた貴族の令孃をでも妻にしやうと、大に此の方面へ運動しはじめた。心中では洋行歸り――――と云ふ此の呼聲が確に世の娘や母親の心を惹くであらうと信じたが事實は增々反對して來る。彼が目掛けた或子爵の令孃と云ふのは彼が最も冷笑する島國の大學卒業生と結婚して了つた。彼は二度まで得意の鼻を折られたばかりでは無く、今度は確に遣瀨なき失戀の打擊をも蒙つたのだ。

　然し柳田君は猶全く絕望して了ひはせぬ。苦痛の反動として以前よりも一層過激に島國の天地を罵倒し始めた。そして再び海外へ旅の愉快を試みやうと決心したのである。

「日本なんかに居つたら、到底心の底から快哉を呼ぶやうな事アありやせんからね。丁度好鹽梅いゝあんばいに横濱の生糸商で亞米利加へ視察に行つてくれと云ふものがあるから、此れ幸ひに依賴されて出掛けて來たです。事業ビジネスと云ふ事に付いちや、如何しても海外へ行かなければいかんですからね。僕は同胞諸君が渡米されるのを見ると、實際嬉しく思ふです。」と洋盞さかづきを取つて咽喉を潤したが、身體の方向むきを一轉させて、「岸本君。君は米國あつちに行つてから學校へ這入るとか云はれたですね。」
「さうです。」と岸本君は和服の襟を引合せた。
「大學へでも這入られるですか。」
「さ。其の心算ですが、今の處ぢや全で語學が出來ませんし、未だ事情も分らんですからな………」
「柳田君。岸本君は細君や子供までを殘して學問に出て來られたのださうです。」と私が云ひ添へると、柳田君は身體を前へ進ませながら、
「岸本君。君はもうお子樣があるんですか。」
「えゝ。」とばかり岸本君は稍其の頰を赤らめた。
「其れぢや、非常な大決心を以つて出て來られたのですな。」
「まア、此れまでにして、出て來るには隨分奮發したつもりなんです。親類なぞには激きびしく止るものも有りました。」と今度は岸本君が語る可き順序となつた。
　此の人は矢張東京の或會社に雇はれて居たが、將來に出世する見込のないばかりか、何時も人の後に蹴落されてのみ居た、と云ふのは、畢竟ひつきやう何處の學校をも卒業した事がない。乃すなはち

肩書と云ふものを有つてゐない其の爲めであると、つく□□考へ始めた折から、今度社内の改革に遇つて解雇される事となつた。けれども幸ひ其の細君の身には尠からぬ財產が付いて居たので、普通の人の遭遇するやうな憂目を見ずに濟んだのである。否、其の細君は寧ろ好い折であると云ふ樣に、此樣喧しい東京に居るよりか、自分の身に付いて居る財產で何處か靜な田舍へ行き可愛い子供の三人暮しで安樂に暮した方がと云出した。

　けれども、岸本君は此の優しい妻の語に従ふどころでは無い。細君が其の亡父から讓られた財產で、自分は出來る事なら一年なり二年なり米國へ行つて學問して來たいと相談し掛けた。すると細君は決して金を惜む爲めでは無く、唯だ□□愛する夫に別れるのが可厭いやさに堅く其れには反對したのである。無理な出世なぞはしてくれなくてもよい。書生上りの學士さんに先を越されても少しも耻る事は無い。人は其の力相應の働きをして平和に其の日が送れさへすればよいでは無いかと云ふのが細君の意見であつたが、是非飽くまでもと云ふ夫の決心に到頭細君も涙ながらに岸本君を萬里の異鄉に出立させる事になつたと云ふのである。

「ですから、私の考へでは成りたけ時間を短くして何なり學校の免狀を持つて歸りたいと思つて居るです。卒業免狀が妻へ見せる一番の土產なんですから。」

　云ひ了つて、岸本君は自ら勇氣を勵ます爲めか、苦味にがさうな顏をしながらも、グツと一口ウヰスキーを飲干した。

「うむ。全くお察し申すです。然し其れと共に僕は滿腔の熱情を以て君の莊擧を祝するです。」と柳田君は續いてコツプを上げたが又

調子を變へて、「然し、何かにつけて思ひ出しなさるでせうな。僕は未だ細君の味は知らないですがね。」
「はゝゝは。もう此處まで踏出して其樣意氣地のない事が………はゝゝは。」と殊更に笑つたが其の樣子は如何にも苦し氣に見受けられた。

カン〳〵と折から又もや鐘を打つ音が聞えた。硝子戸一枚で僅に境されてある船窓まどの外には依然として波と風とが荒れ廻つて居たが、閉切つた船房へやの中は酒の香氣かをりと煙草の煙にもう暖か過る程になつて居る。いつか談話にも疲れ掛けた私達は船房中に輝き渡る電燈の光を今更の樣に眺め廻した。柳田君は驪て思出したやうに時計を引出して、
「もう十一時だ。」
「さうですか。大變お邪魔をしました。其れぢやアそろ〳〵お暇しませう。」と岸本君が先に座を立つた。
「まア可いぢやありませんか。」
「有難う。今夜はお庇かげで非常に愉快だつたです。明日も又恁かう云ふ風に送りたいですな。其れぢや………。」と戸を開けて「グツドナイト。」と柳田君は何か分らぬ英詩を口の中で唱ひながら早や己が船房の方へと、次第に其の跫音を遠くさせると、隣りの室では同じく歸り去つた岸本君が淋しい寢床に其の身を橫へるのであらう、ベツドの帳帷カーテンを引き寄せる音が幽に聞えた。

（明治卅六年十一月）

牧場の道

　タコマに滯在して居た時分、その年も十月の確か最終の土曜日であつた。

　秋は早や暮れ行くので、往來の兩側に植ゑられた楓メープルの並木を初め公園や人家の庭に、一夏の涼しい蔭を作つた樹木と云ふ樹木は、昨夜の深い霧で大概は落葉して了つた。このタコマのみならず米國の太平洋沿岸はもう一週間を過ぎずして、所謂いはゆる悲しい十一月ノーベンバーの時節となつたならば、毎日霧と雨とに閉されて來年の五月になるまで、殆ど晴れた空を見る事は出來ない。今日の晴天は恐らく今年の靑空の見納めであらうと云ふ。私は此の地の風土や事情に通じて居る或友に勸められて、とも□□此の一日を晩秋の曠野プレヤリーに自轉車を馳はしらせる事にした。

　タコマ大通アベニユーと云ふ山の手の一本道を東へと走る。この一本道から眺望するとタコマの市街はピユーゼツトサウンドと呼ぶ出入の激しい内海に臨んで著しい傾斜をなして居る處から、無數の屋根と煙筒、廣い埋立地、波止場、幾艘の碇泊船、北太平洋會社の鐵道――全市街は唯の一目に瞰みおろされて了ふ。而して入江を隔てた連山の上には日本人がタコマ富士と呼ぶレニヤー山が雪を戴き巍然ぎぜんとして聳え、夜明の晩い北方の朝日がちやうどその半面を眞紅の色に染めて居る。私等二人は街端の大きな渓たにの上に架けてある橋を二ツばかり渡り、特別に造られた廣い自轉車道を四哩まいるばかり馳はしつて、南タコマと呼ぶ村落を通り過ぎると、直に廣漠たる野原に出た。道の通ずる儘に或ひは上り或ひは下る事恰

も波に搖られる船の如く、遂に行き盡して槲オークの林に這入つた。道は稍險しくなり、此の地方、殊にワシントン州の各所に黑い深い森林を造つて居る眞直な黑松は槲の林に引續いて此處にも忽ち私等の行手を遮つた。私等は漸くに苔むす一條の小道を見出し、その導くが儘に、林間の湖水アメリカンレーキの畔ほとりに休み、更に轉じてスチルカムと呼ぶ海岸の孤村を訪うたのである。

「歸り道に此の山の上の瘋狂院てんきやうゐんを案內しやう。ワシントン州の州立ステート瘋狂院アサイラムだから、此の邊では一寸有名だよ。」

　此の時友は恁かう云つたので、私は彼の後に續いて後の丘陵へ上ると、遠くの彼方には氣も晴々する牧場を望み、近くは幽邃いうすゐな林を前にして、宏莊な煉瓦造の建物が、直ぐ樣其れと知られるのであつた。

　白いペンキ塗の低い垣で境された廣い構內は、人の步む道だけを殘して、一面に靑々とした芝生が其の上に植ゑられた枝の細い樹木や色々な草花と相對して目も覺めるばかり鮮明あざやかな色彩を示して居る。裏手の方には宏大な硝子張の溫室の屋根が見え、小徑の所々には腰掛ベンチ、廣場の木蔭には腰掛付の鞦韆ぶらんこなぞも出來て居たが、見渡す限り深閑として人の氣色けはひも無い。

　私等は鐵の門前を過ぎる一條の砂道をばゆる□□と自轉車を進ませ、もと來た牧場の方へと下りて行つた。友は色々說明したついでに、

「この瘋狂院には日本人も二三人收容されて居るよ。」

　何事もないやうに云つたが、私には此れが非常な事件である樣に

思はれた………同時に友は、

「皆な出稼ぎの勞働者さ。」と付加へた。

　出稼ぎの勞働者と云ふ一語は又しても私の心を動さずには居ない。思返すまでも無く、過る年故鄕を去つて此の國に向ふ航海中、散步の上甲板から、彼等勞働者の一群を見て、私は如何なる感想に打れたらう。

　彼等は人間としてよりは寧荷物の如くに取扱はれ狹い汚い船底に滿載せられてゐた。天氣の好い折を見計つて彼等はむく〳〵、、、、甲板へ上つて來て茫々たる空と水とを眺める、と云つて心弱い我等の如く別に感慨に打るゝ樣子もない。三人四人、五人六人と一緒になつて、何やら高聲に話し合つて居る中、日本から持つて來た煙管で煙草をのみ、吸殼を甲板へ捨て、通り過ぎる船員に叱責せられるかと思ふと、やがて月の夜なぞには、各自めい〳〵の生國しやうごくを知らせる地方の流行はやり唄を歌ひ出す。私は彼等の中に聲自慢らしい白髮の老人の交つて居た事を忘れない。

　彼等は外國で三年の辛苦をすれば國へ歸つてから一生樂に暮せるものとのみ思込んで、先祖が產れて而して土になつた畠を去り、伊太利いたりやの空よりも更に美しい東の空に別れ、移民法だの健康診斷だのと、いろ〳〵な名目の下に行はれる幾多の屈辱を甘受して、此の新大陸へ渡つて來るのである。然しこの世は世界の何處へ行かうとも皆な同じ苦役の場所である。彼等の中の幾人が其の望みを達し得るのであらうと、色々悲しい空想の湧起るにつれて、私の目には今まで平和と靜安の限りを示して居た行手の牧場は、忽ち變じて云はん方なき寂寥を感ぜしめ、松の森林は暗澹として奧深く、

恐怖と祕密の隱家である樣に思はれた。

　友はとある木蔭に車をよせて休息するのを幸ひ、私は近寄つて、

「君は知つて居るかね。どうして狂氣なぞに成つたのだらう。」

「あの………勞働者のことかね。」と友は暫くした後初めてその意を得たものゝ如く、「大概は先づ失望と云ふ奴が原因になるんだが、一人はそればかりぢや無い………實に可哀想な話さ。然しさう云つたやうな話はアメリカには珍らしく無いよ。」

「どう云ふ話だ。」

「僕も人から聞いた話なんだが………いくら日本人の社會が無法律だつたからツて、此れなんぞは隨分激しいと云つていゝね。もう六七年前の事だつて云ふ話だが………」と友は衣嚢かくしから煙草の袋を取出し指先で巧に巻煙草を作りながら話した。

　その頃には丁度シアトルやタコマへ日本人が頻と移住し始めた當時のことで、今日のやうに萬事が整頓して居ないから、種々の罪惡が殆ど公然に行はれて居た。カリフオルニヤの方から彷徨つて來た無頼漢や、何處の海から流れて來たのか出所しゆつしよの知れない水夫あがりの親方なぞ、少しく古參の滯米者は、爭つて案內知らぬ新渡米者の生血を吸つたものだ。此う云ふ危險な惡所へと彼―――發狂者の一人は其の妻と二人連で日本から出稼に來たのである。

　一體日本の農夫が渡米の野心を起す最大の原因は新歸朝者の誇大な話を聞く事であるが、彼も正しく其の中の一人であつた。彼は蕎麥の花咲く紀州の野に住んで居たが丁度その村へ十五年目で布哇ハワイ島たうから歸つて來た男があつて、アメリカと云へば金のなる木が何處にも生えて居るやうな話をする處から、ふいと未だ見ぬ極

樂へ行く氣になり、殊に女の勞働賃錢は男よりもよいと云ふ樣なことから到頭夫婦連の渡米が實行される事になつたのである。シアトルと云ふ其の地名さへ發音するには舌が廻らぬ程な不知案内の土地へ上陸する。と波止場の上には船の着くのを待つてゐる勞働口の周旋屋、宿屋の宿引、醜業婦密輸入者なぞ云ふ、何れも人並よりは鋭い眼を持つて居る輩てあひが、それ□□腕一杯の力を振つて各自の網の中へ獲物をつかみ入れる。彼等夫婦は宿屋の案内と稱する一人の男に連れられて、大きな荷馬車と人相の惡い亞米利加の勞働者が彼方此方にごろごろして居る汚い町から、唯とある路地に入り、暗い戸口を押明けて、狹い階子段を上るのでは無く、地の下へと下り、薄暗い一室に誘はれた。

　此處で過分な周旋料を拂はせられた後妻は市中の洗濯屋に働き男は市からは十哩ばかり離れた山林の木伐きこりに雇はれる事となり、晝も猶薄暗い林の中の一軒家に送り込まれた。此處には三人の日本人が同じく木伐となつて寢起して居たが、其の中の親方らしい一人が、「知らねえ國へ來たらお互が賴りだ。此れからは皆な兄弟のやうにして働かうよ。」と云ふので、彼も殊の外安心して、毎日仲間と共に西洋人の親方に監督ボツスされながら、一心に働いて居た。

　仕事から歸つて來ると、寂しい此の小屋の中で、新參の彼は三人の仲間から問はれる儘に色々と身上話をする………と親方らしい一番強さうな男が眼をぎら□□さして、

「嬶アをシアトルへ置いて來たツて………まア何て云ふ不用心な事をしたもんだ。」と如何にも驚いたやうに、大聲で他の仲間を見廻

した。

「だつてお前さん、此の國へ來たからにや稼ぐのが目的だから、嚊と別れて居る位な事は覺悟の上だア。」と新參の彼は然し悲しさうな調子で云ふと、彼男は續いて、

「乃公の云ふのは然うぢや無え。それアお前さんの云ふ通り稼ぎに來たからにや其れ位の覺悟は無くちやならねえが、女一人をシアトルへ置くなア、川邊かはツぷちへ小兒を遊ばしとくよりも險呑けんのんだと云ふのさ。」

「へーえ。どうして。」

「お前さん、まだ來たてだから知らねえのも無理は無え。シアトルてえ處は………シアトルばかりにや限らねえ、此のアメリカへ來た日にア、何處へ行つたつて女一人を安隱にさしとく處はありやアしねえ。まア瑕きずをつける位ならまだしもだ。お前さん、惡くするともう二度と嚊の顏は見られねえぜ。」

「全くさね。用心するがいゝよ。」と他の一人が付加へた。以前の男は暫く無言で、泣き出しさうな顏をして居る新參者の樣子をば上目でぢろ□□見遣つて居たが、大きなパイプで煙草を一吹しながら、

「この國へ來たら、何樣尼ツちよ、、、、でも、女と云ふ女は皆な生きた千兩箱だ……千兩ぢや無え千弗箱だ。だから嬪夫ぴんぷてえ女衒ぜげん商賣しやうばいをして居る奴が、鵜うの目鷹の目で女を搜してゐるんだが、時にや隨分無慈悲な仕事をするよ。此れア眞實まつたくの話だぜ。夫婦連で往來を歩いてゐる處を、いきなり後から行つて亭主を撲り倒して女房を掻攫かつさらつてそれなり雲隱れ

をしちまつた。此の廣いアメリカだものもう分るものか。一晩の中に何處か遠い處へ行つて女郎に賣れア、千弗は濡手で粟だ。お前さん、惡い事は云はねえ。早くどうかしないと飛んでもねえ事になるぜ。」

　新參の彼は眼に涙を浮べて居た。と云ふものゝ今の身分では如何する事もできない。以前の男は他の仲間二人と暫く顏を見合して何やら互に合點したやうに目と目で頷付き合ひながら、

「此うしたら如何だね。一層その事、此處へ嚊を呼び寄せたら………。」

「何ぼ何だつて、其樣事が………。」

「出來ねえと云ふのかね。其れア表向は何うか知らねえが、此の山の中の一軒家で、日本人は乃公おいら達三人きりだ。心配する事はねえ。此處へつれて來りやア、お前も毎日女房の顏が見られるし、乃公達だつて煮焚にたきや洗濯もして貰へるし、食ふものだつて、乃公達四人で分けてやりあア、女の一人位大した事はありやしねえ。」

　恁う云はれたが、然し彼は此の意見に對して同意する力も無ければ、又不同意を稱となへる資格もないのである。萬事は直ぐ樣彼男の云ふが儘になつた。乃ち次の日に、彼は彼男と共に市中まちに出て妻を連れて林の中の小屋に歸つて來たのである。

　暫時は事もなく、彼は幸福に妻と共に其の日を送つて居たが、丁度今日は日曜日と云ふのに朝から雨が降出し、一同は外へ遊びにも出られず、一日小屋の中で酒盛りを始めて、飲むやら唄ふやら、何時しか夜も晩くなつた。最う寢床へ行かうと云ふ時になると、彼男

は座を立ちかけた新参者をば、
「おい、鳥渡相談があるんだ。」と呼び止めて他の仲間と目を見合せた。
　小屋を蔽ふ森林しんりんは雨と風とで物凄い呻り聲を立てゝ居る。
「何です。」
「鳥渡お願ひがあるんだ。」
「何です。」
「外でも無い。今夜一晩嚊を貸して貰ひてえんだが………。」
「はゝゝゝは、大變醉ツてるね。」
「おい。醉つて云ふんぢやねえ。冗談でも無い、洒落でもない。相談するんだが、どうだい。」
「はゝゝゝは。」と新參者は餘儀なさゝうに笑つた。
「相談するのに笑ふてえ奴があるかい。」と今度は他の一人が「どうだい、兄弟の誼よしみだ。今夜一晩乃公達三人に貸して呉れめえか。」
「…………………」
「物は相談だ。どうだい。不承知なんかね。不承知ならまアいゝや。然し能く考へて見な。此の山ン中で、四人此うして働いて居てよ。お前一人好い目をして居るからつて、其れでお前は氣が濟むのか。能くある事ツた、風の吹く晩に山火事が起つたら、乃公達四人は死なば一緒だ———一人ぼツち仲間を置き去りにして逃げる譯にも行くめえ。本部からまかり間違つて食料が屆かない事でも有りやアお互に食ふものも半分づゝ分けなきやアなるめえ。人間は皆な兄

弟分。自分ばかりが好きやア其れで好いと云ふもんぢや無えんだぜ。乃公達はな、此のアメリカへ來てからもう五年になるんだが、たまに一遍だつて柔かい手に觸つて見た事もねえんだ。お前の寶物は誰のものでも無え、チヤンとお前様の物だと云ふ事は分つて居らア。だからな、乃公達はそれを無理無體に掠奪ふんだくツて乃公達のものにして了はうと云ふんぢやねえんだ。可いか、唯だ貸して貰はうとお願ひ申すんだ。」

「早い話しがよ。お前は乃公達の持つて居ねえものを持つて居るから、それを分けてくれと云ふのよ。」

「どうだい。話が分つたら、早く返事を聞かうぢや無えか。」

　男は死んだ人の如く眞青になり總身をぶる□□顫すばかり。女はその足許に泣き倒れて早や救を呼ぶ力さへ無い。

　風雨は猶盛に人なき深山の中に吠狂ふ。やがて小屋の中には一聲女の悲鳴。……それを聞くと共に男は失心して其の場に倒れて了つた。

　彼は蘇生したが、それなり氣が狂つて再び元の人間には立返らなかつた、彼は癲狂院アサイラムに收容さるゝ身となつたのである。

＊　＊　＊　＊

　私は殆ど茫然として了つた。友は早や草の上に横へた自轉車を引起し、片足をペダルに掛けながら、

「然し仕方がないさね、然う云ふ運命に遇つたのが不幸と云ふより仕様がないさね。我々は自分より强いものに出遇つたら、何をされても仕方がないよ。」と云つて二三間車を馳はしらせながら、後なる私の方を振り向き、「さうだらう、君。强いものには抵抗する事

は出來ない。だから我々は Mighty God ……乃ち我々よりは強い全能の神に抵抗する事は出來ない。いやでも服從して居なければならないのだ。」

一人彼は愉快さうに笑つて、夕陽の光眩き牧場をば、一散に車の速度を早めたので、私は無言の儘彼に遲れまじと、頻にペダルを踏みしめた。

何處からともなく野飼の牛の頸につけた鈴の音が聞える。南の方ポートランド行の列車が野の端れを走つて居る。

（明治卅七年一月）

岡の上

一

　最初この亞米利加へ來た當座、私は暫く語學の練習をする目的で、その時滯在して居た市俄古シカゴの都會まちからはミスシツピーの河岸に沿うて凡そ百哩あまり、人口四千に滿ちざる小さな田舍町に建てられた某なにがしと呼ぶ大學カレツジへ辿つて行つた事がある。已に人も知つて居る通り、米國のカレツジと云へば大概は同じ宗教組織の私立學校で、誘惑の多い都會をば遠く離れた景色の好い田舍に建てられ、教師は生徒と一緒に先づ理想的の純潔な宗教生活を營んで居る。今私の辿つて行つた學校も其等の一つで、私は最初此う云ふ邊鄙へんぴな土地へ來たならば、もう日本人には會ふ事もあるまいと思つて居た。處が意外にも、私は此に不思議な煩悶の生涯を送つて居る一人の日本人に邂逅したのである。

　市俄古を出てから四時間ほど。何處を見ても眼の達とゞく限りは玉蜀黍たうもろこしの畠ばかり。茫々とした大平野の眞中に立つて居る小さな停車場へ着くや否や、私は汽車を下り、重い手鞄を下げながら、雞や子供が大勢遊んでゐる田舍街の一筋道を行盡して、小高い岡の上、繁つた樹木の間に在る學校を訪問れると、如何にも親切らしい老としとつた校長が、市俄古の西洋人から貰つて來た私の紹介狀をも見ぬ中に、もう極く親しい友達同士であるかの如く顏中を皺にして笑ひながら、「好く尋ねてお出でなすつた。渡野わたの氏しはさぞ貴下を見て喜ぶ事であらう。何しろ彼の人は私共の處へ

お出でになつてから、丁度三年近く、一度も日本人にはお會ひなさらないのですから………。」

私は茫然として何の事か其の意を解し兼ねて居るにも關らず、老人は猶満面に笑を浮べて、

「ミスター渡野とは日本においでの時から御存じなのですか、又は米國こちらへ御出でになつてから御交際なすつたのですか。」

校長は私が日本人である處から、此の學校に居る同國人の渡野君を尋ねて來たものとのみ早合點して了つたので。然し此の誤解は直樣無邪氣な一場の笑ひとなり、私は續いてミスター渡野なる人に紹介された。

年は三十七八でもあらう。破れぬばかりに着古した縞の背廣に、色の褪せた黑い襟飾―――華美はでな市俄古の街なぞでは見られぬ位な質素じみな風をして居たが、黑い光澤つやのある頭髪かみのけを亞米利加風に長く生のばして金の鼻眼鏡を掛けた目鼻立、女にしたらばと思ふほど美しい。顔色は白いよりは少し蒼白い方で、その大きい眼の中には何處か神經過敏な事が現れて居た。

彼は校長が私に言つた言葉とは全然違つて、最初私を見ても別に嬉しいと云ふ色も見せず又意外だと驚く氣色もなく、無言で握手した後は殊更らしく天井を見て居た。恁かう云ふ風で私の方も彼に劣らず、極く人好きの惡い無愛想な性質である處から、私は唯彼が此の學校の哲學科で東洋思想史の研究に關する資料蒐集の手助けをして居る傍、折々聖書研究の講義室へ出席すると云ふの外は如何なる經歴を持つて居る人物だか、一向聞き知る機會が無かつた。

然し三月程經つた或る土曜日の午後である。私が此の地へ來たの

はさほど寒くはない九月の末であつたから、其の頃には深緑の海をなした玉蜀黍の畠も今は暗澹たる灰色の空の下に一望遮るものなき曠野となつて居る。

　午後の四時を過ぎたのみであるが太陽は早くも見渡す地平線下に沒し去り、灰色の空の間に低く一條の力なき紅色くれなゐの光を殘すばかり。空氣は沈靜して骨々に浸渡る寒氣はしん□□と荒野の底から湧起つて來る。私は停車場内の郵便取扱所へ行つた歸途校舍に近い岡を上つて行くと、一株枯木の立つて居る此の岡の頂きに、悄然と立ちすくみ、云ふに云はれぬ悲痛な顔付をして、寒さに凍る荒野の端はづれに消え去らんとする夕陽の影を見詰めて居る渡野君に出會つた。渡野君は私の姿を認めると唯一言、

「荒れ果てた景色ですなア。」とぢツと私の顔を見詰めた。

　私は異樣な樣子に驚いて直には何とも答へられなかつた。渡野君は俯向いたが今度は獨言のやうに、

「人は墓畔ぼはんの夕暮を悲しいものだと云ふけれど、それは唯だ「死」を聯想させるばかりだが………見給へ此の景色を。荒野の夕暮は人生の悲哀生存の苦痛を思出させる………。」

　其れなり無言で二人は靜に岡を下つた。彼は突然私を呼掛けて、

「一體、君は如何思つて居られる。人生の目的は快樂にあるか、或は又………。」と云ひ出したが、不意と自ら輕率な問を發した事を非常に恐れた如く鋭い目で私の顔色を窺ひ、更に、「君は基督キリスト教けうの神を信じて居られますか。」

　私は信じやうとして未だ信ずる事が出來ない。然し信ずる事の出來た曉には、如何樣どんなに幸福であらうかと答へた。すると、渡

野君は聲に力を入れて、
「懷疑派ですね。よろしい□□。」と腕を振動かしたが、軈て靜に、「君の懷疑說は如何云ふのだね。私も無論アメリカ人見たやうな信仰は持つて居ないのだから………一つ君の說を伺はうぢや無いか。」

此處で私は、遠慮無く私の宗教觀や人生觀なぞを語つたが、すると、其れは不思議にも彼の感想と大に一致する處があつたのでもあらう。彼は生々させた目の色に非常な內心の歡喜よろこびを現し頻しきりと私の才能を賞讃して呉れた。

誰に限らず未知の二人が寄合つて、幾分なりとも互に思想の一致を見出した時ほど、愉快な事は恐らくあるまい。それと同時に又此れ程相互の感情を親密にさせるものも他にはあるまい。

それからと云ふもの、私等二人は朝夕相論じ相談ずる親しい友達になつたので、問はず語りに私は渡野君の經歷も先づ大概は知る事が出來た。彼はある資產家の一人息子であつた。七年程前に洋行して、東部の大學で學位を取り、その後は暫く此れと云つて爲す事もなく紐育ニユーヨークあたりに遊んで居つたが、或る會合の席で此の學校の校長と知己ちかづきになり、丁度學校で東洋の思想風俗なぞの研究に關して、一人日本人が欲しいと云ふ處から、自分から望んで此の地へ來た。然し彼自身は其れ程深く東洋の學問は知つて居らぬ。辛うじて研究の材料を蒐集する手助けをする位なもので、此地へ來た第一の目的は他でも無い、持前の懷疑思想を打破り、深い信仰の安心を得たい爲めに、殊更選んで邊鄙な田舍の宗教生活に接近したのであるとの事。

彼は無論生活の爲めに職業を求むる必要がないとは云ふものゝ、此くも眞面目しんめんもくな煩悶の爲めに、已に學業を卒をへた後も、猶ほ故郷へは歸らず、獨り旅の空に日を送つてゐるのかと思つた時には、私は心の底から非常な尊敬の念を生ぜずには居られなかつた。

二

私はこの畏敬すべき友と寒い□□米國の一冬を甚だ平和に愉快に送過して、やがて四月といふ昇天祭イースターの其の日から、折々暖い日光に接するやうになり、程もなく待ち焦れた五月の訪問おとづれを迎へる時となつた。冬の寒氣さむさの忍び難いだけに、此の五月の空の如何に樂しいか。昨日までは全く見るに堪へぬ程寂しい不愉快な色をした平野の面も忽ち變じて一望限りなき若草の海となるので、其の柔かな緑の色を麗かな青空の下に眺め見渡す心地は何に譬へやうか。

私は林檎の花咲く果樹園を彷徨さまよふやら、牧場に赴いて野飼の牛と共に柔かな馬肥草クローバーの上に横臥よこたはるやら、或は小流れの邊ほとりに佇立たゝずんで、菫の花の香に醉ひながら野雲雀と共に歌ふなど、少くとも毎日三哩以上を歩まずには居なかつたであらう。富有な農家では毎日の午後ひるすぎを待兼ねるやうにして、馬車を馳らせて野遊あそびに出て行く。女や子供の笑ひ喜ぶ聲は到る處に聞えるのであつたが、此に唯一人、彼の渡野君ばかりは此の麗うるはしい春の來ると共に次第々々に陰鬱になり、遂には一度として私の誘出す散歩に應じた事もなく、自分の居室にのみ引

籠つてしまつた。

　或夜のこと私はその居室に訪問れて、無理にも想像しかねるその原因を聞きたゞし、出來るものなら幾分か慰めても見やうと思つて、その室借をしてゐる下宿屋の門口まで行つて見たが、いざとなつて見ると何となく妙に氣怯きおくれがして了つた。事實私はまだ瞭然はつきりと渡野君の人物を解釋する事が出來ない。恰も英雄偉人に對する時吾々は尊崇の念に伴うて或る畏懼ゐくの念を生ずる如く、私は今だに渡野君に對しては何となく氣味惡い感じを取除ける事が出來なかつたので、其のまゝ歩みを轉じて彼方此方と春の夜を來るともなしに去年の冬初めて渡野君と話をした岡の上に來た。

　その時分には瘦衰へて居た一株の枯木にも、今は雪の樣な林檎の花が咲き亂れ、云ふに云はれぬ香氣かをりの中に私の身を包んだ。柔かな草の上に佇立み四邊を眺めると、此れこそは地球の表面であるといふやうな氣のする程廣々した大平野の上に、朦朧たる大きな月が一輪。所々の水溜りは其の薄い光を受けて幽暗な空の色を映して居る。後の學校では女生徒の樂み遊ぶ音樂が聞え、近くの田舎街には家々の窓に靜な燈火ともしびの光が見える。

　魔術が作出したやうな夢とも思はるゝ異鄉の春の夜。

　私は忽ち恍惚として自分ながら解せられぬ優しい空想に陷つて居たが、突然後から肩を叩いて、「君」と一聲。思ひ掛けない渡野君である。彼は何か用あり氣に、「今、君の處をお尋ねした。」

「私の處を………。」と私は彼が室の戸口を叩き兼ねた事は云はずに了つた。

「實は急にお話したい事がある。それで君の處へ出掛けたのです

が………。」

「何です、何様事です。」

「まア此處へ坐らうぢやありませんか………。」と彼は私よりも先に林檎の花の下に坐つたが、暫くは無言で。大方私と同じく、大平野を蔽ふ春の夜の神祕に打たれたのであらう。然し忽ち我に返つた如く、私の方に向直つて、

「私は二三日中に君とお別れするかも知れない。」

「え。何處へかお出でになるんですか。」

「もう一度紐育へ行つて見やうと思ふです。或は歐羅巴ヨーロツパへ行つて見るかも分らん………兎に角この地を去る事に決心しました。」

「何か急用で………。」

「いや、私の事だもの別に用は無い。只感ずる處があつたから………。」と云つたが力ない語調てうしであつた。

「何をお感じなすつたのです。」と質問すると彼は一寸息をついて、「それを今夜君にお話したいと思つたのです。君との交際は未だ半年になるかならないが、何となく十年もお交際したやうな心持がするのです。だから、私は萬事殘らずお話して、そしてお別れしたいと決心したのです。然し又何處かでお會ひ申すでせう。君も此れからアメリカを漫遊なさると云ふのだから。」淋しく微笑んだ後彼は靜に語り出した。

三

日本の大學を卒業してから間もなく私は父親に別れてその儘家產

を譲受けたので、此の財力と新學士と云ふ名前とで、此後は自分の思ふ儘の方向に世を渡る事のできる頗る幸福な身分となつたのです。私の修めた學科は文學でしたから私は自分の周圍に集つて來る多くの友人の勸告する儘に一つの會を組織し、人生と社會問題の考究を目的に立派な月刊雜誌を發行する事とした。

兎に角私の名前は已に學生の時代から、折々投稿して居た雜誌新聞なぞの所說で多少一部の人には知られて居たので、今や父から譲られた資產を後盾にして堂々と世の中へ押出した景氣は先づ大したものでした。私の代表した團體は今度始めて世間へ出た若手の學士ばかりで組織されたのですが、其の機關雜誌は廣告を出したばかりで、未だ初號を發行せぬ以前から、もう世間一二の有力な雜誌の中へ數へられて居ました。私の周圍には無論阿諛あゆを呈する輩ともがらもあるので、此の當時私は全く自分に對する讃辭より以外には、殆ど何にも聞く事が出來ない程でした。

その時私は年齡二十七、まだ獨身でした、虛言うそか誠か、某伯爵の令嬢は私の演說する樣子を見てから戀煩ひをして居るとか、或は何處とかの女學校では私の人物評論から女生徒の間に一場の紛擾ふんぜうを起した抔云ふ噂も耳にしました。否現に一二通の艶かしい手紙さへ受取つて居たのです。

で、私は兎に角自分の持つて居る或力が、異性の心情に對して、微妙な作用を爲すものだと云ふ事を自覺せずには居られなくなつた———自覺すると同時に何とも云へぬ愉快を感じたのです。そして其の愉快は自分の主義と自分の人格が、世間から重く迎へられて居ると云ふ事を自覺した時よりも、更に深い快感であつた。何と云ふ

事でせう。私は如何に自分を辯護しやうとしても致し方がない。其の一瞬間、其の一刹那に、私の情が然う感じたのですから。

私は彼樣かやうに深い愉快を感ずると、其れに續いて、直樣此の快樂を出來るだけ進ませて見たいものだと思つた。すると心の中で、「早く結婚しては不可い。男の側から世に此上の美人は無いと云ふ位な人の妻と、其れ程ではない處女むすめとを比較べて見て、何れがより、、強い空想を起させるか。男の魔力も其れと同じ事だ。」と云ふ樣な聲を聞いたのです。

私はもう此の聲の奴隷です。出來るだけ自分の姿を綺麗にして、朝あしたには秋波しうはの光と微笑の影に醉ひ、夕となれば燈火きらめく邊に美人の歌を聞き、何時か二三年の月日を夢のやうに送つて了ひました。

然し或日の事、私は東京の人目を避ける爲めに、或る閑靜しめやかな海邊の小樓に美人三人までを連れて遊びに行つて居たが、それは丁度冬の夕暮で、午後の轉寐うたゝねから不圖眼を覺して見ると、私の最も愛して居た美人が唯一人、私の爲めに膝枕を爲せた儘、後の壁に頭を凭よせ掛けてうと〳〵と睡つてゐるばかり、他の二人は何處へ行つたのやら、室中は薄暗く、戸外の方では寛漫だるい潮の聲が遠く聞えるばかりです。

私は其の儘再び目を閉ぢたが、考へると今頃此樣處で私が此樣有樣をして居るとは世の中に誰が知つて居やう。世の中は唯だ潔白なる論客として自分のある事を知つてゐるのみだ。さう考へ出すと私は可厭いやな切ない感じに迫められた。尤も此れは今始めて氣が付いたと云ふのでは無いのです。最初から私は此種の快樂を決して賞

讃若しくは奬勵すべき善行ともしてゐませんし、又、慈善事業の廣告のやうに公然おほびらに發表すべき性質のものともして居ません。即ち極めて祕密にすべきものとして、今日まで巧に世間の耳目を糊塗ことして居たのです。此の後とても祕密にして行く事は容易です。今の世の中に此位の祕密が保つて行けないやうでは殆ど何事も爲す事は出來ますまい。私は此點から云へば確に自ら才子と稱しても差支は無いでせう。然し私の今感じたのは若しや私が此う云ふ祕密を持たず、云はば青天白日の身であつたら如何であらう。世間が想像する通りの淸い身の上になる事が出來たら愉快であらうか、不愉快であらうか。無論私は愉快であると決斷したです。何故ですか。祕密は一つの係累も同じ事で、云はゞ荷厄介な物ですからね。

こゝで私はいよ□□悔悟の時期に入る事となり、此後は斷じて俗世界の快樂には近寄るまいと決心した。同時に一日も早く獨身生活の危險を避け、自分の決心を斷行する助けともなるやうな神聖なそして賢明な妻を持たうと云ふ心を起したのです。

四

私は如何なる婦人を妻に選びましたらう。

それは看護婦でした。

その頃私は激烈な風邪に冒されて醫師の注意する儘に一人の看護婦を雇ひ、其の手に介抱されて居た。看護婦は其の時二十七歳の處女で、身丈せいは低い方ではなかつたが非常に瘦せてゐて容貌は何と評しませうか……兎に角醜い方では無かつたですが、然し男の心を惹く樣な愛嬌も風情も無いのです。頰の瘦せこけた顏の色は唯だ

雪の様に白いばかりで、何時も何事をか默想して居ると云ふ様に、沈んだ大きな眼を伏目にさせて居ます。幼い時に兩親に別れ、孤兒みなしごの生涯を神に獻げて居るとの事で。

　私は病中屢夜半に眼を覺ます事があつたが、其の時には必ず私は黃いランプの火影ほかげに聖書を讀んで居る彼女の姿を見ぬ事はなかつた。深け行く夜半に端然と坐つて居る眞白な彼の姿は何時も私をして云ふに云はれぬ平和と寂寞の感を起させます———此の感情の神神しく氣高い事は地上に住む人間以上のものとしか思はれぬので。私は考へるともなく若し恁う云ふ婦人と結婚したらば私は如何なる感化を受けるであらうか。私の妻に選ぶべき婦人は他にはあるまいと思つた。で、私は病氣が全快すると直ぐ、此の事を申出したのです。

　彼女は驚く心をぢつと押靜めて徐ろに辭退しました。然し私は無理にその手を取り今迄の罪惡を殘りなく懺悔して、私は神聖なる彼女の愛に因つてのみ世の快樂世の罪惡から身を遠ざけ誠の意味ある生活に入る事が出來るのだ………と云ふ事を話すと、彼女はぢつと聽入つた後、忽ち感激の淚を零こぼしながら、口の中で祈禱を繰返しました。人は笑ふであらう、或は私の事を醉興とでも云ふであらう。然し私は全くその時は彼女は私の身を救ふ天の賜物であるとのみ信じたのです。

　然し其れは非常な誤りでした。單に誤りならばまだしも、其れは一層私の身を不幸ならしむる原因になつた。私は彼女をば救の神として其手に賴り縋ると共に、彼女に對して滿身の愛情を注がうと企てたが、然しかの暖い柔い戀愛の情は如何しても湧いて來ないので

す。單に彼女に對する尊敬の念を起し得るのみで、つまり二つの精靈を一つに結付けて了ふ心地には如何してもなれなかつた。

　春の日の事、私は彼女と唯だ二人、强ひて色々な談話を私の方から仕掛けながら家の庭園にはを散步した―――夢の樣な麗かな春の日です。靑空は玉の樣に輝き、櫻や桃の花は今を盛りと咲亂れ小鳥は聲を限りに歌つて居る。若い血潮の燃える時は此春ならずして何れにありませうか。私等二人は花の下の小亭あづまやに腰を掛けやうとした時、私は彼女の手を握締めその頰の上に接吻して見た。彼女は私の爲すが儘にさせました。然し彼女の眞白な頰はその色ばかりでは無い、全く雪の樣に冷く、私の唇が感じた此冷氣は强ひて喚起した滿身の熱を盡く冷して了つたやうに思はれた。彼女は大理石の彫像です。私は握つた手を放し呆れたやうに其の顏を打目戍うちまもると、彼女は私の顏を見返してにつこり、、、、と淋し氣に笑つたのです―――私は覺えずゾツとしました。何の故か自分ながら解りません。唯何と云ふ譯もなく私の心の中には云ふに云はれぬ不快な嫌惡の情がむら□□と湧起つたのです。

　私は其の儘座を立つて獨り木立の方へ步いて行つた。彼女は別に尾いて來るでもなく矢張元の處に腰掛けて例の如く沈んだ眼で折々空を見上げて居るのでせう。軈て小聲に讃美歌を歌ふのを聞きましたが、其の讃美歌の調子が、此の瞬間には、何とも云へず不快に聞きなされた。私は實に自ら解するに苦む。讃美歌の調子と云へば私は以前放蕩の生活をして居る最中でさへ、折々星の靜な夕なぞ會堂の窓から漏れるその歌を聞く時には、如何にも人の心を休める靜な音樂として、少くとも不快な感を起した事などは無かつた。私は幾

分か情無いやうな心地になつて一度に譯も分らぬ色々な事を考へながら、木立の中を過ぎて裏庭の方へ歩いて行きました。

そこはかなり、、、廣い畠になつて居て夏の頃には胡瓜うりや豆の花なぞが美しく咲き亂れ、夕月の輝く頃など私は殊更此處を愛してゐたのですが、まだ種蒔をしたばかりの事とて、平かに耕した一面の土を見るばかり。然し何一つ遮るものが無いので大空から落ちる春の光は目も眩むばかりに明い。私は滿身に此の光を浴びて蒸される樣に暖かく、額際には薄く汗をかく程となつた。もう彼女の歌ふ讃美歌も聞えず、空中を飛過ぎる燕の聲を聞くばかり。春の日の日盛りは時として深夜よりも靜な事があります。今迄の混亂した考へも何處へか消去り、私は唯茫然として空の果に懶ものうく動いて居る白雲を見詰めながら、此度は畠の端の勝手近い家の傍へ歩を移した。

爛漫たる桃の花が目についた。すると忽ち此の桃花の間に女の姿………私は覺えず立止つた。桃の花は家の屋根を隱すほどに咲亂れた丁度その木蔭の低い肱掛窓に、女は兩肱を載せ横顔をばひた、、と其の上に押當てゝ餘念もなく午睡をしてゐるのです。すると一面に落掛る春の日光と窓を蔽うた桃花の反映とで、女の半面は云ひ難い紅の色を呈して居る。此方から眺めると、何うしても繪としか見えません。

一月程前に家へ行儀見習ひとかで奉公に來た小間使、年は十九とやら。然し私は其樣事を考へる暇は無い。忽ち綺麗な蝶が一つ、ひら□□と飛んで來て、紅色を呈した女の愛らしい耳朶みゝたぶをば何かの花瓣はなびらとでも思つたかその上に棲とまつた。

私はもう世の中の事も自分の身の上も何も彼も忘れて居ます。無論此の瞬間には自分は此の女を愛して居るか否かと云ふ事も意識しては居ません。唯その傍へ行つて、燃えるやうな頰に觸つて見たいと、私の身中を流れて居る血が私に恁かく命令したのでせう。私はすつと傍へ近寄らうとした。が、其の時女は不意と眼を覺すや否や驚いて四邊を見廻す途端に、私の姿を認めて、少時しばしは爲す處も知らぬやうに………次の室の方へ逃げ込んで了ひました。

實に些細つまらぬ事件ことである。然し私の身には正しく非常な大事件です。私は此の日から自分では意識せぬ間に絶えず以前の華美はなやかな生涯を回想し始めた。私の耳には音樂や美人の囁きが聞え眼には紅裙こうくんの飜へる樣が見える。私は自分の身を救つてくれる神の化身とまで尊敬し自ら強ひて妻と選んだ彼女の事をば露ばかりも腦中には置かぬやうになつた………單に其れのみならば猶まだ可い。段々彼女を嫌ふ程度を強めて來たのです。私は一心にこの惡心を制壓しやうと試みた。同時に彼女に對して此の精神の變化を知らすまいと非常に苦心した。然し何も彼も無駄らしかつた。彼女は何も云はず又少しも素振には現さなかつたが、彼の沈んだ伏目で既に何も彼も知り抜いて居るらしく見えた。私は軈て彼女を恐れるやうになり、なりたけ彼女の眼から遠からうとしたです。すると如何でせう。彼女は其れをも見抜いて居ると見え、向うからも成るべく姿を見せぬやうにと、終日自分の居間に閉籠つて了つたです。私は實に何とも云へません。唯だもう泣き度いやうな心持になりました。

と云つて私は此儘に打捨てゝは置けない。一度妻と選んだからに

は如何しても彼女を愛さねば成らないのです。私は半分夢中で如何にかして彼女に對する嫌惡の情を取去りたいと焦せれば焦せる程、事實は增〻惡くなるばかり。遂には何となく氣が變になつたやうに思はれました。或夜私は睡眠中に不意と何か物音を聞き付けたやうに思つて、喫驚して眼をさましたが、すると何時の間にか彼女が眞白な看護婦の着物を着て、端然きちんと私の枕許に坐つて居る樣な氣がするかと思ふと、忽ち何處からともなく聖書を讀むやうな聲が聞える。其の聲の陰氣な事氣味の惡い事と云つたらお話にはなりません。私は覺えず寢床から飛起きるや否や枕許のマツチを搜さぐり取つて燈火を點けた。誰も居やう筈は無い。唯だもうしん〳〵、、、、とした夜です。

　これから每夜のやうに陰氣な聖書の聲が聞え出して安眠する事が出來ない。一層その事結婚した當時のやうにもう一度彼女と並んで寢て見たら如何であらう——恁う思返して私は然う行やつて見たが益〻不可い。夜が深けると共に、眼はいよ〳〵冴えて來る。私の傍に横はつて居る彼女の身體は宛然まるで石の樣に冷たく感じられ、次第々々に私の身體の熱までが冷て行くやうで、若し今夜一晩彼女と同衾どうきんして居たら、彼の美しい花を見て愉快を覺え、暖い酒に觸れて甘きを覺える私の神經はもう二度と再び然う云ふ微妙な働きをする事が出來ないやうに次第に無感覺となつて行くが如く思はれる。私は一生懸命に掌で自分の皮膚を摩擦して多少の熱度を得たいと試みたがそれも無効であつた。私は若し此處で眼を閉ぢて眠つて了つたなら、屹度其の儘死んで行くに違ひない———明日の朝暖い太陽が花園の花を照しても、鳥が歌ひ出しても、私はもう其れ等

を見聞する事は出來まいと云ふやうな氣がして眼を閉つぶる事が出來ないのです。

　夜の深け行くまゝに糸の樣な彼女の寐息が耳につき始めます。絕えやうとしては又續く其の呼吸につれて、彼女の肉體に宿つてゐる靈魂は、次第々々に彼女が絕えず夢みて居る天國へと夜の靜寂しづけさに乘じて昇り行くのではあるまいかと思はれ、觸るとも無く、私は竊そつと片手を彼女の胸の上に載せて見た。彼女は仰向けに寐て居る其の胸の上に犇ひしと兩手を組合せ、全く少しの身動きさへしません………忽ち氷の如く冷たいものが私の手に觸つた。覺えず私は手を引込めたが漸くに手捜りして見ると、それは彼女が何時も肌身離さず持つて居る金の十字架でした。

　此う云ふ風に每夜不眠の結果から身體は著しく疲勞して、辛くも晝間の轉寐に幾分かの休息を得ると云ふ有樣。此うなつては是非とも彼女の傍を遠ざかる必要が出來て來ます。彼女と同じ屋根の下に生活して居る間は到底如何なる手段も無効であると思ひ、餘儀なく私は旅行と云ふ事を思ひ付いて遂に外國行と云ふ事に決心したのです。

　私は早速勉學の爲めと稱して米國へ行く事を妻に話しました。彼女は例の如く悉皆すつかり私の心中を見拔いて居ると云ふやうに、何の異議も稱へず直樣承知してくれました。私は財產の三分の一を彼女の生活費として辭對するのを無理やりに受取らせ飄然へうぜん此のアメリカへ來たのです。

　その後の事は一々お話しする必要はありますまい。御存じの通り、何しろ此の米國と云ふ所は人間社會の善惡の両極端を見る事の

出來る所です。人は何方どちらへなりと隨意に好む方へ行く事が出來ます。書と云ふものなき祕密倶樂部の一室、眞赤な燈火の下で、裸美人の肩を枕に鴉片あへんの夢を見るもよし、又は浮世の榮華なぞは何處にあるかと思ふやうな田舍の宗敎生活、朝な夕な平和な牧場に響渡る寺院の鐘の音を聞くのもいゝでせう。

　私は兎に角一通り米國社會の大體を見たからは此の上此の地に止まる必要もない。何時でも日本へ歸つて而そして以前よりはもっと華やかに私の好む如何なる事業をも爲す事が出來る。然し私にはまだ一つの疑問がある。私は今後再び浮世の快樂を回想するやうな事はあるまいか。私は故國に歸つて幸福に彼の氷のやうに冷い我妻と生活する事が出來るだらうか。無論人は多少の差こそあれ、何れも克己こくきの力を持つて居ますから、私だとて決して自分を制して行かれぬ事は無い。が、然し私は其では滿足が出來ないのです。朝に聖書を展げた手で、夕竊ひそかに酒杯を擧げたい位なら、（例へ禁欲し得られるにもせよ）寧ろ進んで酒杯さかづきのみを手にするが好い。制欲と云ふことは意志の稍強いことを示すより外には全く無意義のものです。牢獄の中の囚人は一番の聖人です。彼等は牢獄の中に居る間は何一つ惡い事はしません。

　私は自ら好んで此のイリノイス州の淋しい片田舍にもう三年近くを送つたのですが、私はまだ自分から安心する事は出來ません。私はもう一度都會の生活、都會の街に輝く燈火を見るつもりです。そして私は此後の生活について最後の決斷を與へるつもりです。

　私は明日貴兄あなたとお別れします。私は如何に決斷するかをお知らせする爲めに、遠からず二つの中何れか一枚の寫眞をお送りし

ませう。若し私にして、幸ひにも自分の豫想して居る如く、心の底から快樂の念を去ることが出來て居たならば、貴兄は私が看護婦と結婚した時の寫眞をお受取りなさるでせうし、若し然うでなくば、私は………然うですね、佛蘭西あたりの妖艶な舞姫の寫眞をお送りしませう。それに因つて私の此の後の生活の如何なるかを御推察なすつて下さい。

（明治卅七年十二月）

醉美人

　千九百四年の夏、聖路易市セントルイスしに開始された萬國博覽會を見物するのに、私には望んでも得られぬ程な好い案內者があつた。

　それはＳ——と呼ぶアメリカ人で去年さるとし市俄古シカゴの町端れの同じ下宿に泊り合した事から、懇意になつた畫家であるが、今度の博覽會にはその作をも出品して居ると云ふ上に、去る頃から丁度セント、ルイスに程遠からぬミズリ州のハイランドと云ふ田舍に住んで居つたので、私はその男に電報を打つて置いた後、やがて北方のミシガン州から汽車で十五六時間の旅路———途中の景色と云へば米國大陸の常として唯廣漠たる玉蜀黍の畠と、折々は家畜が水を飲んで居る小川の邊や二三軒百姓家が立つて居る岡の上なぞに、果樹園らしい樹の茂りを見るばかり。それでも私は唯一人でいろ□□と愉快な空想に左程倦うみ勞つかれもせずイリノイス州を横斷し盡すと、もうイースト、セント、ルイスの町からミスシツピーの大河に架けられたイーヅ、ブリツヂと云ふ有名な橋をも後にした。

　汽車の窓から河向うにセント、ルイス市の街端れの屋根が見え出す頃になると、北米新大陸の諸所方々から此の中部の都會を終點として集り來る鐵道の線路は蜘蛛の巣を見るが如く、到底とてもその數を讀む事は出來ない位である。砂塵と石炭の烟が渦巻いて居る中に種々雜多な物音が一ツになつて唸るやうに湧返つて居る停車場の敷地へ這入ると、山のやうな大きな機關車が幾輛ともなく黑烟を吐

いて行きつ戻りつして居る。其間をば此れは東部の方へ出發するのであらう二列の汽車が相前後しつゝ、我々の列車と擦れ違つたかと思ふと、向うの端の線路には、又我々と同じ方向に進んで行くのもある。諸有あらゆる米國鐵道會社の列車は此の中央大停車場のプラツトフオームに並んで着するのである。

　私は列車を下りて群衆と共に長いプラツトフオームを行き盡し、高い鐵柵の戸口を出ると、其處は高い屋根、下はセメント敷の廣場に、男女の帽子は海をなして居る。私を出迎ひに來てくれた彼のＳ氏はかう云ふ混雜には能く馴れて居るアメリカ人の事とて、早くも私の姿を見付けて駆け寄り、「How do you do」と元氣の可い聲で私の手を握つた。

　私は挨拶などは扨さて置いて直樣如何云ふ作を出品したのかときくと、彼は如何にも滿足したやうにサンキユーを二度も繰返したが、其れは後の樂みにゆつくり話さうから何れにしても彼の住んで居るハイランドまで來るがよい。市中の旅館ホテルは此の暑さに加へて上を下への混雜。とても居られたものでは無いと云ふ。私は導かれる儘に宏大な石造りの停車場を出で、照り輝く夏の日光に馬車くるまや人が押合つてゐる往來をば二丁程歩いて行くと、Ｓ――氏は、

「あの青く塗つてある電車カーに乘るのだ。一時間ばかりでハイランドの僕の家の向う角で止る。」と云ひながら、軈て行過ぎる一輛の電車に乘り、セント、ルイスの賑やかな街を離れた。

　汚い小屋と居酒屋サルーンや木賃宿ロツヂングなぞが大きな煉瓦造りの製造場と入り亂れて居る街端れを通り過すと、青々した野草

の上に繁り合ふ楓と槲の林が、電車道の兩側に現れて、行けども〳〵更に盡る時がない。重合つた細い木の葉に射し込む日の光と、折々枝の間から透いて見える青空の色の美しさは何ともいひやうの無いほどである。飜つてかのカスケード山ロツキー山或は北米の西北岸一帶の地を占領して居る暗黑な濕つた大深林が唯人をして恐怖の念のみを起させる事を思出すと、此のミゾリ州の林は實に何と云ふ優しい愛嬌を持つて居るのであらう。

　私は此の林を愛すると叫ぶと、Ｓ――氏は嬉しさうな顏をして、「僕の住んで居る處は恁う云ふ楓樹の林の中に立つて居る小な村で、青々とした草とリボンの樣な水の流、何時も青い空、此れより外には何にも無い所だ。然し私の宿つて居る家の女房おかみさんはいゝ牝牛と羊を飼つて居るから手製の甘いクリームを御馳走しやう。」と云ひながら鳥渡時計を引出して見て、「もう直きだ。此れからカークウツドと云ふ林の間に村がある。それを一ツ通り越しさへすればすぐハイランドなんだから。」

　云ふ中に大方その村の事であらう。矢張青々とした樹の間に、石造の大きな寺院が聳えて居る人家の間を過ぎて、道は緩ゆるやかに上つたり下つたり。暫くするとＳ――氏は私の肩を叩いて、「此處だ此處だ。」と云ふ。

　下りて見ると、成程藍色あゐいろの空と青い木の葉を眺めるばかりの靜な村である。セント、ルイスを始め繁華な市街では百度以上の激しい暑さも、此處は木の葉に囁く風の涼しさ。林を越して見晴す牧場の方では夏の午後をばさも懶氣ものうげに鳴く牛の聲が聞え、近く人家の裏畠では鷄が鳴いてゐる。先刻一時間前に通過ぎた

セント、ルイス市中の喧騷を思起すと夢のやうな心地である。

「博覽會フエーヤーへ行くのには少し遠いが、然し電車に乘れば四十分ばかりで行ける。僕と一諸に此邊に宿を取る事にしては…………。」

　Ｓ——氏が此う云ふのに何で私は反對しやう。丁度此邊の村では市中まちからの避暑客、殊に今年は博覽會の見物人をも目當に何れの百姓家でも一番綺麗な室をば貸間にと準備して居るので、私はＳ——氏の室借りをして居る家から一軒置いて隣りへ逗留する事とした。

　その翌日からは早速博覽會の見物である。先づ第一にＳ——氏の出品を訪はねばならぬ。

　私は彼と共に電車で博覽會の裏門に着し、林の間を潛り拔けると直樣三棟に分れて居る美術館に達する。中央の一棟が合衆國の出品陳列場で此の中に彼の作品も陳列されて居ると云ふ。私は直樣その場への案内を賴むと、彼は先に立つて陳列室を幾室も素通りした後、やがて稍狹く細長い一室に這入つて、鳥渡立止りながら此方を振向き、

「あれです。」と西側の壁に掛けてある一面の裸體畫を指した。

　埃及エジプトか亞剌比亞アラビヤあたりの女をモデルに爲たのであらう、頭髮と眼の黑い肥えた女が、長椅子の上に仰向きに横はり、僅に顏だけを此方に揉ねぢ向け、其の手には半分ほどになつた葡萄酒の杯を持つて居る。洞然ぱつちりとした大きな黑い眼は陶然たる微醉に早や瞼も重たげになつて居ながら猶何物をか見詰めて居るらしく云ふに云はれぬ表情を示して居る。Ｓ——氏は暫く無言で

自作の裸美人に對して居たが、やがて、

「私の一番苦心したのは無論この微酔ほろゑひの眼だが、然し其れよりも猶苦心したわりに餘り人が注意して呉れないのは有色人種の皮膚の色だ。私の心では酒の暖氣あたゝかみが全身に漲り渡ると共に有りと諸有る血管中には所謂暖國の情熱が湧起つて來る―――其の意味を私は眼の表情よりは寧ろ燈火の光を浴びた此の皮膚の色で現したつもりなんだが、如何です、さう見えませんか。」

　私は何れとも答へられずに猶無言で見入つて居ると、彼は直ぐ言葉を續けた。

「尤も此う云ふ題目は美術の中に這入るべきもので無いかも知れん。私は以前懇意だつた佛蘭西人の實驗からふと此う云ふ作品を試みやうと云ふ考へを起した………。」

　猶語り續けやうとしたのであるが、此の時室の中には五六人の女連が高聲に話し合ひながら這入つて來たので、彼は鳥渡その方を振向きながら、

「どうです。そろ□□見て歩きませう………參考品の陳列場にはミレーやコローを始め英佛の大家の作も少しは集めてあります。」

　我々は其の方へと歩いて行つた。遂に中央館の出品も大概は見了つたので、今度は東側の建物に這入り、此處に陳列せられた英吉利イギリス、獨逸ドイツ、和蘭オランダ、瑞典スヰデンなぞの出品を見歩いて居ると、時間の經つのは驚くばかり早く、閉場時間の六時も間近くなつたので、西側の建物に陳列せられた佛蘭西、白耳義ベルギー、墺太利オーストリヤ、伊太利、葡萄牙ポルトガル、日本なぞの出品は他日に讓る事として、我々は群衆と共に東側の美術館を

出で、正面に廣い三條の階段と大な水盤から漲みなぎり落つる瀑布をひかへた大音樂堂の下の腰掛に勞れきつた腰を下した。

　此處は周圍七哩以上もある會場中最も壯觀を極むる處である。遙か彼方の正門から、高い記念碑と幾多の彫像の立つて居る廣場を望み、宏壯な各部の建物が城のやうに並び立つて居る間に湖水とも見ゆる廣い池が、我々の頭上に聳ゆる高い水盤から、階段の間を流れ流れて落ち込む瀑布の水を受け、凄じい噴水の周圍に種々の小舟や畫舫ゴンドラを浮べて居る樣まで、一目に見下されるのである。

　やがて夕日は場内の何處かで打出す鐘の音と共に後方の森に沈み盡すと、望む限りの眞白い建物は一樣に青く赤く取り□□のイルミネーションに飾られる。すると蒼白い空の下に立並んで居る無數の裸體像は燈火の光を浴びて、階段の周圍や各館の屋根の上から、今しも其の眠りより覺め、彼方此方で奏し出す折からの音樂バンドにつれて、浮き出して踊るが如くに思はれた。

　Ｓ——氏は口の中で頻と嚙煙草を嚙み碎きながら、階段を上つて來る群衆の姿をば一人□□眺めやる中にも、殊に若い綺麗な婦人をんなが通り過ぎると、獨りで頷付いては其の後姿までを精密に見送つて居る。

「モデルになる樣なのがありますかね。」と訊くと、彼は嚙煙草の唾をば無遠慮に吐き捨てながら、

「滅多に有るものぢや無い。然しモデルにはならないまでも、兎に角肉付の可い若い女を見るのは非常に愉快なものだ。此の愉快は我々が神樣から授與さづかつた大特權の一つなんだから、我々男性は一生を女の研究に委ねる義務があるです。其處へ行くと流石は佛

蘭西人ですね、私の極く懇意な友達に、佛蘭西から出張して居た新聞記者があつたが、その男は一體男性の身體は女性からして、何れだけの愉快を感得する事が出來るものかと云ふ研究の爲めに、到頭中途で若死をして了つたのですよ。身を犧牲にしました。もう餘程以前の事ですがね、私は此の男の實驗談の一つを、どうかして、何時か一度自分の作品に現して見たいと思つて居たが、漸く今度あゝ云ふものを描いて見たのです。畫題をお話しましたかね。微醉の裸美人………あれは『夢の前の一瞬間』と云ふ題ですよ。」

　私は云ひ置く事を忘れたが此のＳ——氏は非常な佛蘭西好きの男である。然し未だ佛蘭西へ行つたこともなし、その國語も其れ程深く知つては居ないが、彼は一世紀程前に新大陸に移住した純粹の佛蘭西人の血統を受け、殊に其の祖父なる人が佛蘭西から來た女優と結婚したと云ふことを以て、彼は確に美術家たるべき血液を持つて居ると信じて居る。そして意志の強い、頭腦の餘りに明瞭な亞米利加人は、決して美術に成功すべきものでは無いと獨斷して居るのである。

　彼は噛煙草を吐きすてゝ、今度は葉巻シガーを取りだし、私にも一本差出して、

「あの男の研究は我々には實に價値あるものでした。モツシユー、マンテローと云ふ男でしたがね、亞米利加へ來た當座は此樣殺風景な國には到底居られたものではない。意氣な作りの女なぞはさて置き鼻の突尖ツた猶太人と唇の厚い黑坊くろんぼばかりで、晩餐デンナー一ツ心持よく食へる處もないなぞと頻に不平を云つて居ましたが、その中に不思議も不思議、黑人の血が交つて居る雜種の婦人に

熱中し始めたです。

　如何した原因いはれかと云ふと、或晩町の料理屋レストラントで夕飯を濟した後、一人ぶら〳〵散歩して居る中ふと汚い小芝居の前を通り過ぎた。入口には彩色した種々の看板や寫眞が出て居る中で、一人小肥りの婦人が片足を高く差上ながら踊つて居る畫があつた。此樣畫は本場の佛蘭西では鳥渡往來へ出さへすれば、一時間の中に何百枚何千枚眼にするか知れない。だからマンテロー君は無論深い注意を拂ひはしなかつたが、然し其の儘通過ぎもせず、切符を買つて内へ這入つたです。

　アメリカの街には何處にでもある寄席ボードビルで、輕業、道化踊り、種々な樂器の曲弾きよくびきなぞ、軈て其れ等が濟むと、表の看板に出してある其の主人公であらう。大分黑人の血が交つて居る一人の女が短く切つた頭髮を眞中から分け半身を現はした裾の短い衣裳を着け舞臺へ駈出るや否や盛に踊り初めたです。然し彼の眼には何の珍しい事もない。忽ち咽喉許へ込上げて來る叭あくびを漸と呑込んで居たものゝ、まさか外の方を向いて居る譯には行かないので、據所ないやうに茫然と舞臺の方を眺めて居たが、する中に彼は不圖、黑人の娘の特徵とも云ふべきでツぷり、、、、した肉付の如何にも豐であるのに氣が付き、續いて一體白人の女の肉付とは何う云ふ點が違つて居るのか知ら。いままでは別に注意して居なかつたが之れは研究すべき重大の問題であらう………と次第に其の方へ氣を奪はれて來ると、舞臺の女は踊りの一段毎に、鳥渡身體を休める度々、大きな黑い眼に情を持たせて、見物人の方を眺めるのが、又もや彼の新しい注意を引いた。あの眼付はどうも我々文明の人間

の眼付でない。動物の眼付だ。馴れた家畜が主人に食物を請求ねだる時の眼付である、と思ふと、マンテロー君は好奇心を押へる事が出來なくなつて來た………否此う云ふ好奇心は强ひても呼起さうとする彼の事とて、其れから三晩ばかりは毎夜その寄席へ行き續けると、何の譯もない話。互に最初の握手をしてから一時間と經ぬ中もう馴れ〳〵しく腕を組んで、一諸に女の宿つて居る家へと遊びに行つたのです。

彼は此處で容易く此う云ふ事を發見しました。此の雜種の婦人は文明國の婦人の樣に種々技巧的な身振や樣子、又は思はせぶりな談話の中に餘韻を殘して男の心を飜弄し、而して自ら愉快とするやうな望みは少しも持つて居なかつたが、其の代りに、身體中の神經が感じ得られる愉快は餘す處なく睫毛の細かい戰ぎから微妙な指の先の働きに至るまで、出來得る限り强い愉快を感じやうと企てゝ居ることでした。

其の晩は丁度寒い冬の事で、彼女は其の室をばすつかり、、、、と閉め切り、火をドン〳〵焚きます。そして其の傍近く天鵞絨張びろうどばりの柔い長椅子を引寄せ、男と二人で長々と身體を延ばし、先づ第一に靴と足袋を取つて了つた素足の指先から足の裏を暖め、次には後頭部あたまを抱へる樣に兩手を後に組み、身體の全體が段々に暖められるに連れて、幾度か欠伸のびをする樣に力を入れて、彼方此方に身體を捻つて見、此れで最う充分に全身の筋肉が柔くなつたと思ふと、最後に最う一度、手の先から足の指までに滿身の力を籠めて見る。それからホツとばかり大きな息を吐くと共に、忽ちグツタリとなつて男の上に半身を投倒し、さて徐々と極く香の

強い土耳古トルコ煙草を燻しつゝ、その青い烟が、薄紅な火筒ほやを掛けた燈火の影に、動きもやらず棚曳く樣を、餘念もなく打眺めるのです。

　已にして、彼女は男と二人して一二本の巻煙草をも喫み了ると、今度は、彼女の身にとつては寶石よりも尊い三鞭酒シヤンパンをば、一杯グツと飲み干す。すると忽ち、銘酒の暖氣は身體の中から、煖爐の火は其の外部から、一時に彼女が全身の血潮を、出來得る限りまで激しく湧返らして了ふので、彼女は最う瞼も重氣に、半ば其の眼を開くのさへ退儀らしく、而もぢつと男の姿から四邊の室中を眺め遣る。然し其れも僅の間で、彼女は身中の骨々がすつかり抜けて了つたと云ふ樣に、だらりと其の片手を長椅子の上から、床の上に投落したまゝ、うと□□と夢に入るのですが、此の夢に入る瞬間は、乃ち彼女が此の現世の上の天國と信じた處です。

　マンテロー君は此の珍奇な發見に對して大に滿足する所があつたのでせう。三月ばかりの間は一晩とても缺した事なく其の室を訪れて居ましたが、然し此う云ふ男の常としてふいと氣候が變り出すと同時に、何か知ら他に變つたものが見たくなつて來たのです。で、彼女を見るのも、いよ□□今夜ぎりで止めて了はうと決心したばかりでは無い、彼は明瞭はつきりと彼女に向つて、

「當分の中仕事が急しいから遊びには來られない。」

と云ひ置いて歸つて來たが、さて翌日の夜になつて毎も晩餐を準へる料理屋まで行つて見ると街の燈火に行きかふ婦人の姿が晝間よりは更に風情あり氣に見られる。彼は唯有とある四辻の角に佇んで居た。すると忽ち今迄覺えた事の無い、妙に氣が急くやうな心持がし

て、何處と云ふ目的あてもなく頻と早足に歩き出したが、やがて不圖心付いて見ると、此は如何に、何時の間にか彼の女の宿つて居る家の前に來て居るのです。

　恁うなつては今更引返す譯にも行かない。其の儘女の室の戶を叩くと出迎へた彼女はもう今夜ぎり來られないと云つた彼の言葉に對して、少しは驚くか或は喜びでもするかと思ひの外、平素いつもの通りに直樣例の二人して坐る長椅子へと、男の手を取つて連れて行く。其の樣子は如何しても最前からチヤンと彼の來るのを知り拔いて居たものとしか思はれ無い。

　さてこそ前夜もう來られないと云つた時別に殘り惜しいと云ふ樣子もせず如何にも沈着おちついた風で、「はい、さうですか。」と答へたのだ。其の時已に自分が此處へ來べきものたる事を知り拔いて居たのだと思ふと、彼は譯もなく無暗と空怖しくなつて一層室から飛出さうかと危く腰掛から立上らうとした途端、女は彼の手を握るや否や重い半身を彼の膝の上に投掛けました。

　女の身體の熱い事まるで燃える火のやうです。彼はその熱度をば握り締められた手で直接に一分間とは感ぜぬ中に、其の胸は忽ち息苦しい程喘はずんで來るばかりか、己れの身體中の熱度まで、次第〳〵に女の方へ吸取られて了ふやうな心持がする。その時女は其の大な眞黑まつくろな瞳子ひとみを定めてぢーツと彼の顏を見入りながら、

「今夜ぎりお出でになら無いんですか。」と極めて沈着いた聲で云ひましたが彼はもう答へる氣力が有りません。

　ぢーツと見詰めた其の眼には明かに、お前は如何に逃げやうと急

つても私が一度見込んだからには何處までもお前を自由にせずには置かないのだから………と云ふやうに思はれ、彼は全身を通じて顫を感ずると共に、もう何樣事をしても駄目である。自分は此の女の餌ゑじきである———鼠が猫の前に出たやうな或は狼の前に子羊が立ちすくんだやうな果敢ない犧牲いけにへの覺悟が、我知らず心の底に起つて來るのでした。

　哀むべし。マンテロー君は最初の中こそ、自分は男である、主人であると云ふ自信を持つて、彼女をば馴れた柔順な家畜として愛し戲れて居たのですが、何時の間にやら、知らず□□、彼女の身體を包んで居る怪しい見えざる力の下に壓せられて、それから脫する事が出來ないものとなつて了つた。此う云ふ話は貴君も已に御存じかも知れない、波斯ペルシヤや土耳古なぞの昔話に動物が若い綺麗な妃を見込んで到頭それを取殺して了つたなぞと云ふ事もある。して見ると此の佛蘭西の紳士も人間よりは動物の血を澤山に持つて居る黑人の娘にすつかり、、、、見込まれて了つたとでも云ふのでせう。

　彼は如何かして彼女から遠かりたいと絕えず悶えて居ながら、依然として其の傍へ引寄せられて居る中、さうです、一年ばかり過ぎた後の事でせう。非常に健康を害して米國の寒い冬を避ける爲め一先佛蘭西へ歸り、伊太利の暖地へ行きましたが、不圖砂漠の風が持つて來る熱病にかゝつたので、衰弱しきつて居た身體では到底たまりません。到頭其處で死んで了ひました。」

　Ｓ——氏は語り了ると共に微笑みながら私の顔を眺めて、

「君は如何思ひます、マンテロー君は軍人が戰爭で死ぬと同じく、

己の好む道に斃たふれたのですから、私は彼を悲しむと共に賞讃しますよ。もう大分晩くなりました。今夜は彼の主義にならつて舌の神經が感じ得られる限りの美うまい肉美い酒を味はうぢや有りませんか。何處の料理屋が可いか知ら。まアそろ□□下りて見ませう………。」

　Ｓ——氏は久しく腰を下した腰掛ベンチから立上つたので、私もそれに續いて、とも□□に廣い階段を一段々々大な裸體像の並んだ下を降りて行つた。

　夏の夜の涼しさに池の邊や廣場の木影には幾組の男女その數を知らず、今やイルミネーシヨンに耀き渡る不夜城は諸有る音樂と諸有る歡喜の人聲に湧返つて居る最中である………。

長髪

春來れば花咲き鳥歌ふ田園とは事變り、石と鐵、煉瓦とアスフアルトで築き上られた紐育では、帽子屋ミリナリーの硝子戸に新形の女帽が陳列せられるのを見て人は僅に春の近きを知るのである。

風の吹く三月は過ぎ折々驟雨ゆふだちの降り來る四月、其の昇天祭が更衣ころもがへの日と云ふ例になつて居るので、よしや順ならぬ時候の少し位寒い事は有つても、この日を遲しと待つて居る氣早い紐育の女連中は飾りの多い冬着を捨てゝ、洒々しや□□たる薄衣の裾輕く意氣揚々と馬車自動車を走らせる。

自分は色彩の變化に富む此の國の流行を喜ぶ一人なので、晴れた日を幸ひに出盛る人々を眺めやうと、午後ひるすぎの三時頃第五大通フイフスアベニユーから中央公園セントラルパークの並樹道を歩いて見た。幾輛とも數限りなく引續く馬車や自動車の長閑のどかな春の日光を浴びつゝ徐おもむろに動き行くさま、繪に見る巴里のボア、ド、ブーロンユの午後ひるすぎも實げに此くやとばかり。

並樹道の兩側に据付けたベンチには此の豪奢の有樣をば見物の人々列をなす中には自分も聽て席を占め、一輛々々と過行く車の主を眺めて、そが流行の選擇嗜好の善惡よしあしに一人盡きせぬ批評を試みて居た。

する中、遠くの彼方から四つの車輪と御者の衣服きものから帽子までをば一齊に濃い藍色にした一輛の車が青々した木蔭を縫つて進んで來る。

他所よそならばいざ知らず、此の華美な藍色が晴れた春の青空と

明い深綠の色に調和して誠に好く人の目を惹くので、自分はその近付くを待ち車の主こそは如何なる人かと眺めると、帽子を飾る駝鳥の毛をば同じ藍色に染めそれに釣合ふ華美な衣裳———然し年は左程若からぬ一婦人で、其の傍に相乘したのは何處の國民とも知れず、眞黑な頭髪を宛ら十八世紀の人の如く肩まで垂し、短い赤い口髯にリボン付の鼻眼鏡を掛けた若紳士である。

　居並ぶ腰掛の人々は何れも奇異の思に驅られたらしく、「あの男は一體何處の國の人だらう。」

「メキシコ人ぢや有るまいか。」

「あの眞黑な毛の色合はどうしても西班牙スペインの種だから大方南亞米利加からでも來た人だらう。」

と云合ふ者もあつた。

　車は馭者の打振る鞭の下に近く眼の前を行過ぎて、直樣後から引續く車と車の間に隱れて了つた。

　見物の人々の話題はなしも轉々窮りなき目前の有樣につれて次から次へと移り行くのであつたが、自分ばかりは最一度あの藍色の車を見たいと、その行過ぎた大路の彼方を見送つたまゝであつた。かの黑い頭髪の紳士と云ふは最初一寸見た瞬間こそ、自分の眼にも等しく異樣に思はれたものゝ、間近く目前を行過ぎる中によく□□見れば如何に風采を粧ふとも、爭はれぬは眉と眼の間の表情で分明に自分と同人種の日本人たる事を證明して居たからである。

　そも如何なる日本人であらう。車を共にして居た金髪ブロンドの婦人は其の妻であらうか。或は單に親しい友達と云ふに過ぎぬか知ら。

幸ひにも一週日ならずして自分はこの抑へ切れぬ好奇心を満足させる事が出來た。それは或處で去頃コロンビヤ大學を卒業し今では紐育の或新聞社に關係して居る日本人の一友に出遇ひいろ□□雜談の末に、何氣なく其の事を話すと、彼の友はさも豫期して居たと云はぬばかりの語調で、

「さうでしたか、あの男を御覽になつたのですか、全く鳥渡見には日本人とは見えますまい。」

「如何云ふ人ですか、御存じですか。」

「よく知つてゐます。丁度私と一緒の船でアメリカへ來たのですし、其後私がコロンビヤ大學に這入りました時も矢張一緒になりましたから………。」

自分は次の樣な物語を聞いた。

かの男、その名を藤ケ崎國雄と云ひ資產ある伯爵家の長男です。米國に留學してコロンビヤ大學に這入りましたが、然し教場へ出るのは、ほん、、の義理一遍で、米國の華美な自由な男女學生間の交際を專門に、春はピクニツクや馬乘、冬は舞蹈や氷滑りと、遊ぶ事のみに日を送つて居たのです。

一年二年と過ぎ三年目の夏休みが來た。私は學費を充分に有たぬ身分故、夏休中に講師某博士の家の藏書畫を整理して幾何の報酬を得る事にしたが、さう云ふ必要のない國雄は北米大陸の瑞西スヰスとも云ふべきコロラド山中の溫泉場から世界七勝の一に數へられてあるイエロー、ストーン、パークを見物にと出掛けて行きました。

間もなく秋になり大學は再び開始され學生は四方から歸つて來た

が、國雄は何處へ行つたのやら音沙汰が無い。

　私は想像した。國雄はもう學校が厭になつて了つたに違ひない。彼の性質としては其れも無理はない。讀書する事よりは遊ぶ事が好き――――遊ぶと云ふよりは寧ろ安逸無為に時間を消費する事が好きな男である。私は日頃彼が其の居室の長椅子もしくは木蔭の青芝の上に身を安樂に横たへ葉巻の烟をゆつたりと燻くゆらしながら、何を考へるともなく、何を爲すともなく、悠然空行く雲を眺めて居るのを見る時、あゝ、此の世に此樣怠惰な人間があらうかと思ふ事が度々でした。

　忠告しても無論效かひは無いと思つたが又何樣機會はずみで復校する氣になるかも知れないと、私は誠實な手紙をば二通ほど、然し旅行から歸つて來たのやら來ぬのやら居處が不明なので、止むを得ず夏休前の寓居に宛てゝ郵送しました。

　併し一向に返事がないので、私は稍失望しつゝも或日の夕方散歩がてらに其の家を訪問すると、出て來た宿の主婦から國雄は二週間ほど以前に、一先歸つて來るや否や、直樣公園西町の○○番地へ轉居したとの話に力を得て、早速その番地をたよりにして行くとセントラル、パークに面した十階ほどの高いアツパートメント、ハウスに行き當つたです。

　私は紫色の制服ユニホームに金釦を輝かした黑奴の門番ポルターに訊くと、日本の紳士は八階目の室に居るとの事で、昇降機エレベーターに乘つて其の戸口の鈴を押して見た。

　廣い建物の事とて外の物音は一切遮られ、廊下の空氣は大伽藍の内部のやうに冷に沈靜して居るので、私の押した鈴の音が遠く室の

彼方で鳴響いてゐるのが能く聞取れます。稍暫く取次を待つて居たが一向人の出て來る氣勢けはひもない。此の度は稍長い間ベルを押試みるとやがて靜な跫音が聞え一人の婦人が其の顏ばかりを見せるやうに戸を細目に開けた。

　私は帽を脫つて丁寧に禮をなし、「藤ケ崎と云ふ日本人に面會したいのですが………。」

　すると婦人は私を客間パーローへと案内してくれたが、狹い廊下を行く時何か氣遣し氣に見て見ぬやうに私の顏を窺見ぬすみゝしました。

　婦人はさうです………年頃はもう二十七八かとも思はれます。括くゝり頤の圓い顏で、睫毛の長いパツチリした碧の眼には西洋婦人の常として云はれぬ表情があるが、ブロンドの頭髮をば極く緩かに今にも其の肩の上に崩落るかとばかり後で束ねたのと、豐艷ふくやかな肩と腕とが見える室內用の寬ゆるいアフターヌーン、ガウンを着た爲めであらうか、その姿は私の眼には厭らしく艷なまめかしく見えた。

　案内された客間に一人殘されて私は國雄の來るのを待つて居ると、隣の室で大方國雄に語るらしい婦人の聲が聞えた。やがて戸をあけて、「どうも失禮しました。」と國雄は一寸私の顏を見て何か氣まづさうに俯向いた。私は極く無頓着な調子で、

「さぞ御愉快でしたらう旅行は………。時に如何です、學校の方は。」

「ア、學校ですか。つい行きそびれて了ひました。もう止めです。」

「今お止めになつちや惜しいものです。もう後一年か二年も教場にさへ出て居れば兎に角學位ぐらゐは取れるぢやありませんか。」
「私も此れなり退學して了ふ心ぢやないのですが、つい朝………つい朝晩くなつて了ふものですから………。」
　私は云ふべき語を失つて其儘默つた。薄い霞のやうなレースカーテンを引いた窓越には公園の黄み掛けた木立に午後の日光が靜かにさしてゐる。忽ち隣の室で如何にも徒然らしく洋琴ピヤノの彈ずると云ふよりはたゞ鍵キーを弄ぶ響が聞えたが、五分と立たぬ中にハタと止んで、あたりは又元の靜寂しづけさ。
　國雄は聞くともなく聽き澄まして居たが忽ち何か決心した樣に、
「君の御深切は全く疎おろそかには思ひません、御手紙も拜見したです。然し當分………又その中に復校するかも知れませんが、先づ當分は學校は休むつもりです。」
「さうですか。其れなら私も強ひてとは云はないですが、然し君、一體如何して其樣決心をされたのです。」
　何氣なしに云つたのであるが、私の「決心」と云ふ語が、彼には深く意味あるものに聞えたと見え、彼は少時しばし驚いたやうに私の顏を見詰めて居たが、又何やら思返したらしく、
「いや、別に決心した譯でもないです。唯少し讀書にも飽きましたから、保養がてら暫く遊んで居たいと思ふんですよ。」
　此の日は其の儘歸宅したが四五日過ぎて、晴れた秋の夕暮、私はハドソン河畔の大通りを散歩して居ると、偶然にも彼と其の家の婦人とが一輛の馬車に相乘しつゝ行くのを見た。
　此の國では男女の相乘などは何の珍しい事もないのであるが、私

は殆ど何と云ふ意味もなく若しや二人の間に何かの關係がありはせまいか。國雄の廢學した原因も其の邊に潛んでは居まいかと、疑ふともなく、ふと此樣事を疑つて見ると、誰しも一種の好奇心に驅られるが常で、私は自分の疑心が作り出した事實を確かめたいばかりに、其の後はそれとなく引續いて國雄を訪問しました。

　度重る此の訪問は國雄には定めし迷惑であつたかも知れないが、私に取つては頗る興味がある。私の推察の當らずとも遠からざる事が次第々々に確められて來るやうです。

　私は何時も取次に出て來る黑奴くろんぼの下女に案内せらるゝまゝ、或日の事、其の客間に這入ると、公園を見晴す窓際の長椅子に、二人が犇ひしと相寄つて坐つて居るのを見たし、又、或時は、二人が一つの盞グラスから葡萄酒を呑み合つて居るやうな處へ行き合した事もあつた。

　二人が戀して居る事だけは明瞭になつた。

　私は進んで、其の事の原因おこりと婦人の身分、此の二事ふたつを知りたいと思ひ、機を見て國雄を責めると、彼も今は最初ほどには臆せず、夏休の旅行中、山間のホテルで懇意になつたのが始まりで、女の身分は離婚された富豪の寡婦である事を話した。

「何して離婚デボースされたんです。」

　私は更に問を進めると、

「畢竟つまり不品行だつたから………。」と彼は止むなく其の知つて居る限りを話しました。

「一口に云へば浮氣性とでも云ふんでせう。小說などを讀んで面白いと思ふと、直ぐ自分も其樣身の上になつて見たくて堪らないと云

ふんですからね。結婚してから一年も經たない中にポーランドから來た韃靼種だつたんだねの音樂家に迷つて密會したのが、つい夫の耳に這入つたので、到頭夫の財産の四分の一を貰つて、離婚と云ふことになつたのださうです。一度世間へ耻を曝出して了つてはもう上流のソサイエテーには顏出しが出來ませんからね、つまり、いくら金があつて容色がよくツても世間からは日陰のものです。斯うなると、誰でも却つて自暴自棄になるもんで、夫人は其れからといふもの、隨分、種々雜多な男を玩弄おもちやにしたさうですよ。」

　私は意外の驚きに打たれ、「君、君は………其樣不德な婦人と知つて居ながら、平氣で彼の女を愛して居るんですか。」

　國雄は無論だと云はぬばかりに默つて微笑む。私はいよ□□驚いて、

「一體、君はあの女から愛されて居ると思つて居るんですか。其樣怖しい女なら………一歩讓つて愛されて居るとしても、ほんの一時で、直に又、他の男に手を出すかも知れないぢやありませんか。」

「其ア何とも請合へません。併し、私には一時でも關かまは無い。其の一時が苦しい事なら兎も角、スヰートな事である以上には五分間でも一分間でも關ひませんよ。つまり愉快な夢を見たゞけ德ぢやありませんか。」

　彼は再び微笑して讀書ばかりして居る私には學問以外の事が何で分るものかと寧そ蔑むやうに私の顏を見ました。

　私は全く解釋に苦みました———聞くも恐しいやうな夫人の身の上を知りながら國雄は如何して愛情を催す事が出來るのであらう。

　他日私はドーデーのサツフオーなどを讀んで、男と云ふものは或

る事情の下には随分淺間しい經歴の女をも、非常な嫌惡の情と共に、又非常に熱烈な情を以て愛し得るものである事を知りましたが、國雄の彼の夫人に對するのは其れとは又全く趣を異にして居るやうです。

私は彼を見る度々種々なる方面から遂に其の眞相を探り得た。一時私は一種厭な感に打たれて彼の面に唾したいやうにも思つたが、更に一歩深く觀察した後には一轉して私は世にも不幸な性情に生れ付いた男であると、同情の涙を禁じ得ないやうになつたのです。

國雄には堂々たる强い男性的な愛の感念が微塵も無い。全く男女の地位を反對にして男の身ながら女の腕に抱かれ、女の庇護の下に夢のやうな月日を送りたいと云ふ、俗に男妾をとこめかけとも稱すべき境遇、此れが國雄の理想なのです。

日本に居た時分に彼は多くの青年が誘惑されると同樣に丁年に達せぬ前から早く狹斜の地に足を蹈み入れた。金は有り家柄はよし、其れに美男と來て居るから、随分向から熱心になる若い美しい女もあつたけれど、彼は其等には見向きもせず、己をば弟か何かのやうに取扱つてくれる或老妓の情人になつて得々として居た。

世には金錢上の慾心から年上の女に愛されたいと思ふものが多いが、彼のみは富よりも猶高價な名譽と地位とを擲なげうつてまで、其の奇異な一種の望みを遂げやうとする。彼は一時家名を汚した罪で勘當同樣の身となつたが、之れは結句、其の望む所、彼は春雨の朝晩く女の半纏を肩に引かけ朝風呂に出掛けるやうな放逸な生活を樂しんだ。

此れではならぬと伯爵家では遂に彼をば外國へ追ひやるに如くは

無いと決して、此處に國雄は米國に遊學したのである。然し運命の惡戲とでも云はうか。伯爵の若殿は幾千哩の外國まで來て再び美しい魔の捕虜になり、其の身は愚今は家をも國をも忘れて了つたのです。

私は繰返して運命の惡戲と云ひませう。國雄はもうかれこれ二年ほども、彼の夫人の下に養はれて居ますが、其の間絕えず彼が如何に飽かれまい、見捨てられまいと苦心しつゝあるか。笑止と云ふよりは寧そ涙の種です。

私は云ふに忍びない話を澤山知つて居ますが、此處に其の一つを話せば貴君が公園で御覽になつたと云ふ彼の長い髮の理由です。

一體女と云ふものは男が下手に出れば出る程暴惡に專制に成り易いものであるが、殊に彼の夫人のやうに世間から排斥され、云はゞ長く逆境に在ると神經が過敏になつて、理由わけもないのに腹立つて、日頃は非常に大切にして居る器物や寶石を壞して見たり、或は非常に愛して居る自分の戀人を打擲したりする事がある。

然し國雄は何事をも忍びます。或日夫人は例の如く國雄を散々に苛んだばかりか、遂には自分の美しく結んだ頭髮までを滅茶々々に搓つて、挿した寶石入りの櫛を足で踏碎いた。其の時の心地は何とも例へられぬ位、丁度夏の日に冷水を浴びたやうであつた………ふい、、と此れから思付いたのであらう、夫人は國雄にヘンリー四世の像のやうに其の頭髮を長くして見せてくれと云ひました。

國雄は光澤ある黑い髮を房々と肩近くまで延し其の先をば美しく卷縮らした。

貴君は車上の彼が姿を御覽になつて、あの長髮をば定めし極端な

ハイカラ好みとでも思はれたかも知れぬが、其の實は夫人が癇癪を起した時、彼はその長い髪を引捲ひきむしらせ、そして狂亂の女に一種痛刻な快味を與へる爲めなのです。

（明治卅九年五月）

春と秋

　市俄古シカゴ紐育ニューヨーク間の鐵道が西から東へと一直線にミシガン州の南部を横斷して居るその沿道の小い田舎町にＫ——なにがしと云ふ大學ユニバシテーがあつた。少からぬ男女の學生中には日本人も三人交つて居た。二人は男子をとこ一人は婦人をんなである。山田太郎と呼ばれたのは女生徒の竹里菊枝と同じく神學科の生徒で、各自日本の或る教會から派遣されて居るのであつたが、他の一人大山俊哉と云ふのは宗教には關係の無い身分で政治科に學籍を置いて居るのであつた。

　三人は同じ年に渡米して、偶然にも此の學校へ來合せたので、初めて顔を見合せた時には互に眼を見張つて暫しばしは挨拶もせずに居た程であつた。殊に法學生の俊哉には此の萬里の異郷に髪と瞳子の黒い同人種の女を認めた事が、殆ど在り得べからざる程不思議に感ぜられたのである。彼は學校の廊下や食堂なぞで菊枝の姿を見る時には、何と云ふ譯もなく其の方へ頸を向けずには居られ無かつたので、一月とたゝぬ中彼は頭から足の先まで菊枝の姿は悉く心の中に暗記そらんじて了つた。然し彼は決してかの姿を賞讃して居る譯ではなく絕えず批評を加へて居るのであつた。年紀としは十九か猶二十を越しては居まい。頭髪は黒く光澤つやがあるが、前髪に癖があり、生際が亂れて居る。色は日本人にしては白い方で、低からぬ鼻と締りのある口許の愛嬌だけが其の特徵であるが、何と云ふ圓大まんまるな顔、何と云ふ小い眼、何と云ふ薄い眉毛であらう。日本製と覺しい粗末な洋服を着た狹い肩のあたりの肥え過ぎて、何か重

い荷物でも背負つて居るやうに、半身を前に屈まして居る姿勢は何と評しやうか。その太くして短い腕、芋蟲のやうに形を失つた指の形。俊哉は仔細に品評し來つて、日本の女學生と云ふものには、如何して此のやうな模型タイプの女が多いのであらう。日本の女の智能と生理上の關係はよろしく科學者の研究すべき重大の問題ではあるまいかと、何やら深い息をついて彼は女學生の往來する本郷や麹町かうぢまちあたりの街の有樣を思ひ浮べ出したが、其の中に知らず□□此度は自分の過去の事に思を移してしまつた。

　彼は其の當時、世間の風潮につれて、大學と改稱した或る法律學校を卒業したものゝ、思はしい職業を得る事が出來ない處から、相當の資産ある家に生れた身を幸に米国へ渡つたのである。嘗て土曜日の晩と云へば必ビヤホールや牛肉屋の二階で女中に戯れた事やら、寄席へ出る女藝人の批評に口角泡を飛ばした事、向島の運動會の歸りに初めて吉原へ繰込んだ時の事、牛込の忘年會から初めて待合へ泊つた時の事、それから、自分の爲めに開かれた送別会の大騷ぎ………。遂に飜つて現在の有樣に思到れば、來た當座こそ學校の教場、學生の會合、往來の樣子から、街端れの田園ゐなかの景色まで、皆珍しからぬ物は無かつたが、日を經るまゝに見馴れてしまふと、所謂「異郷に於ける異郷人」。俊哉は何一つ適當な娯樂を見出す事の出來ない淋しさに、讀書にも倦む折々詮方無しに神學生の山田を訪れるのであつた。すると山田は毎いつも默讀して居る聖書を閉ぢ丁寧に、

「お掛けなさい。如何です、英語はなか□□困難ですな。」

　俊哉は無造作に、「何か面白い事は無いかね。」

「今夜演說があります。」山田は相手の質問に對して最も適當な返答であると信じてゐるらしく卽座にかう答へて、
「流石クリスト教の國だけに好い牧師の演說が聞けるのが、私には何よりの樂みです。今夜は市俄古のＢ――と云ふ長老が、下町の教會で說教するさうですから、あなたも是非如何です。アメリカでも有名な牧師です。」
　俊哉には宗教上の事は少しも趣味がないので、
「然し僕には分りますすまいから………殊に神學上の演說は………。」
「そんな事はありません。」と山田は稍熱心な調子になり、足の短い割に、ヅングリした胴の長い半身を前に出して、「今夜のは別に宗教上の演說と云ふ譯では無い。禁酒と禁烟について何か話されるのださうですから、誰れが聞いても分ります。學校の生徒達も皆な出掛けるやうです………。」
「生徒も皆な………竹里さんも行きますかね。」俊哉は返事に窮して意味もなく問うたのである。
「竹里さん………行かれるに違ひありません。女の生徒達も無論出掛けるのですから。」
「男の生徒が各自に一人々々女の生徒を誘つて行くのでせう。米國流にあなたも一ツ、竹里さんを誘つて、腕を組んで出掛けちや如何です。はゝゝゝは。」
「然し、どうも私には………。」山田は切口上で、少しく顏さへ赧めたが、俊哉は此樣こんな冗談を云つて居る中、突然菊枝を誘出して、アメリカ人のやうに腕を組んで歩いて見たいやうな氣がしだし

て、どうやら抑制する事が出來なくなつた。

　山田は傍らから、猶も頻と講演を聞きに行くことを勸める。講演を聞く聞かないは兎も角、只會堂へ這入つて、風琴オルガンの音を聞くだけでも精靈に偉大の感化を與へるものであると、誠を籠めた調子で勸められ、俊哉も今はほとんど否とは斷り兼ねた。

　どうせ行くものならば是非にも菊枝を誘つて見ねばならぬ―――俊哉はいよ□□其の日の夕暮男女の學生が兩方の寄宿舎から晩餐の食堂に集まる時、菊枝の來るのを靜に呼止めて、

「あなた、今夜下町の教會へお出になりますか。」と訊くと菊枝は唯、

「はい、參ります。」

「いらつしやるんですか。私も行くつもりですから、それぢやお誘ひします。別に御迷惑な事はありますまい。」

　菊枝は案の定返答に窮したらしく、もぢ□□して俯向いて了ふ。

「學校の生徒も皆誘ひ合つて行くさうですから、日本人は日本人同士で出掛けて見たいのです。山田さんにも其の話をしたら大に贊成だと云ふ事なんですから、ね、竹里さん、どうせいらつしやるなら、別に御迷惑ぢやありますまい。」

　全く別に迷惑と云ふ程の事ではない。唯菊枝は男女の交際を禁止されて居る日本の習慣上意味もなく安からぬ氣がするだけなので、到頭其の夜の八時を約束に迎ひに來る俊哉に誘はれて寄宿舎を出る事になつた。

　教會までは三十分ばかりの道のり、冷かな十月半の夜は閑靜しめやかである。菊枝は絶えず安からぬ樣子で四邊を見廻すと、後にも

先にも同じ學校の女生徒が各自男の生徒と腕を組み、早や黃葉しかけた並樹の下に明い電燈の光を浴びながら步調をそろへ、靴音高く敷石を踏鳴らす。中には口笛でマーチを奏しながら行くのもある。俊哉は犇と寄り添ひ菊枝の手を取つて、

「御覽なさい。竹里さん。皆あの通り愉快にそろつて行くぢやありませんか。」

　やがて敎會に這入つた。神學生の山田は先に來て居たので、三人は後側の腰掛を占め、高い天井の模樣、奧深い階段の上のパイプオルガン、隅々の窓の繪硝子なぞを見廻して居る中に、間もなくフロツクコートを着た此の敎會の牧師と鼻の先へ眼鏡をかけた大きな禿頭の白い髯のある長老が現れて、牧師が聽衆に向つて當夜の演題を紹介すると、老人は直樣、Ladies and gentlemen と呼びかけて講演を始めた。

　俊哉は近くの席に坐つて居る若い女の容貌の美醜よしあしから、帽子や上衣、頭髮や襟飾の結び方まで、仔細に眺め廻して居たが、長い講演の續き行く中には、それにも飽きてしまつて、今度は遣り場の無い眼を、熱心に聞き入つて居る菊枝の顏に移した。何時も見る通りの圓い□□顏である、が、然しあの小い眼をもう少し大くし、眉を濃くしたなら、高い鼻と締つた口許の愛らしさに、或人は美人の名を許すかも知れない………と一々に容貌の缺點と特徵とを分析して居た後、さらに一步を進めて萬一、自分は此の女から愛されて居るとしたら、自分は如何なる態度を取るべきものであらうと、此樣途法もない空想に耽り出した途端、演壇の上の長老は忽然聲を强めてハタと卓を叩いた響に、俊哉は喫驚して空想から覺め

る。と、自分は今外國に來て居るのだ。何處を見ても異つた人種ばかり、自分の所有物と云つては自分の着て居る物より外には何にもない。日本に居た時、下宿屋の二階から往來を通り過る娘を批評したのとは、境遇を異にして居る。測らずも此に恁かうして日本の女生徒と並んで腰掛けて居られるとは、何たる不思議の運命であらう。自分は一も二もなく運命の前に平伏して、その賜物を感謝しつゝ受けねばなるまい。俊哉は暫く眼を閉ぢ更に明い電燈の光に菊枝の顔を見たのである。

　二時間ばかりで演說は終つた。俊哉は來た時のやうに菊枝の手を取り、山田も共に打連れて、各その部屋に立戻つたが、寢床へ這入つてからも俊哉は何やら取り止めのない空想に耽つた。彼はいつか菊枝と面白い間なかになつて了つたやうな心持になると、淋しい此の頃の生活が俄に活氣づき、日曜日の午後なぞ、二人で牧場の草の上に坐つて戯れる有様が目にあり□□と見えて來る。そして急に明日が日曜日であるやうな氣も爲出す。獨で思はずはゝゝゝゝと笑つて寢床ベツドの上に寢返りを打ち、何か決心したやうに獨で頷付いた。

　俊哉は全く決心したのである。すると直に成功するかどうか知らと云ふ疑問が起つて來る。彼は此の疑問を更に二分して見て、全然成功は不可能であるか、或は單に容易でないと云ふに過ぎないか。俊哉は過去の經驗から第一の疑問は否定する事が出來たが、第二に移り成功は容易でないとすると、如何なる程度を意味するのであらう。意味が廣いだけに彼は大に此の返答には窮して了つた。で、まづ理論を離れ、自分の知つて居る實例の方面から解釋するに如くは

無いと思立ち、日本に居た時分某なにがしが西洋料理屋のお何を手に入れた道筋、某それがしが女義太夫に失敗した逸話、誰それが思掛ない事から看護婦を得た奇譚。其の他嘗かつて讀んだ戀愛小說中の事件なぞ數限りなく想起して見たが、その中に作者も題目も忘れ果てゝ居る一篇の短い飜譯小說の趣向が此の場合大いに參考すべきものであると氣付いた。

　何でも磁石力の理論から說き起して、或る男が久しい間或女を思込んで居たが、どうも迫つて見る機會がない。一夜圖らずも戀の成立つた夢を見たので、男は驚き目覺めたが、如何にしても思に堪へやらず、折好くも出合はせた女の姿を見るや、前後の思慮もなく、矢庭に駈寄つて物も云はずに、女の手を握り締めると、不思議や女は久しい以前から已にその男の情婦ものであつたやうに柔順すなほに男の心に從つたとやら。俊哉は篇中の主人公に對して非常に羨しく又妬しくも感じたが、さて此の主人公が得た女と云ふのは、一體何樣性質の女であつたのか知ら。菊枝とは人種が違つて居るとすれば深く參考の材料にはならないかも知れない………夜は何時かふけそめて寄宿舍中は寂々として物音なく、運動場の樹木に風の戰ぐ音と、遠い汽車の響が聞えるばかり。俊哉はいろ□□と考へて見た末手紙をやるにしても時期がまだ少し早過る。とすると先づ第一に取るべき手段は絕えず近寄つて相互たがひの間を親しくさせるより外はないと、極々平凡な結論に到着し、自分ながらもどかしく腹が立つて來て、夜具の毛布けつとを足でハタと蹴返した。

＊　＊　＊　＊

　秋も早や行かうとする。俊哉が初めて此の地へ來た夏の盛の頃に

は、高い楓の並樹が青々とした大きな廣い葉で、靜な學校の門前の往來をば左右から蔽ひ冠せて居たが、今は朝夕の冷かな霧に見る見る黃葉して、いさゝかの風にもばさり□□と重さうに散りかける。寄宿舍の高い窓から裏手の田舍を見渡すと、小丘をかの半腹へと斜に上りかける果樹園も道端なる農家の生垣も齊しく落葉して、取り殘された林檎の實のみが夕陽の光で宛で大きな珊瑚の玉のやうに輝いてゐる。牧場には野草がまだ青々と生茂つてゐるが、その間を流れる小川のほとりの白楊みづやなぎはもう細い枝ばかり。

　俊哉は每週土曜日と日曜日には必ず菊枝を誘ひ出して、自然の美を愛し田園の風趣を味はうと云ふので、なりたけ人の見えない靜な野邊を選んで步くのであつたが、菊枝も今は慣れるに從つて親しくアメリカの男女間に行はれる交際を見ると、全く日本の習慣とは違つて、案外健全で神聖である事が分るので、俊哉に手を引かれる事をば最初ほどには恐れぬやうになつた。

　十一月の第二日曜の頃、俊哉は例の如く、牧場の端れへ菊枝を誘ひ出し、かすかな音して流れる小川のほとりの柔かな野草の上に腰を下した。

　此國ではインデアン、サンマーといふ通り、空は限りなく晴渡り、午後の日光は眩く輝渡つて居たけれど、野面のもせを渡る風は靜ながら、もう何となく冷い。裏手の小山から處々に風車の立つて居る村の方を顧ると、檞樹オークの林が一帶に紅葉して居て、其の間から見える農家の高い屋根には無數の渡鳥が群をなして、時々一團々々に空高く舞ひ上る。程なく來べき冬を豫知して南の暖い地方へ歸つて行くのであらう。

菊枝は餘念もなく此の長閑な風景を眺めやる中、突然何處からともなく、からん□□と靜な鈴の音が聞え出してつい四五間先の茂つた草の間から、一頭の大きな牝牛がその頸につけた鈴を振り動しながら、のそ□□歩み出した。

菊枝は日本の女性の常とて、喫驚して我を忘れ俊哉の方に寄添ふ。俊哉は早くもこの機に乗じて菊枝の手を取つたが、然しさあらぬ調子で、

「大丈夫ですよ。此の近所の農家の乳牛でせう。馴れて居ますから大丈夫ですよ。」

牝牛は柔和な眼で二人の方を眺めたが、何か思出したと云ふ風で、再び頸にぶらさげた鈴をばからん□□と音させながら、元來た方へ立去つて聽て又ごろりと臥ねて了つた。

菊枝は始めて安堵したらしく息をついたが、自分の手が堅くも男に握締められて居るのに氣が付き以前よりも更に驚いた。手をば振拂ふ勇氣もなく顏を眞赤にして俯向きつゝ息をはずます。

俊哉も今は胸の騷ぎを押へ得ない。何と云はう。何と云つて百尺せき竿頭かんとうに一歩を進めやう。

彼は火のやうな女の耳に口を寄せ、日本語によらずして英語で囁いた。すると菊枝は聲をも立て得ず、極度の恐怖おそれと驚愕おどろきに襲はれたと見え、眞青な顏になり總身をぶる□□顫はせたばかりか、兩眼から涙をはら□□。

俊哉は流石途法に暮れた體。然し其の握つた手は猶も放さずに、

「菊枝さん□□。如何したのです。」と態わざと沈着おちつした聲音を作る。

　菊枝は其の場に俯伏して猶身を顫はして忍泣くのである。

　以前の牝牛が又歩み始めたのであらう。寂とした牧場の草の間で鈴の音が聞え始めた。

＊　＊　＊　＊

　最初の失敗には懲りず、俊哉は如何かしてもう一度菊枝を靜な野に誘ひ出したいと、一心にその機會を求めたが、以後菊枝は俊哉の姿さへ見れば直樣それとなく逃げて了ふ。

　次の日曜日は空しく過ぎその次の日曜日は待つかひもなく雨であつた。

　十一月の末一度空が曇つて雨になればもう郊外に出づべき秋は全く去り、一日□□と增まさり行く寒氣さむさと共に枯木を搖する風は次第に强く、間もなく灰を撒く樣な雪が此の風にまじつて降つて來る。冬の天地は以後三ケ月間と云ふもの積るが上にも積る雪の中に埋盡されて了ふのである。

　俊哉の望も共に埋め去られて了つた。然し一度燃えた若い胸の火は每日氷點以下の寒氣―――北方の大湖レーキ地方から押寄せて來る寒氣にも消え遣らず、彼は日課の如くに手紙を菊枝の許に書き送つた。

　遂に書くべき文句の盡きた時には書棚の上に載せてある詩集の中の一篇をその儘寫し取つて送つた事もある。然し何の返事も無い。俊哉は何通手紙を書いたか、自分ながらも覺えが無いやうになつた。餘りの事と遂に彼は自暴やけ半分、我が燃ゆる千度百度の接吻を御身が冷たき頰の上に………と云ふ文句だけを大く英文で書いてやつた事もある。返事は猶更ない。

俊哉は遂に窮して元氣を失つた。馬鹿らしいと笑つた。そして忘れたやうに手紙を書く事をよして了つた。する中或朝ふツと空が青々と晴れ渡り、日光が微笑み、南の風が吹いて、岩よりも堅く凍つて居た雪が解け始めた。

冬が過ぎて春が來たのである。

牧場には去年のまゝに野草が青々と茂出す。小山を昇る果樹園には林檎や桃の花が咲き亂れ若芽の輝く檞オークや楡ヱルムの林には駒鳥が歌ひ始める。北國の冬と春との違ひほど著しいものは有るまい。

若い男は若い女の手を引いて再び野の花を摘みに行くでは無いか。然し俊哉はもう菊枝の此の世にある事も忘れたかのやう。

或日の夕暮、例の如く食後の散歩から歸つて來た時、彼は机の上に置いてある一通の手紙を見て不審さうに其の封を切つた。

「やツ、菊枝さんの手紙だ。」

彼は遠い□□昔の事でも思返す樣に腕組をして、さて其の手紙を讀むと、菊枝は去年から何通とも知れぬ男の手紙に對して返事をしなかつた詫言を繰返した後、重り重る男の手紙男の熱情を思返すと、彼女は最早や自分を制する事が出來なくなつた、愛の力は何物よりも强い。今は只御身の腕に我身を投げやうとの意味を長々と書いたのである。

俊哉は時ならぬ頃に此の豫想外の返事を得たので、暫くは呆返つて、夢ではないかと思つた。二度三度女の手紙を讀み返した後早速返書を送つた。

彼は翌日の午後去年の秋の末に二人腰を下した牧場の小川の畔

に、再び菊枝の手を取つた。

　その翌日、又その翌日、俊哉は毎日の午後には必菊枝と共に村の小道や小山の果樹園、又は學校から程遠からぬ墓地などを歩いた。森の中で日が暮れ、栗鼠がきゝ、、と鳴く老樹の梢に星が輝き初めた時、俊哉は夕風が寒いからとて菊枝を己れの外套の中に抱きすくめた事もあるが、菊枝はもう拒む力がない。二人して野にさく菫の花を摘んだ時、男は其の一束を襟にさして遣るとて、顔を近寄せる拍子にその頬に接吻して見たが、女はそれさへもたゞ恥し氣に顔を赧めたばかり。俊哉は一ケ月ならずして、久しく夢みて居た通な幸福の人となつた。幸福———それは若い新婚者のみが竊ひそかに神に謝し運命に謝する幸福である。

　二年の月日は過ぎ後一年で卒業すべき前の年の夏、俊哉は暑中休暇の間紐育ボストンあたりを旅行するとて學校を去つたが、それなり秋の開校期になつても歸つて來なかつた。

　只一通の手紙をば菊枝の許に———小生都合有之これあり東部の大學に轉校し此處にて學位を得明年は歸國するつもり今日まで數ならぬ小生に對して御厚情の段深く□□感謝する處に有之候———

＊　＊　＊　＊

　一年又一年。

　俊哉は歸國して後、或會社の有望なる社員になつて居たが、或時新橋の停車場で偶然在米當初の學友山田太郎と云ふ神學者に出遇つた。

　山田は牧師となり菊枝を妻にして居ると云つた。菊枝は俊哉に見捨てられたと云ふよりは一時の慰み者にされた事を知つた當時は全

く狂氣となり、冬の或夜———ミシガン州の怖しい雪嵐の夜に森の中に彷徨つて自殺しやうとしたのを、圖らず山田に助けられ事の始末を懺悔した。山田は惡魔の餌ゑばとなつた菊枝の身の上をば深くも憐れに思ひ、どうにかして菊枝をば此の暗黒な絶望から救ひ出し、元の幸福な女性にしたいと誠を盡していたはつた。

彼は學位を得てから菊枝と共に歸朝した後、二人の屬して居る或寺院チヤーチの長老に計り遂に十字架の前で神聖に結婚した。

「大山さん。私は今日では決してあなたの罪を咎めは致しません。菊枝さんは神の惠と私の力で昔の罪から救はれ、以前の通りの溫良な婦人となり、善良な妻となりました。ですからあなたも眞情まごゝろから神樣に對して感謝なすつて下さい。」

俊哉はその後會社などで若い者供の間に、クリスト教は好いとか惡いとか云ふ議論が出ると必ず恁う云ふ。「兎に角クリスト教は決して世に害を爲すものでない事だけは明瞭だ———。」

そして彼は常に啣くはへて居る葉巻シガーの烟を一吹するのである。

（明治卅九年五月）

雪のやどり

　在留の日本人が寄集つて徒然つれ□□の雑談會が開かれると、いつも極つて各自勝手の米國觀―――政治商業界から一般の風俗人情其の中にも女性の觀察談が先づ第一を占める。

　西洋の女――殊に米國アメリカの女は教育があつて意志が強いから日本の女のやうに男に欺されたり墮落したりする事は稀である………とその夜の會合に座中の一人が結論を下した。

　すると、忽ち他の一人があつて、

「然しいくら米國だつて十人が十人皆さう確固しつかりして居るとも云へないやうだぜ。僕は殆ど信じられないやうな話を聞いて居るが………。」

　「どういふ話だ。」

　その男はまづビールに咽喉を潤して語つた。

　去年の十二月、まだクリスマスの前で、其の年に初めて雪が降つた晩だ。

　尤も、宵の中には空こそ曇つて居たが風もなく寒気も左程でない。僕は知己ちかづきの或家族フアミリーから芝居見物に誘はれて居たんで、會社から歸ると早々大急ぎで鬚を剃り、顔を洗ひ、頭髪かみを分け直して、さて眞黒な燕尾服ドレツスにオペラハツト眞白な襟飾タイに眞白な手袋。いよ□□出掛けやうと云ふ前に、もう一度昂然と姿見鏡すがたみの前に立つて自分の姿に最後の一瞥を加へる―――いやすつきり胸が透く様だ。

　見物した芝居は例のミユージカル、コメデーさ。花形役者スター

は獨逸から來た女だつて云ふが、容貌よりは好い咽喉を聞かしたね。

　芝居がはねると見物歸りの連中が入込む事にきまつて居る角の料理屋シヤンレーで一寸一杯。雜談に時を移して再び戸外へ出たのはもう一時過だ。見ると何時の間に降り出したものか往來は眞白。ひどい雪嵐だ。

　僕を招待してくれた家族の連中とは歸り道も違ふので、つい鼻先の地下鐵道の入口で別れ、高架鐵道へ乘るつもりで四十二丁目の角を曲つた。すると、いや眞正面に吹付けて來る吹雪の激しさに僕は帽子を引下げ俯向いたなり向見ずに歩いて行くと、忽ち人に突き當つた。相手も同じく行先見ずに歩いて來たものと見えて此方より先に、

「あら御免なさい。」

　投遣つた調子の仇ツぽい女の聲ぢやないか。喫驚して顔を上ると、

「あらＫさんだよ。まア何處へいらしつたの。」

　僕の知つてる女だ。身分なんぞは云はずとも分つて居るだらう。夜半の一時過吹雪の中のブロードウヱーを歩いて居る連中だもの………。

「お前さんこそ何處へ行つたんだね、此の大雪に。スヰート筋も大概にしないと命に觸るよ。」

「ほゝゝゝほ。私のスヰートは此處に居るから一人で澤山………。」

とぴつたりと寄添つて、「眞實ほんとにＫさん、しばらくぢやあり

ませんか。だんまりで日本へお歸りなすつたかと思つてましたよ。」

「結句日本人ジヤツプの厄拂をしたと思つてた處が………お氣の毒さまだつたね。」

「何ですツて。もう一度仰有い。承知しませんよ。」

　女は掛けたベール越に睨む眞似をして、「さア、行きませう。眞實に寒くツて堪りやしない。コラまるで氷のやうでせう。」と其片頬をぴつたり僕の顔へ押付けた。

「何處へ行くんだ。寒さ拂ひに一杯かね。」

「酒屋は晩いから私の家………私の部屋へいらつしやい。眞實に久振だもの。」

　一人で承知して女は僕の腕を取りぽつちやりした身體の重みを凭せ掛ける。

　かう攻めかけられては仕方がない。僕は一緒にもと來たブロードウヱーへ出ると兩側の建物に風を避けて此處は大きに凌ぎよい。

　僕は女と腕を組みながら少時四角へ立止つた。不夜城とも云ふべき芝居町四十二丁目の雪の眞夜中。實に見せ度い位の景色だつた。

　ずつと見渡す上手は高いタイムス社アストルホテルを始め、下手はオペラハウスから遠くメーシーやサツクスなど云ふ勸工場のあるヘラルド廣小路スクヱヤーあたりまで、連る建物は雪の衣を着て雲の如く影の如く朦朧として暗い空に其の頂を埋め盡し、唯窓々の灯のみが高く低く螢か星のやうだ。燦爛たる色さま□□の電燈はまだ宵の儘に彼方此方の劇場しばゐの門々、酒屋、料理屋の戸口々々に輝いて居るが、それさへ少しく遠いのは激しい吹雪を浴びて春の夜

の燈火とでも云ひたげな色彩いろあひ。

　兩側の人道は雪で眞白な處へ色電燈の光で或處は青く、或處は赤く、リボンのやうに染分けられて居る上を、歸り後れた歡樂の男女互に腕を組みつゝ右方左方へと、或ものは音もなく雪を分けて來る電車に乘り、或ものは其邊の自動車オートモビルや馬車を呼んで一組二組と、次第々々に人影の消え行くさま、僕は此の芝居町の夜深はもう雪に限ると思つたね。何となく疲勞したやうな夜深の燈火と、如何なるものにも一種犯し難い靜寂の感を催さしめる雪と云ふものとが、此處に深い調和をなすからだらう。

　僕は辻待の馭者どもが勸める儘に行先は左程に遠くもないが女を扶けて一輛の馬車カブに乘つた。

　日本でも雪の夜の相乘と來れば何となく妙趣おつなものだ。增して乘心地のよい護謨ごむ輪の馬車。兩方から手を握り身を凭れ合せ天地は只我ものと云はぬばかり散々巫山戲ふざけ散らしながら女の家に着いた。

　フラツト、ハウスだから、表の大戶を這入つてから三階目。女は手にさげたマツフの中から鍵を出して戶を開け先に立つて僕を突當りの客間に連れ込んだ。

　壁には色刷の裸體畫が二三枚。室の一方にはピアノ、一方には安物の土耳古織で圍んだコーヂー、コーナー。此處に二人は身體を埋めて飮んだり歌つたり、さて接吻したり擽くすぐり合つたり。したい限りの馬鹿を盡して遊ばうと思つたら遠慮がちな日本の女より先づ西洋の女さね。

　する中輕く客間の戶を叩いて此の家の內儀おかみの聲と覺しく、

「ベツシー、ベツシー、鳥渡來ておくれな。」

「何か御用。」とさも煩さいと云ふやうに僕の女ベツシーは甲高に返事をした。

「鳥渡で好いいんだよ。又あの娘が駄々を捏こねるもんだからね。」

「煩いのね、私やもう醉つてるのよ。」

　恁うは云つたがベツシーは其の儘立つて出て行つた。

　隣りの室の方で何やらぶつ、、〳〵云ふ太い男の聲に交つて、ベツシーと聞慣れぬ若い女の聲。如何樣何か紛擾ごたついて居るらしい。

　暫くすると太い聲の男は止めるも聽かず歸つて行くらしく、内儀の聲も聞えて、遂に表の戸を開閉する音………それから家中は再び寂となつた。

「あゝ、もう煩うるさくつて懲り〳〵だ。家の内儀さんも又何だつて那樣あんな女ものを背負込んだんだらう。」ぶつ〳〵云ひながら歸つて來たベツシー。直樣僕の傍へ坐つて、「すみませんでしたね、大事な人を置去りにして行つて……。」

「大分悶着もめてたらしいね。」

「えゝ。しやうがないんですよ。つい四五日前に來た娘だもんですからね。」

「お客をふるのかい。」

「ふるどころか、てんで受付けないんですよ。尤も自分が承知で此處へ來たんぢやない、つまり欺されて來たんですからね。」

「欺されて………男にかい。」

「田舎からね、女を連出して金にしやうツて云ふ、悪い者に引掛つたんですよ。」

「それぢや、情人いろをとこに欺されたツて云ふ譯でもないんだね。」

「さうです。能くある話ですよ。」

「さうかい。それぢやアメリカにも女衒ぜげんが居るんだね。」僕は耳新しい話に興を得て、「一體どうして連出して來るんだ。いくら女だからツて、さう無暗と欺されもしまいぢや無いか。」

「それア、いろ〳〵時と場合で、あゝ云ふ悪い輩てあひの事こツてすもの、手を變へ品を變へするんですがね………。」とベツシーは段々辯じ出した。先づ踵の高い靴の裏で洋燧マツチを摺り、巻煙草の煙をぷーツと吹いて、「家へ來た娘なんぞは……アンニーツて云ふんですよ………バツフアローから何十哩とか云ふ田舎に居て、其の土地の藥屋か何かに働いて居たんですとさ。ところが自分の家の近處に紐育のある保険會社の役員だつて云ふ觸込ふれこみで、暫く下宿して居た男が、どうだい私と一緒に紐育を見物に行つちやアツて、或日巧く勸め込んだんですとさ。田舎に居れア誰だつて一度は紐育を見たいと思ひまさアね。それでふツ、、と魔がさしたんですね、勸められるまゝに紐育へ來て、其れからは何處か好い奉公口でも捜して貰ふつもりの處が、もう罠に掛つた鼠です。停車場へ着くといきなり、、、、二三軒宿屋を彼方此方と引廻された擧句に、此處の家へ送込まれて、男は何處へ行つたか烟見たやうに消えて了つたでせう。さア親里へ歸るにも金がない。此の家にゴロ〳〵してる中には、つまり商賣でも爲なきやア成らないやうになるんでさア

ね。」
「さう行きやアお手のものだが、もしか心立の堅い女で、死んでも身を汚すまいとしたら、如何するね。」
「そんな堅い女が滅多矢鱈に在るもんですか。」
　ベツシーは所謂海に千年山に千年の輩だ。一言に僕の語を打消して了つた。
「初めは、誰だつて堅いもんでさ。私だつて昔は堅氣でしたよ。家は今でもちやアんとニユーゼルシーにあります。紐育へ來てから久しく三十三丁目の勸工場デパートメントストワーで賣子をして居たんですがね。一週間に僅少たつた五弗や六弗の給金ぢや、とても遣り切れやしませんわ。其ア唯食べて行くだけなら如何にか凌ぎも付きませうが、それぢやまるで死なずに生きて居ると云ふだけの話で、若い身空で茫然ぼんやりとこの紐育の賑かな騷が見て居られますか。人が流行の衣服を着れば自分も着たい、人が芝居へ行けば自分も行きたくなります。其樣贅澤がして見たいばかりに私は誘はれるなりに、一番最初が同じ店に働いて居る或男のものになり、其れから段々泥水に足を入れ始めたんです。其ア或時は私だつて人間ですから、あゝ此樣事をして居ちやア行末が心細い。一層の事田舍へ歸つて了はうかと、氣の付かない事もないんですがね、一遍紐育の風に吹かれたら最後、例へ往來へ行倒れになるまでも、此土地から離れられなくなるのが紐育です。若いものにやア泣くも笑ふも皆な紐育でさ。それですものアンニーだつて今に御覧なさい。よしんば堅氣の家に行つて居たからつて、其の儘ぢや居られません。此の紐育に居るからにや何時か一度は自分から若い中だ。同じ事なら面白

い目をした方がツて、分別を變るやうになつて了ひます………。」

　果せる哉。僕は其後ベツシーを訪ねる度々初は一緒に酒をのむ、次には笑談を云ふ………段々に人摺れて來る少女アンニーの様子には何時も驚かない事は無かつたね。

　今ぢや君、もう立派なものだよ。後手にスカートを小意氣に摑み上げ細い拂蘭西形の靴の踵で、ブロードウヱーの敷石をコツ□□やる様子。どうだい。お思召があるんなら僕が一つ紹介しやう。

（明治卅九年六月）

林間

　シカゴ、ニューヨークのやうな騒しい米國北部の都會を見物した旅人が一度南の方首府なるワシントンを訪ふと、全市は一面の公園かとばかり街々を蔽ふ深い楓の木立の美しさと、どこへ行つても黑人の多いのに一驚するであらう。

　自分も新大陸を彷徨ひ歩いた或年の秋、この首府に到着して早くも二週日あまり。まづ大統領の官邸ホワイト、ハウス、議事堂、諸官省から、市内の見るべき處は大方見盡し、遂に搖なるポトマツクの河上マウント、ヴアーノンの山中に華盛頓ワシントンの墓をも弔ひ了つて、此頃は酣たけなはなる異鄕の秋を郊外の其處此處に探つてゐる。その中でも殊に忘れられないのはマリーランド州の牧場の夕暮であつた。

　日沈んで半時間あまり燃る夕榮ゆふばえの色は次第に薄らいで、大空に漂ふ白い浮雲の緣にのみ幽な薔薇色の影を殘すと、草生茂る廣い野の面は靑い狹霧さぎりの海となり、遠い地平線の彼方は何れが空何れが地とも見分けられぬやうになる。其れに反して、遠い彼方此方の眞白な農家の壁や、四五人連で野を越して行く牛追らしい女の白い裾、又は處々に黃葉して居る木の梢、名も知れぬ草の花なぞさう云ふ白いものゝ色のみは光線の作用で、四邊あたりの薄暗く黃昏れて行くに從ひ却て浮出す如く鮮明あざやかになつて、暫く見詰めて居ると不思議にも次第次第に自分の方に向つて動き近いて來るやうに思はれる。

　それは單に見る眼のみならず、心の底までに一種云ひ難い快感を

誘ひ出す。自分は遂に冠つて居る帽子を振動し四邊が全く夜になるまでも、一心に其れ等の浮き動く色彩を差招いた。

　次の日もこの夕暮の美しい夢に醉はうとて、同じく日の落ちる頃を計り、此度はポトマツクの水を隔てた———其處はもうヴアージニヤ州に屬して居る———向岸の森をと志し町端れの崖下に架つて居る一條の鐵橋を渡つた。

　渡ると橋袂には直樣蔽ひ冠さるやうな木の繁を後にして木造の小な電車の待合所がある。これは程遠からぬアリントンと云ふ廣大な共同墓地や練兵場や、兵營、將校の官宅などの有る所に赴く電車の出發點なので、今しも車を待合して居る人達は大抵褐色の制服をつけた合衆國の兵卒で、中には大方士官の家にでも使はれて居るらしい黑人の下婢と、ワシントン市中へ買物に出た歸りらしい白人の年增の女も交つて居た。

　自分は兵卒や水兵の姿を見る時ほど、一種の重い感情に胸を壓される事はない。立派な體格若い身空の諸有る慾情をば、絕間なく軍紀軍律と云ふもので壓迫されて居る肉の苦悶が、何處とはなしに其の日にやけた顏や血走つた目の色に現はれて居る樣の外目よそめには恐しく又哀れに見られるからである。彼等は三人四人と電車の來る間を橋の欄干に身を倚せて、まだ醒めぬ酒の醉を醒して居るものもあれば、嚙煙草の唾を吐きすてながら、靴音高く橋の上を散步して居るものもあり、又は殘り惜し氣に水を隔てたワシントンの方を眺めて居るものもあつた。大方午後に訪ねた女の事でも思返して居るのであらう。

　自分は兵卒と同じく橋の欄干に身をよせかけて四邊を眺めた。丁

度、入際の夕日は大空一面を焦げる様に燒き立て、眞向に其の鋭い光をワシントンの方へと射返して居るので、ポトマツクの河水に臨んだ公園の色付いた梢一帶は恰も濃艶な土耳古織の帳帷とばりのやう。其の上に五百五十五呎高く直立して居ると云ふかの驚くべき大理石のワシントン記念碑の側面は宛ら火の柱を見るに等しい。稍遠く離れた議事堂カピトルの圓頂閣ゑんちやうかくも彼方此方に聳ゆる諸官省の白い建物も皆一樣の紅に染出され、市中の高いホテルの窓々は一ツ殘らず色電氣の樣にきら□□輝いて居る。

　晴々した大きなパノラマである。身は飄然として秋風の中に立ち、此れが西半球の大陸を統轄する第一の首都であるのかと意識しつゝ、夕陽の光に水を隔てゝ遙かに眺めやれば、何とはなく人類、人道、國家、政權、野心、名望、歷史、と云ふやうなさま□□な抽象的の感想が、夏の日の雲のやうに重り重つて胸中を往來し始める。と云ふものゝ自分は何一つ纏つて、人に話すやうな考はなかつた。唯漠として大きなものゝ影を追ふやうな風で、同時に一種の强い尊厳に首の根を押付けられるやうに感ずるばかりである。

　自分は暫くして後俯向いた顏を起し、再び四邊を見廻した時には、先程橋の上を步いて居た兵卒も女づれも、已に待合した電車に乘つて行つた後と見えて、次の電車を待つ新手の人が早や二三人も集つて居た。

　自分は電車道に沿うて一二町ほども步み、道の兩側から蔽ひかゝる林の中へと當もなく分け入つた。

　林は重に櫟オークと楓メープルとである。此の國の楓は至つて夜

露に脆くまだ黄葉もせぬ先から散り初めるが常とて、羊腸たる小道は何處とも見分ぬまで大きな落葉に蔽はれて居たが、然し槲の林は今が丁度紅葉の盛り時。その深い繁りの中に射込む夕陽の光は木の葉の一枚一枚を照して、まるで金色の雨を降り注ぐやうである。けれども暮れて行く秋の日足は、移行く事の早い處から、見て居る中に彼方の明い梢が陰になつたかと思へば、此方の陰なる梢は忽ちにパツと明くなる。すると明い方では一度已に塒についたらしい小鳥が更に鳴出し、陰になつた梢の方では栗鼠が消魂けたゝましく叫んでゐる。

　自分は聞くともなく耳を澄して猶も當なく歩いて行つたが、其の時直ぐ行手の木蔭から小鳥の聲でも栗鼠の声でもない———女の啜り泣く聲が起つた。

　驚いて立止る間もなく、自分は直樣落葉の中に二人の人影を見出し得た。褐色の制服を着けた兵卒と其の足許に祈禱でもするやうに廣げた兩手を胸の上に組んで居るのは、まだ極く年の若い、半分程白人の血を混へた黑人の娘である。

　兵卒と娘———と云へば事の次第を想像するのは甚だ容易であらう。

「後生だから………。」と娘の聲は兩手を組んだ胸の底から響く。

「まだ、そんな事を云つてるのか。」と兵卒は嚙煙草の唾を吐きながら、如何にも厭はし氣に橫を向いて了つたばかりか、早や其の場をも立ち去らうとする氣色である。

　女は倒れながら兵士の手に取り縋つて、「それぢや、もう、どうしても別れてくれツてお云ひなさるんですね。」

「何に………別れてくれ。別れてくれなぞと此の乃公おれは賴んで居るんぢや無いぜ。乃公は勝手に此れまでの關係は切つて了ふのだ。」

　兵士は如何にも憎々しく然も豪然と云ひ切つた。彼は立派な米人、彼の女は以前奴隷であつた黑人の女である。「別れてくれ………」と云つた女の語が少からず不快に聞かれたからであらう。

　女は返す語もなく取縋つた男の手の上に啜泣くばかり。兵士は暫く其の樣子を見て居たが、何か又思出した樣に、

「考へて見るがいゝや。えツ。マーサ。」と娘の名を呼び、「初ツから、さうぢや無いか。乃公の方からどうぞ可い仲になつて下さいツて賴んだんぢやない。此の春、おれがM大佐の家へ從卒に行つてる時だ………夜お前が裏庭へ出て居る處へ乃公が行合す………乃公ア其の時酒に醉つて居て………はゝゝゝ、まアそんな事はどうでもいいや。するとお前は其の翌晩に何時の何日に何處そこで會ひたいツて云出したんだらう。それアな、乃公だつて會へる中は會ひもしやうさ………。」と言葉を切つた。

　女はいよ□□泣く。

「今更、申譯らしく譯を話して聞したつて始らないが、まア早い話が物には始めがあれば屹度終りツてものがある。時候にだつて變り目があらア………」

　自分はもうこの殘酷な暴惡な活劇を盗聞きして居るには忍びないやうな氣がして來た。丁度最後の日光ひかげが眞赤な血の樣な色して、自分の足許へと射込んで來たので、自分は姿を見付けられはせ

ぬかとも氣遣ひ、後をも見ずして急いで其の場を立去つた。

　無論、自分は戀と云ふ事よりも長く此の國に存在する黑白兩人種の問題をば今更らしく考へ出すのである。一體黑人と云ふものは何故白人種から輕侮又嫌惡されるのであらう。其の容貌が醜いから黑いからであらうか。單に五十年前は奴隷であつたと云ふのに過ぬのであらうか。人種なるものは一個の政治的團體を作らぬ限りは如何しても迫害を免がれないのであらうか。永久に國家や軍隊の存在が必要なのであらうか………。

　自分は林を拔け出て元の橋袂まで步いて來たが、夕陽は全く沈み果てゝ空を染めた紅の色も已に薄ぎ、水を隔てたワシントンの方では公園や木陰や高い建物の窓々に電燈の光が見える。自分は再び橋の欄干に凭れて蒼然として暮れ行く街の方を眺め渡した。

　橋の上には以前のやうに電車を待合す兵卒が幾人も散步して居る。高話笑聲口笛なぞの騷しい中に自分はふと見返れば、たつた今林の中で黑人の娘を泣かして居た彼の兵卒が、何時の間に來合したものか、直ぐ自分の傍で同じ制服の友達と何か話しをして居るではないか。

「どうだい。いゝ女でも目付つたかい。」と訊き出すのは彼の兵卒で。すると友達は、

「だめよ。今日なんざ馬鹿を見ちまつた。」

「どうした。賭博にまけたのか。」

「賭博ならまだしもよ。いつものＣ街へ押掛けて行つて、とう□□財布の底を叩いちまつた。」

「はゝゝ。金を出さなけれア女が出來ねえのか。餘り腕がなさ過

ぎるぢや無えか。」と彼は鳥渡嚙煙草を吐き捨てながら、「どうだい。さう女に困つて居るのなら、一人若いやつを取りもたうか。」
「うむ。耳よりの話だな。」
「然し一ツ條件がある。それさへ承知なら………。」
「何でもいゝや。一文いらずなら此様結構な事は無え。」
「さうとも結構なものよ。」と彼は頷付いて、「條件と云ふなア外でもない。黑人の娘だぜ。容貌は惡くねえが………。」
「構ふものか、そんな事に尻込する己れぢや無え。」
「感心々々。それでこそ流石のジヤツクだ。其の娘ツて云ふなア外でもない。以前乃公が從卒に行つて居たＭ大佐の家に働いてるんだが、まだづぶ〳〵若い癖に男が好きでよ。此方が鳥渡甘い事を云つてやりやア直ぐ向うから熱くなる奴だ。」
「さうか、然し餘り夢中になられちやア後が煩いぜ。」
「そこは、此の乃公が承知して居る。其の娘ツて云ふのは男が好きなんだ。男と遊ぶのが好きなんだ。だから、お前がさんざ玩なぐさんだ擧句に、厭になつたら、直ぐと誰でも可い。お前の代りになるやうな男を押付けて逃げて了へば其れまでの事よ。お代りさへありやアそれで娘の方は直きと其の氣になつて了つて、何もお前の尻ばかりをさう何時までも追廻しアしない。惚れたの何のと云ふよりは唯だ男が好きなんだ。此様都合のいゝ奴は何處を探したつてありやしない。」
　折から電車が向うの木蔭から響を立てゝ現れた。
「車の中でゆつくり話さうぢやないか。」
「オーライ。」とばかり。二人の兵卒は口笛で——— I'm Yankee

doodle sweet heart, I'm Yankee doodle joy ———と云ふ俗歌を吹き鳴しながら停車場の方へと馳けて行く。

森や林や水は次第に暗くなつた。橋の下堤の木蔭に泊つて居る小舟や釣舟にも赤い灯がつき、ワシントン府の燈火は空の星と共に見る見る明く輝いて行く。自分は一人、橋を渡つて歸り行く道すがらも、何かまだ種々とまとまりの付かない、云現し難い非常に大きな問題を考へて居るらしかつた。

（明治卅九年十一月）

惡友

一

　一時、加州カリホルニヤで日本の學童排斥問題が喧しくなつて來た時分、日米間には戰爭が起るだらうと、紐育を初めとして國內の新聞は種々な臆說を書立てた。その頃には自然、紐育在留の吾々同人間にも寄ると觸ると太平洋沿岸に關する談話が多くなつた。

　或夜、或處で、例の如く、人種論、黃禍くわうくわ說せつ、國際論、ルーズベルト人格論から正義人道問題などの眞最中、或人が不意と思出した樣に、

「彼方にや隨分、日本の醜業婦が居るさうですね。」と飛んでもない事を訊出した。處が、それは恰も燃立つ炎天の端に夕立雲の湧出した如く、忽ち四方に漲つて、堂々たる天下の議論を一變さして了つた。一座の中には以前よりも一層重大な問題が提出されたと云ふやうに椅子を前に引き進めたものさへあつた。

「女や三味線ばかりぢや無しに、日本流の風呂屋だの大弓場なんぞもあるさうですね。」

「汁粉屋でも鮨屋でも蕎麥屋でも殆ど無いものは無いでせう。日本の國內だつて、邊鄙な地方へ行つたら、到底あれだけの便利はきゝませんから。然し彼の邊に居る日本人は大抵九州や中國邊から出稼ぎに來たものばかりだから、料理だつて、女だつて、東京の者にや全然てんで手がつけられませんよ。」

「成程、さうかも知れん………。」

「私は桑港サンフランシスコからポートランド、シアトル、タコマ、其れから加奈陀カナダのバンクーバーと、一通り太平洋沿岸を歩いた事があるですが、何處へ行つても似たり寄つたりで。さう………其の中で唯た一人ですよ。東京から來たつて云ふ鳥渡澁皮の剝けた女を見たのは………。シアトルの達磨茶屋の酌婦をして居た女でしたが………。」

「何か、面白い冒險をやつたのですか。」

「いや、二三度飲みに行つたゞけの事さ。どうせ、あの邊に居る女の事だから、惡い蟲がついて居るに極つて居ますからね、身分のないものなら兎に角僕等はうつかり手が出せない。殊に其の女の亭主と云ふのは、書生上りで英語も出來るし、シアトル近邊ぢや有名な無賴漢ごろつきださうですもの………。あの沿岸にや、隨分ひどい奴が居るらしいです。女を誘拐したり、密輸入をしたりして喰つて居る………俗に嬪夫ぴんぷと云ふ奴です。」

　辯じ立てゝ若者はパイプの烟に口を休めたが、其れを機會に片隅の椅子から、

「君。今君が話した女は確か僕も見た事がありやしないかと思ふです。………君は其の亭主だつて云ふ無賴漢の名前を知つて居ませんか。」

　一同は皆驚いて質問した男の顏を見た。何故なれば彼は何時も女や酒の話には無頓着な眞面目な人として知られて居たからで。

「島崎君。君がさう云ふ方面の事を知つて居やうとは、實に意外だ。」と驚く聲が二三人の口から同時に聞かれた。

「いや、僕は相變らずの野暮なんだが、其の女の事だけは特別の事

情があつて知つて居るのです。年は二十六七でせう。細面の、身長せいの高い………それぢや確に僕の見た女です。まア奇遇とでも云ふんでせうな、其の女の亭主ツて云ふ男は元は僕の兄………死んだ兄の親友だつた───」

島崎と呼ばれた男は問はるゝ儘に話した。

二

私が米國こつちへ來るとき初めて上陸したのはシアトルです。さうもう丁度三年前の事だ。

能く晴れた十月の末、私は暮れ行く日と共に波止場へ着いたが、翌朝でなければ米國の移民官が出張しないと云ふので、其の夜は深け行くまでも甲板の欄干てすりから、初めて見る異郷の水と山とを眺め、さて次の日になつて無事に上陸はしたものゝ、さて東西が分らない。船中で懇意になつた二三人連、互に手を引合つて、茫然と行迷つて居た處を丁度客引に出て居る日本人の旅館やどやの番頭だとか云ふ五十ばかりの男に案内されて、電車に乗込み、日本人街へ曲る角の汚い木造りの旅館に送り込まれた。

成程、あの地方で日本人が誤解されるのも無理ではない。宿屋の界隈は商店續の繁華な街が、丁度人の身の零落して行くやうに次第次第に寂れて行つて、もう市が盡きて了はうとする極點である。四邊の建物はいづれも運送屋だの共同の廐ステブルなどばかりで、荷馬車と勞働者ばかりが馬糞だらけの往來を占領して居る。

案内された旅館の窓から頸を出すと、遙に市中の建物の背面が見え、正面には近く淺草のパノラマ館を見る樣な瓦斯ガス溜所タンク

が高く黑く大きく立つて居る。其の邊りから往來が俄に狹くなつて、汚い木造の小家のごた〳〵して居る間へ一筋の横町が奥深く行先を沒して居る。何でも其の端れは海邊へでも出るらしく、人家の屋根を越しては、倉庫の鐵屋根と無數の帆柱が見え、又鐵道の敷地もあると見えて、機關車の鐘の音につれて凄じい黑烟が絕え間なく湧出で、屋根と云はず往來と云はず、時々の風向によつては、向も見えぬ位に棚曳き渡つて、あたり一帶を煤だらけにして居る。この横町、この汚い木造の人家、これが乃ち日本人と志那人の巢窟、東洋人のコロニーで同時に又、職にありつかぬ西洋人の勞働者や、貧と迫害に苦んで居る黑人が雨露を凌ぐ處である。

　私は石炭の烟を見たゞけで、もう辟易して了つて、直にも何處か西洋人のホテルへ引移らうかと思ひ、實は手鞄まで提げて往來へ出たが、書生の身の旅費は充分ならず、好し充分持つて居るにしても、西洋のホテルとさへ云へば直樣東京の帝國ホテルなどを思起し高帽子シルクハツトでも冠らなければ這入れぬやうな氣がして譯もなく氣後れがする。どうせ長く止る土地でもない。加州から來る友人を待合して、一週間中には東部に出發する身だからと、踏出しはしたものゝ其の儘おめ〳〵と立戾つた。で、私は上陸した其の日から汚い宿屋の一室に引籠つて居るのが厭さに、船中の疲れを休める暇もなく、市中は云ふに及ばず、市外の北部に漲り渡る廣大なワシントン湖水レーキや、其の邊の森林まで朝から晩まで步き廻つたが、何處へ行つても子供が吾々日本人の顏を見ると「スケベイ」と云つて囃す。この言葉は日本の醜業婦の口を經て或る特別の意味を作り、廣く米國の下層社會に流布して居るのである。

成程、夜になつて、旅宿の窓から見下す街の光景は何と云はうか。私は出發する前にもう暫は見る事の出来ぬ東洋のこれも社會觀察の一ツとして一夜遊廓を歩いて見た事があつた。今眼にする夜の活動もそれと同様のものではあるが、然し私の受けた感動は到底比較にはならない。思ふに初めて見た外國の事とて、善惡ともに目新しかつたからでもあらう。

往來傍には日中其の邊をうろ〳〵して居た連中の外に、處々の波止場や普請場に働いて居た人足どもが其の日の仕事を了つて、何處からともなく寄集つて來るので、唯さへ物の臭氣にほひを絕さぬ四邊の空氣は更にアルコールと汗の臭氣を加へたかとも思はれる。重い靴の響罵る聲につれて土塗れの破れシヤツ、破れズボン、破れ帽の行列は、黑い影の如く、次第々々に明く灯の點いて居る日本人街の横町へと動いて行く。と、其の横町からは絕え間なく雜然たる人聲に交つて、酒屋や射的場の蓄音機に仕掛けてあるらしい曲馬の囃子や騷しい樂隊バンドの響が聞え、同時にチンテンチンテンと彼方此方で互に呼よび應あふ様に響く三味線の音、それに續いて女の歌ふ聲男の手を叩く音………

まア、想像して御覽なさい。アメリカと云ふ周圍の光景に對し、汽船の笛、汽車の鐘、蓄音機の樂隊なぞ、「西洋」と云ふ響の喧しい中に、かの長く尾を曳いて吠えるやうな唸るやうな眠たげな九州地方の田舍唄に、ちぎれ〳〵な短い糸の音、これほど不調和な不愉快なそして單調ながらも極めて複雜な感を起させる悲しい音樂が他にあらうか。

私は一夜———たしか東部へ出發する前の晩の事、此の三味線が

耳について眠られぬ處から、到頭勞働者の列に交つて向の横町へと歩いた。入込んで見ると、いや、大弓場から、玉突場から、其の他の飲食店や路の傍まで日本人のうろ□□して居る事は非常なもので、然し何れも何處やら沈着いて、此處は乃公達の繩張中だと云はぬばかり、入込む西洋人の勞働者をばさも外國人らしく見遣つて居る。と、兩側の木造家屋の窓々からは折々カーテンを片寄せて外の景氣を窺ふ女の顏が見え、中には黃い聲を出して誰かを呼ぶのもあつた。何れも鼻の低い、目の細い、顏の平い關西地方の女で、前髮を切下げた束髮に、西洋風のガウンを着て居るらしく見えたが、私は外から一瞥したゞけで、早や充分の………滿足と云はうか、不氣味と云はうか、兎に角それ以上に近いて見るには忍びない心持になつた。

然し猶暫くは路傍に佇んで樣子を窺ふと、東西の勞働者は何れも煙草屋だの果物屋だの云ふ小い商店あきなひみせの間々に、暗く穴のやうに明いて居る戶口から出入をして居る。と、其の時胴衣ちよつきの胸には太い金鎖を輝かした立派な風采の紳士が一人、山高帽をば少し阿彌陀あみだに冠り醉つて居るらしい眞赤な顏をして、口には小楊枝を啣へながら勞働者に交つて出て來たので、私は四邊の樣子から、不思議の感に打たれて覺えず其の顏を見た。

ふいと、何處かに見覺がある樣な氣がしたので、行過る其の後姿を見送つたが、すると、其の紳士は二三間先の煙草屋の店先に立止る。店の電燈が横顏を照す………横顏と云ふものは能く人相を現すものである。七年程前の記憶が突然呼返された。

私は他分瞬間の感動に打たれた爲めであつたらう。日頃の臆病に

も似ず駈寄つて後から男を呼止めた。

紳士と云ふのは死んだ兄の親友で、其の頃には絕えず兄の許へ遊びに來た男である。

三

名をば山座やまざ―――と云つて兄とは同じ學校を卒業し同じ會社に雇はれて居た。然し私と兄とは二人の姉妹を間にして、長男と季子と云ふだけ年も十年以上違つて居るので、無論私はかの男と話をした事もないが、其の噂だけは兩親初め皆のものゝ口から何かにつけて云聞されて居た。

その理由いはれと云ふのは丁度私が尋常中學を卒業しやうと云ふ頃、兄は旣に其の以前から放蕩の結果として、この山座と一緒に高利の金なぞを借り屢私の父に迷惑を掛けて居たが、それにも關らず今度は山座の他にも二三の同類があつて、會社の名義を種に詐欺取財をやつた。忽ち露見して一同捕縛されたが、私の兄は父が所有の屋敷と地面を賣拂つて、會社に辨償金を出したばかりに刑には觸れずに濟んだ。山座も幸に陸軍の將官をして居るとやら云ふ其の叔父の力で、此れも何にか罪を逃れたので、つまり庇護も何もない後の二人が最も悲慘な境遇に落ちたのである。然し其の頃の私には未だ充分に罪惡と云ふものを解釋する事が出來ないので、唯漠然だる恐怖を感じたに過ぎない。

兄は此の事件があつて後は、宛ら不吉の影か疫病神のやうに、家中のものゝ恐怖と嫌惡の中心になりながら、唯だぶら□□爲す事もなく二年ほどの月日を送つて居る中ふと肺病になり其の冬を越し得

ずに死んで了つた。すると、私の父も母も急に兄をば惡いものだとは云はなくなり、何かの話が出るとあれは皆能く家へも遊びに來たあの山座と云ふ惡友があつた爲めだ………朱に交れば赤くなると云ふ諺が殆ど兩親の口癖になつて了つた位である。兩親のみならず私の一番の姉の如き（兄とは二ツの年違ひで、已にある法學士の妻になつて居たが、）家へ遊びに來る度々家族の寫眞帖などを繰つて見る時、兄と彼とが一緒に撮影うつした寫眞に接すると、
「まア何て云ふ氣障な風だらう、まるで役者か落語はなし家か見みたやうだ。」と云つてはぢつと打うち目戍まもり、遂には簪かんざしの先で其の顔を叩いたりした事のあつたのを私は今だに覺えて居る。

　年は一年一年と過ぎて行つたが、丁度兄の死んだ頃の寒い二月が來ると、毎年兩親の口には今更らしく山座の名が呼出され、つゞいて其の時節中は私に對して例の古い諺と古い教訓が數繁く繰返された。然しこの恐るべき山座なるものは其後何處に何して居るのか、家中知るものは一人もなかつたのである。

四

「君があの千代松君の弟………さう云へば成程忘れはせん。君はあの時分はまだ、ほんの子供だつたぢやないか。うむ、考るともう七八年………もつと昔になるかも知れん。」

　勞働者の込み合ふ路傍、煙草店の店先で葉巻へ火を點けた山座は流石に驚いたらしく私の顔を目戍つたが、忽ち調子を代へて、
「どうして米國へ來たです。勉强ですか………然しこの近邊は君達

青年の來る處ぢやないですよ。」

「明日にも友人の來次第東部イーストの方へ行くつもりです………。」靜に答へて、「貴君は今何をなすつていらつしやるのです。何か御商法ですか。」

「僕か………。」と彼は語を切つて少時私の顏をば見詰めたが、「君に聞したら喫驚するぢやらう。はゝゝゝは。人間と云ふものは變れば變るもんさ。」

「移民事業の方でも………」

　立派な八字髯を生して指環だの金鎖だのいやに金物を輝ひからして居る樣子と其の言葉つきの何處か下卑げびて聞えるので、私は此の地方の事情から察して恁かう問掛けた。すると彼は、はゝゝはと笑出し、「矢張、一種の移民事業さな、移民には必要なもんぢやから………。」

　少時默つて、葉巻の烟を吹いて居たが、「どうだ、日本飯でも御案内しやうか、東部の方へ行つたら當分はパンばかりぢやらうから………。」

　私は辭退せず、矢張此の横町の唯とある二階の窓に確か「さくらや」とか書いた行燈あんどうの出してある日本の料理屋へと導かれて行つた。最前樣子を伺つた女郎屋の入口も同樣な暗い入口から階子を上ると、一條の狹い廊下を中にして、左右にペンキ塗の戶が五ツ六ツもあらう。廊下には瓦斯の裸火が一ツ點いて居るだけで、薄暗いが、閉めた戶の中では、男や女や大勢の人聲、三味線の音喧しく、牛鍋の臭がぷん□□立迷つて居る。

　山座は我が家の如く四邊を見廻しながら私を一室に案内して呼鈴

を押すと、べつたり白粉を塗つた宿場の飯盛りとでも云ひさうな女が洋服に上草履をつツかけて出て來たが、如何にも懇意な間柄だと云ふやうに別にお世辭一ツ云ふでもなく、

「何か食あがるの………。」と云つて傍の壁に、退儀らしく背を凭掛けて居る。

「何でもいゝや、お雪にさう云つて、よさゝうなものを持つて來てくれ。」

　女は返事をせず唯頷付いたまゝ、ばた□□廊下を歩いて行つた。

　突然何處かの室から陽氣な騷の三味線、茶碗を叩いて拍子を取る音が聞え出した。私は何の譯もなく嘗て房州あたりの夏の夜に船頭が船付の茶屋で騷いで居たのを見た其等の事を思ひ浮べる、と、急に遠く家を離れて外國へ來た寂しさが胸の中に湧出て、何やら悲しい氣がして來た。折から戸が開く。以前のとは違つた女が香物かうのものと銚子をもつて這入つて來たが、此れもお客あしらひはせず、直と山座の傍に坐りながら、

「昨夜はどうしたの、あんまりぢや無いか。冗談も大槪にするもんだよ。」

　呆れて私は其の顔を見た。二十七八、物云から細面の顔立から、淺草近邊の小料理屋か牛肉屋の女中に能く見る種類のものである。

　流石の山座も私の手前、少しは氣まづい樣子で、頻と葉巻の烟を吹立てながら、「來るさう□□、つまらん冗談ばかり云やがつて、早くお客樣にお酌をしないか。」

　女は酌をしたが其れを機會に、私の方に顔を向け、

「たまにやア愚癡ぐちも出まさアね、こんなアメリカ三界まで連れ

て來られて、ねえ、あなた、毎晩浮氣ばかりして歩かれるんですもの………ちツと、貴君、意見をしてやツて下さい。」

いよ□□出て、愈奇と云はねば成らぬ。山座は料理の催促にと、女を去らしめたが、もう祕すべきでないと決心したらしく、私の問ふのも待たず、

「え、驚いたでせう。膽を潰して了やせんか、はゝゝは。」と先づ笑つて後、現在の境遇を打明けた。

彼は私の兄の死んだ事をば新聞の廣告で知つた頃、何かうまい事はないかと、食詰めた故郷を去つて、桑港へ渡り、一般の渡米者が經驗する種々の辛苦と失望を知り盡した結果、亞米利加三界は女で食ふが第一と悟つて、一先日本へ歸るや否や、今のお雪と云ふ牛肉屋の女中をば引連れて再び渡米し、根據地をシアトルと定めて、醜業婦密航の媒介と賭博をして暮して居るのだとの事。

「人間は一ツ惡い方へ踏出したら、中途で後戻りをしやうたツてもう駄目だ。自分ぢや幾程後悔して居たつて一度泥が着いたら世の中が承知しないからね、どこまでも惡い方で押通して見るより爲樣がない。君の兄貴千代松君なんざ、中途半端で眞人間に後戻りをしやうと思つたから、つまり心勞の結果だ、肺病なんぞになつて死んで了つたんだ。十人が十人先づそんなものさ。世の中を知らん學者なんぞは人間は打捨ツて置けば皆ずる□□墮落して了ふと思つてるやうだが、そんな心配は御無用だ、良くもならず惡くもならず、つまり中途までは落ちて行くかも知れないが、其れから先奈落の底へお尻を落ち着けて了はうと云ふにや、一度本の一冊も讀んだものは非常な苦心で時々頭を出さうとする「良心」と云ふ奴を、すつかり平

伏さして了はなくちや成らん。其れアなか〳〵口で云ふ位ぢや無い。乞食の家に生れた奴が乞食になる、此ア普通あたりまへの話だ、良家に生れたものが平々凡々たる良民になる。何の苦勞もいらない、が、いざ其れから一步進んで大人物になるか、又は一步さがつて世間の裏へ廻るか、何方とも容易なものぢやないぜ。其の苦心と修行は、影と日向の差こそあれ同じ事だ。つまり吾輩はナポレオンたらんか石川五右衛門たらんかだ。」

　彼は今日吾々が人生だとか神祕だとかを口癖にする時代とは違ひ、天下だの、青雲だの、功名だのと云ふ事を曉の星と望んだ十年二十年前の書生の態度に立返り、肱を張つて飲干す酒杯と共に、堂々聲を高めて論じ出したので、私は過去の世の傷付いた人の苦痛の腸から出る奇矯きけうの諷刺として、彼の言を聞くが適當だと思ひ、別に反駁も質問もせずに傾聽の體を粧つて居た。

　戶の外には、以前の騷さわぎ三味線じやみせんがまだ止まぬ中に、更に新しい一座の三味線と、日本ではもう三四年前に流行つた東雲しのゝめ節ぶしが聞え出す……。

　私は其の翌日、南方みなみから來た友人と共に大北鐵道グレートノーザンの列車で東部へ出發して了つた。

　それから程經て後の事私は母に送る手紙の中に、何心なく山座に會つた一條を書いた事があつたが、すると母の返事にはよいも惡いも今は夢、昔は亡兄なきあにの親友であれば、その母が志の記念までに燒海苔一箱を別便にして郵送したから、ついでの節山座さまへ屆けてくれよ、とあつた。

　ニユーヨークとシアトルとは三千哩も離れて居るとは夢にも心付

かぬ老いたる親心。母の情。私は覺えず涙を落しました。

（明治四十年六月）

舊恨

博士Ｂ――なにがし氏とオペラを談じた時である。談話は濃艷にして熱烈なる伊太利亞派、清楚にして又美麗なる佛蘭西派の特徴より、やがて雄渾宏壯神祕なるワグナーの獨逸樂劇オペラに進んだ。

偉大なるは Dasダス Rheingoldラインゴルト につゞく三樂劇トリロジー、神聖なるは Parsifalパルシフワル 悲哀なるは Tristanトリスタス undウント Isoldaイソルダ 美麗なるは Lohengrinローエングリン 幽鬱なるは Derデル F'liegendeフリーゲンデ Holländerホレンデル ………と何れもバイロイトの大天才が世に殘した音樂の天地と共に不朽なるが中に、自分は單だ素人耳の何となくかの Tannhäuser タンホイザー の物語を忘れ兼ねる………。

「博士よ、貴君はあのオペラの理想については如何いふ說をお持ちですか。」

恁う質問すると、Ｂ――博士は忽ち胸を刺されたやうにはツ、、と深い吐息を漏し、暫く無言で自分の顏を打目戍つて居たが、

「不幸にして、私は彼のオペラを學術的に判斷する資格がないのです。」と俯向いて、「何故ならばあのタンホイザーを聞いた當時の事を思出すと無限の感に打たれる………お話しませうか、もうざつと二十年も昔の事ですが………。」

自分が椅子を進めるのを見て博士は語り出した。

もう二十年も昔の事です。私の妻ジヨゼフインが丁度貴君と同じやうにかのタンホイザーの意味は何であるかと訊いた事がある。

當時私は新婚旅行のつもりで妻と共に歐洲を漫遊し、丁度墺太利の首府に滞在して居たので、一夕この都の有名な帝室付のオペラ、ハウスに赴いた（と博士は室の壁に掛けてある寫眞の建物を指した後）其の夜の演題は乃ちタンホイザーであつた。

私は場内の光景から其の夜舞臺に上つた歌人、樂人、或はかの獵の從卒や大名、巡禮の行列なぞに出る數多の合唱歌人の顔までをも、一々明かに記憶して居ます。

私は妻ジヨセフインと共に綾羅りようらと寶石の海をなした場内の定の席に付くと間もなく、頭髪の長い樂長が舞臺の下の樂壇に立ち現れ、手にする指揮鞭バートンで三撃の合圖をすると、燦たる燈火一齊に消え、無數の聽衆は廣大な場中の暗澹くらきに包まれて寂となる。管弦樂オーケストラは先づ淋しく嚴かな巡禮ピルグリムの曲より熱烈な遊仙洞ペヌスベルグの曲に入り、軈て「女神ヰナスの讃美ヒームン」に進み、此の樂劇の意味全體を代表したとも見るべき長い前奏オバーチユアーが了る………と幕明いて女神ヰナスの山の段。

御存じの通り下手に女神ヰナスの寐臺の下に樂師タンホイザー立琴を手にした儘居眠つて居る。數多あまたの女神ニンフが舞蹈から空中に現れる幻影なぞタンホイザーの夢よろしくあつて、樂師は遂に目覺め、此の年月美しい女神の愛に人間の歡樂と云ふ歡樂に醉うて居たが、今は浮世の却つて戀しく、別れを告げて歸りたいと云ふ。それをば女神は引止め、もし浮世に歸るならば必ず昔の夢を思起して悔くゆるであらう。女神と共に何時までも戀の立琴を掻鳴らして歡びの歌を唱へと。然しタンホイザーの心動かずその唱ふ聖女

マリヤの歌に魔界の夢は破れ、女神は其の山もろともに闇の中に消去り、タンホイザーは唯一人、故郷なるワルトブルグに近き山道のほとりに立つて居る。

　と、山道の岩の上に幼い羊飼一人、塵に汚れぬ聲も淸らかに笛を吹いては歌を唱うて居る。間もなく山の彼方よりはる□□羅馬ローマへ行く巡禮の悲しい聲が聞え巡禮の行列は山道を通つて行き過る。

　タンホイザーは先程から此等の歌に聽き取れて居たが忽ち今まで耽つた我が罪の歡樂の空怖しくなり、感慨極つて其の場に泣き伏して了ふ。

　聽いて居た私は覺えず深い溜息を漏らして目を閉りました。

　長き快樂けらくの夢覺めて己が身の罪に泣く樂師の心の中。私は其の歌、其の音樂から、突然こゝに忘れて居た結婚以前の放縱な生涯、一時消失せた快樂の夢を思起したのです。すると私には最う舞臺の上のタンホイザーは我が過去の恍惚くわうこつ煩悶はんもん慚愧ざんきの諷刺としか見えず、美しい邪教の神快樂の神なるヰナスは丁度我が昔の情婦マリヤンと呼ばれた若い女役者であるとしか思はれなくなつた。

　世には禁ぜられた果物程味深いものが又とあらうか。罪の恐れ毒の慮りは却つて其等の魔力を増すに過ぎない。今は何も彼も打明けてお話しやう………（と博士は耻らふ如く稍俯目になつて、）男と云へば一時は誰でも此の種の女の化粧の力に魅せられるものであらうが、と云つて私ほど魂を奪はれたものも少いであらう。如何なる譯からか、私には美しい衣裳に身を飾り舞臺のフツトライトの前

で、態とらしい眼付や身振をして舞ひ歌ふ女藝人や女役者、さらずば料理屋劇場舞蹈場をどりば又は往來や馬車の途すがらも其の特種の樣子と容貌きりやうに人の目を惹く一種の女が、何となく愛らしく好いたらしく見えてならなかつた。デユーマが「公爵夫人にもあらず又處女にもあらず」と云つた此の種の女には全く云ひ難い美がある。魔力がある。よし畫家の夢みる美人では無くとも其の濁つた眠氣な眼の中、細い不健全な指先や、時には恐しく下賤に見える口許に敵し難い誘惑の力がある。乃ち其の眼色は何時でもお前の云ふまゝにと身を投掛ける心を見せながら、口許では用心するが好い、酷い目に逢ふぞと云はぬばかりの冷笑とすね、、氣味を含ませて居る。

　男の出來心は一度此謎の樣な魔力に擽られかけると、魅せられた眼には何時となく教育あり淑德ある妻や娘は冷い道德の人形のやうに見えて來て、「戀は浮浪ならず漢ものボヘミヤの兒よ」と歌ふ放縱な詩趣のみに醉ひ家庭や國家の感念は失せ、身の行末まゝよと激しい慾情の虜になつて了ふのです。

　私はまだ學業をも了らぬ中から折々長閑な春の半日書齋の窓に葉巻の煙を吹きつゝ、一生の中何時か一度は彼の種の女と戀し戀されて見たならばと、さま〳〵愚な事を空想した事がある。兎に角私は普通の人よりか高い教育を受け讀書もした身である。飽くまで其の慾情の賤しく又愚である事を承知して居ながら、さて何うしても其れをば抑制する事が出來ない。能く佛蘭西や露西亞の自然派の小說に描かれて居る———立派な品性の紳士がかゝる劣等の女性の爲に身を滅す物語なぞを讀むと、私はヒステリー質の女のやうに身につ

まされて泣き、あゝ此れが運命と云ふものかと深く懷疑の闇に彷徨うた事も度々でした。

かく一方で理と智惠とが非難すればするほど慾望はます〳〵高まる。私は學校を出ると直ぐ道樂者ばかり寄集つて居る倶樂部の會員となつて、劇場しばゐから舞蹈場、玉突場から料理屋と、燈火の輝き紅粉の薫ずる處と云へば場所を選ばず夜を探したもので、當時を回想すると私は如何しても狂氣して居たとしか思はれない。晝の中太陽の照り輝いて居る間だけは私は確に正當な判斷を有し充分に自己の力に信頼する事が出來たが、さて夕暮の霧と共に、街頭に燈火がちらちら爲始めるともう最後です。燈火は私の良心廉耻心希望の凡を灰燼にして了ふと同時に、その燈火の影をば往來する女の姿は我が眼には全く快樂の表象シンボルとしか見え無かつた。

私は今でも能く思出すのです、吹雪の夜丁度方々の芝居が閉場はねる十二時前後のブロードウヱーの光景。此の時此處ばかりは無數の男女無數の馬車の雜沓に如何なる冬の夜とても人は寒氣を感じない。五彩さい燦爛さんらんたる燈火に見渡すかぎり街は宛さながら魔界の夢の如く、立並ぶホテルの廣間や料理屋の硝子戸の中には、明い燈火の光が幾組となく白い肩を出した女や、頭髮を綺麗に撫付けた男の姿を照し、彼方此方の高い二階の窓からは、玉突の棒を片手に、深夜の勝負に疲勞を知らぬ男の影も見え、さて其の邊の酒屋やカツフエーの彩つた戸口には媚を賣る女の出入絕える間もない。私は四辻に佇立んでは此の有樣をヂツと打目戍り、如何なる事業も天才も時來れば皆滅びて了ふ人生には、唯だこの青春の狂樂、これより他には何物もないとつく〳〵感じた事もあつた。

此様生涯を送つて居る中、私はかのマリヤンと呼ぶ女藝人と懇意になつたのです。

或夜例の如く劇場が閉場てから夜を生命の女供が能く集る料理屋へと、私は道樂友達三人連で、獨身時代の鋭い眼をキヨロ□□させながら這入つて行くと、唯とある食卓に二人連の女が、知己ちかづきと見えて吾々の一人を呼び止めた。

吾々は其の儘女の食卓に着いて、例の愚な話に罪もなく笑ひ興ずるのです。が、時としては聞くに堪へない劣等な語に思はずぞつとすると、絕えず自分の弱點を憤つて居る念がむら□□と湧起り、同時に果敢さが身に浸渡つて私ばかりは兎角無言に陷り易い。

この樣子を見て取つたマリヤンは私をば至極遊樂あそびには初心うぶな男と思つたらしく、「何故、そんなに鬱いでいらつしやるんです、もつと大きな聲でお笑ひなさい。」と時には氣の毒さうに私の顏を見ました。

夜の二時過まで騒いだ後、吾々は二人の女をば例の如く各その家まで送つて行く事となつたが、往來へ出て辻馬車を呼ぶ時に、どう云ふ其の場の機はずみであつたか、二人の友はネリーと呼ぶ女と三人一組になり、私とマリヤンとは全くの二人連で別の馬車に乗つた。

彼女はハドソン河に近いアツパートメントに住んで居ると云ふので、ブロードウヱーを北へ小半時間、市内目拔の場所を離れると、直ぐ樣眞夜中過ぎの淋しさは物凄いばかり、我を運ぶ馬の蹄ひづめの空遠く反響し、車の窓から射込む夜の空明りは白粉した女の顏をば蒼く朧ろに照す。

マリヤンは毎夜を深す身の疲勞か、今は力なく頭を後に倚せかけ、重げな瞼を折々は押開いて、私の方を流眄ながしめに見ながら態とらしく紅さした口許に笑ひを浮べる。が、最う强ひて話しをしかける元氣も無いらしい。

私は默然として女の身に付けた化粧の薫を深く吸ひながら凝と其の横顏を打目戍つた。

年紀は二十一二か。全體が小作りで頸の長い頤おとがひの高慢らしく尖つた眼の大きい圓顏で、小くて堅く締つた口許には何か冷笑するやうな諷刺が含まれて居る———決して美人と云ふのでは無い、大きな油畫のモデルでは無いが、一筆ペンシルを振つた漫畫の風情。人は時として「完成」よりも「未成」の風致に却て强く見せられる事がある。

私は殆ど仰向に居眠つて居る彼女の唇の上に輕く我が唇を押付けた。柔かな、暖い呼吸は直に私の身中に突入る。

マリヤンはぱつちりと其の大きな眼を開いて私の顏を見たが、その儘再び居眠つて了ふ。私は車窓まどの外に並木の影の後方うしろざまに動いて行くのを見、又遠く空の端れに風の走る音を聽いたが、心は早くも夢ゆめ現うつゝに彷徨ひ、今一度と重て顏を近付ける———途端に馬蹄の響ハタと止み車は明い入口の前に止つた。

「マリヤン。」

私の聲に彼女は初めて目覺めたらしく膝の上に置いた白い鼠の毛の暖手袋マツフで眼を擦りながら、

「好い心持に夢を見て居たんです………が、それぢや接吻なすつたのはあなたなんですか。」

私は一時の擧動に耻入つて何とも答へず俯目になると、マリヤンは高くほゝゝほと笑ひながら、丁度其の時馭者の明ける車の戸から、鳥のやうに裾輕く飛び下りた。

私は彼女が五階目の居室へやまで送つていつたが、其の夜は五分ほども長居はせず、その儘辭して家へ歸つた———すると其の翌日の午後の事、私は使ひの子供から一通の書状を受取つた。次のやうな文句が綴られてある。

我が身は君を待たんが爲めに、何丁目なるホテルに引移り候。かの上町の住居は戀の私語さゝめごとに便ならず候へば。

我が身は君を一目見て戀し候。我等の戀は此の如し、何故とな問ひ給ひそ。あゝ今宵の逢瀬まで、さらば———（と此の最後は佛蘭西語で書いて）戀するＭより

この年月の夢は今こそ誠となつた。私の決心は恐らく彼女の決心よりも迅速であつたらう。私は取るものも取りあへず其の夜示されたホテルに駈け付けると其の儘一年半ばかりの長い月日を女と二人で夢のやうに暮して了つた。

私等は生きて居る人間の身の歡樂たのしみを味ひ得らるゝ限り味はうと云ふので、或時は凡ての飲食物が接吻の味を減そぎは爲まいかと氣遣ひ、飢を支へる水とパンとに口を動かす外は絕ず接吻して居た事もあり、又或時は若い血の暖みを遺憾なく感じて見たいつもりで、冬の夜通しを窓を明けたまゝ抱合うて居た事もあつた位。

然し此の人の世は如何に香しい夢とても、如何に深い醉とても、

時來れば覺め消えるが常である。私は今日となつて考へて見るとあれほどまでに戀し合うて居たものを、どうして別れる氣になつたものか、殆ど不思議で、それをば說明する事は出來ないのです。敎育から得た理智の念が追々魔醉した心を呼覺した爲めと見てもよからう。或は男性固有の功名心が次第に戀の夢よりも强くなつて來た爲め、或はタンホイザーの物語を其儘に溫柔郷をんじうきやうの歡樂につかれて靑山流水の淸淡せいたんに接したくなつた爲め、或は暖室の重苦しい花の香に醉うた後再び外氣の冷淸に觸れたくなつた爲めと見てもよからう………兎に角私は止るマリヤンをば打捨てゝ再び社會の人となつたのです。

もう二度と若い時代の愚な夢には耽るまい。人間の職務は地上の生命と共に消えて了ふ歡樂に醉ふ事よりも、もつと高尙で且つ永久のものがある。先づ善良なる市民となる爲めに正當な家庭を作れ。幸ひにして私は米國の社會には名のある家に生れ父の遺產も少からずあつた爲め交際社會へ出ると、世は狹くて又廣いもので、誰一人私の昔を知つて居るものはなく、程なく私はジヨゼフインと云ふ判事某の令孃と結婚しました。

して今日、歐洲に新婚旅行の途すがら、此處に共々オペラを聽いて居る………私は舞臺で歌つて居る樂師タンホイザーの恨をば其の儘に我が胸の底深く、懷舊の淚を呑込んで居たが、それをば知る由もない妻ジヨゼフインは上流社會の女性の常として唯だ主義なく技巧的に修練された藝術鑑賞の態度で傾聽して居るのに過なかつたらしい。

然しあなたも已に感じて居られる通りワグナーの音樂には（と博

士は鳥渡私の顏を見遣つて、）他の凡の音樂とは類を異にし聽く者の心の底に何か知ら強い感化を與へねば止まぬ神祕の力が籠つて居る。

　されば一幕目は濟み二幕目の廣い宮殿の場、三幕目巡禮の歸り………とオペラ三幕を聽き了つた時には、私の妻は何やら物思はしい樣子になり、掻亂された空想の中から、何か纏つた感念を探りたいと悶えるらしく見えたです。

　私の方は又私自身の物思ひに知ず□□語少く、二人は劇場を出ると其の儘、直ぐ馬車に乘つて旅館に歸つて來た。

　二人とも疲れて煖爐の前の椅子に身を落すと、間もなく妻は片手に頰を支へながら、「一體、あのオペラの理想は如何云ふんでせう。」と私の顏を見上げました。

　大きな古い旅館の一室、片隅の小机の上に、緑色の笠を冠つた燈火が點いて居るばかり、窓の外には何の物音も聞えぬ。吾々米國人には、この寂とした舊世界の都の夜半には、何處からともなく、幾世紀間の樣々な人間の聲も聞き得らるゝやうに思はれ、驚いて見廻せば凡てを暗色に飾つてある壁と天井に調和して、窓や戶口に掛けてある重く濃い天鵞絨の帷帳とばりの粛然と絹の敷物の上に垂れて居る樣子、私は古い寺院の壁から迫るやうな冷氣を感じた。

　椅子から立上つて天井から釣してある電燈を點じやうとすると、妻は手振でそれをば制した。しんみりと話でもするには餘り明くない方がよいと思つたのであらう。元の椅子に坐ると妻は沈んだ聲で問ひ掛けます。

「あなた。私にはどうも合點が行かないのです、タンホイザーが女

神に別れて故郷に歸つて來る心持はさも然うであらうと思ふんですが、さて歸つて來た後、自分を慕つて居る領主の姫君ヱリザベツトの目前で一度後悔した女神の事を思ひ出すと云ふのは何う云ふ譯でせう。私にはあの心持が分らないのです。」

　私の耳には忽如として、

　　戀の女神よ………ヰナスのみこそ御身に愛を語るなれ

　　(Die Göttin der Liebe)

と激しいタンホイザーの歌が聞え出す、同時に心の底にはマリヤンの面影。私は燈火あかりの達かぬ暗い天井の一隅に眼を注いだ儘、夢に獨語するやうな調子で答へた。

「それが卽ち人生とも云ふべきものだ。忘れやうとするけれども忘れられない。愚と知りながら陷り悶える。何に限らず理と情との煩悶、一步進めれば肉體と精靈の格鬪、現實と理想の衝突矛盾。此の不條理が無ければ人生は如何に幸福であらう………然し其れは及ばぬ夢で私にはこの肉心にくしんの煩悶が人生の免れない悲慘な運命であるやうに思はれる………。」

　話す中に私は弱い我身の上のみならず地上に住む凡ての人の運命が果敢く思はれて來て、子供のやうに譯もなく大聲を上げて泣いて見たいやうな氣がして來た。

「それですから、私達は神に………宗教に依賴するのではありませんか。」

　此う云ふ妻の聲は、生きて居る女の口からではなく、何處か遠くから響いて來るやう。私は聲を顫はし、

「然し、宗教も信仰も、時としては何の慰藉なぐさめも與へぬ事が

ある………例へば彼のタンホイザー、彼は神のやうな乙女ヱリザベツトに勸められ羅馬へ跣足はだし詣まゐりに行つたが、法王から謝罪の願が許されない。其故再び邪教の神ヰナスの山に還らうと云ふ………あの一節は宗教が一度闇に迷つた人間に何の光も與へなかつた事を諷したのでは無からうか。然し最後には如何に魔界の愛に迷つたタンホイザーも清い乙女ヱリザベツトの亡骸を見て悶絕する。其の刹那に救の歌は遠く響く………タンホイザーの魂を奈落から救つたのはヱリザベツトの愛である清い乙女の愛である。」

　云ひ切つて凝と妻の顏を見た。妻は白い兩肩と廣い胸とを出した卵白色の夜會服を着けて居たので、靜止ぢツとして居る其の姿が薄い綠色の燈火を受け、暗い室の中に浮んで居る樣、彼女の身の廻りからは氣高い女德の光榮が輝き發するかと思はれた。

　私は一時の感激に襲はれる儘、突然身を其の足許に投伏し、力一杯に其の手を握り締め、「永劫の罪から吾々を救ふものは清い乙女の愛である。ジヨゼフイン、お前は私のヱリザベツトである。」と叫んで熱い涙を其の膝の上に濺いだ。

「それぢや、あなたは何かタンホイザーのやうな………。」と妻も今は稍訝いぶかし氣に、打仰ぐ私の顏を見下す。私は加特敎徒が懺悔臺の前に膝付いたと同樣、唯だもう懺悔したいと云ふ切ない必要に迫られるばかり、前後の考へもなく過ぎた身の一伍いちぶ一什しじふを殘らず打明けて了つた。

　結果は如何であつたか。妻はヱリザベツトのやうな氣高い愛をもつて居たか。否々。私の話を聞くと共に妻の眼は激しい嫉妬の焰と、銳い非難の光に、雷光いなづまの如く………あゝ、其の恐しい

一瞥。

　私は忽ち我に立返ると同時に一時の感激からよしない祕密を語つた輕率を悔い、打詫びるやら、云慰めるやらいろ□□に心を盡したが、もうそれは誠實の意氣を缺いて居た。云はゞ技巧的に自分の非を蔽ひ隱さうとするのであつたから事はます□□惡い方に進むばかり。

「よくも私を今日まで欺しておいでなすつた………。」と此の一語を最後に妻は縋る私の手を振拂つて次の室へと行つて了つた。

　人生第一の幸福なる私等の新婚旅行は其の後如何に悲慘なるものとなつたであらう。翌日に維納ウヰンナを立ち行先は獨逸に出で直にハンブルグの港から歸航の途についたが、其の途すがらも妻は食事のテーブル汽車の窓船の上、私には一語も云ひ掛けない。

　然し私は何時か一度はわが眞心の通ずる時妻の怒の打解ける折が來やう、と有る限りの勇氣と忍耐に漸く一縷の望みを繋いで居た。が、一度閉ぢた女の胸は永遠に開くものではない。彼の女の頬は日一日に肉落ち、その眼は恐しい程に鋭く輝いて來て、幾日の後、紐育へ歸つて來た時には出發當時のジヨゼフインとは宛ら別人のやうに思はれて了つた。

　で、私は妻の申出づる儘に止むを得ず一時夫婦別居する事になつたが、程なく正當な離婚の請求を受け續いて四年の後には他へ再婚したとの報知に接したです。あゝ、わがジヨゼフイン。此して私は此に二十年あまり孤獨の生活を續けて居る………

　Ｂ——博士は語了ると共に椅子から立ち二三度室の中をば手を振

つて歩き廻つたが、やがて室の片隅に据ゑてある大きなグランド、ピアノの方に蹣よろめく如く走り寄るかと見ると、忽ち顫へる手先にタンホイザー中の巡禮の一曲を奏出した。

　ピアノの上に置いた花瓶はないけから白い薔薇の花が湧起る低音ベースの響につれて、一片二片と散り掛ける。

（明治四十年正月）

寢覺め

洋行と云ふ虚榮の聲に醉ひ、滯在手當金幾弗との慾に動され、名と利との二道をかけて、日頃社内を運動して居た結果、澤崎三郎氏は丸圓會社紐育支店の營業部長とやらに榮轉し、妻子を殘して、一人喜び勇んで米國に旅立つたのである。

然し何事も見ると聞くとの相違で、澤崎は紐育に到着して一ケ月二ケ月位は、何が何やら夢中で暮して了つたが、稍支店内の事情も分り市中の往來も地圖なくして歩ける程になると、追々に堪へがたい無聊を覺え出した。

朝九時から午後の五時まで事務所に働いて居る中はよいが、さて事務所がひけると紐育は廣いけれど澤崎は何處へも行所ゆくところがない。學校を出立ての若い書記クラーク供ならば一夜の馬鹿話に鬱うさ晴しも出來やうが、營業部長といふ稍地位もある身になつては外面の體裁が氣にかかり、さう相手選ばずに冗談も云へぬ。西洋人が夜を探して遊ぶクラブやホテルへ行つて交際すれば外國の事情を知る上からも有益であるとは知つて居るが、此方面は經濟上から門口へも寄り付けぬ譯。さらば靜かに讀書でもしやうか、と云つて既に學校を出た後、幾年浮世の風に吹きさらされた身は新思潮新知識に對する好奇の念漸く失せて、一時は一寸珍らしく感じた外國の事情さへ其程までにして研究する勇氣はない。

で、日一日三月半年と經てば經つほど、日常生活の不便と境遇の寂寥とを感ずるばかり。時々は堪へられぬ程朝風呂に這入つて見たい氣がしたり、鰻の蒲燒に一杯熱いのを引掛けて見たくなつたり、

兎角故郷の事ばかりが思出される。故郷には何でもはい〳〵と云つて用をする妻もある。一時は内所で圍者を置いた事もある。其樣事を思起すと今年四十になる好い年をして、何一ツ不自由のない日本を出て來た事が、何とも云へぬ程愚らしく感ぜられ、忙しい會社の事務を取つて居る最中にも、或は疲れて眠る夜中にも折々影の如く烟の如く何やら譯の分らぬ事が胸の底に浮び出て、ハツと心付いてわれに返ると、急に全身の力が拔けて了つたやうな物淋しい心地になるのであつた。

彼は自ら其の弱點を愧はぢ又憤り、時にはウヰスキーを引掛けたり時には冷靜に事務の事に心を轉じて見たりするが、然し此の寂寞無聊の念は更に去らず、何處か心の一部に大な空洞うつろが出來て其處へ冷い風が吹込んで來るやうな心持がするのである。

然し澤崎は此の心持をば如何なる理由とも知らず、又知らうとも思はなかつた。もと〳〵其の妻は世俗の習慣に從つて娶つた下女代り、其の家は世間へ見せる爲めの玄關、其の子は生れたるによつて教育してある………と云ふのに過ぎぬので、其の妻、其の家の爲に思惱むなぞは如何にも女々しく意氣地なく感ぜられてならない。殊に煩悶だの、沈思だのと、内心の方面に氣を向ける事は男子の恥と信じた過渡期の教育を受けた身は猶更の事、彼は遂に自ら大笑一番して、いや此樣妙な心持になるのも、つまる處女に不自由してゐるからだと我と我身を賤しく解釋して僅に其の意志の强さに滿足しやうとした。

成程、女に不自由して居るのは事實である。紐育に來て以來時には日本人同士の宴會の歸りなぞ、こつそり遊びに行く事はあつて

も、いつもジヤツプと見くびられて現金引換通一遍の待遇もてなしに長くは居堪らず、毎夜睡る我が寢床は要するに我が身一人より外に暖めて吳れるものは無い身の上。紐育中今は何處に行つても目につくものは來た當座驚いた二十階の高い建物ではなくて、コーセツトで胸を締め上げた胴の細い臀の大きい女の姿ばかり。其の步き振から物云ふ風まで憎いほど思はせ振りに見えてならぬ。

彼は每日事務所オツフイースに行く爲め地下電車に乘つて、下町ダウンタウンと稱する商業區域と住宅ばかりある靜な上町アツプタウンとの間を往來して居るのであるが、朝の九時頃と午後の五時頃と云へば、殆ど紐育中の若い男や女が何れも此の時刻に往來すると云つても可い位なので、車中の混雜は一通の事ではない。

停車場のプラツトホーム每に、人の山をなした男女は列車の停るか停らぬ中に、潮の如く車中に突入り、我先にと席を爭つて、僅に腰を下し得たものは、一分の猶豫もせず直樣手にした新聞を讀みかける。席を取り損ねたものは或は釣革にぶら下り或は押しつ押されつ人の肩に凭掛つて男女の禮儀作法を問ふ暇もなく無理にも割入つて腰を掛けやうと、互に其の隙を覗つて居る。

澤崎は米人の多忙を模して、何時も新聞は手にしながらも車の混雜に若い賣娘やオツフイース娘なぞが遠慮なく自分の右と左にぴつたり押坐り、車の發着する度々の動搖に柔い身體を觸合す。其れのみか次第々々に身の暖氣あたゝかさを傳へて來ると、もう細い新聞の活字なぞは見えなくなつて、彼は突然足の指先に輕い痙攣を覺え頭髮かみのけの根元に痒かゆさを感じ、やがて身中全體を通じて一種の苦悶を覺える。空氣は地の下の事とて車中の熱鬧ねつたうに肉

食人種特有の腋臭わきがの臭氣を加へて一層重苦しく、不良の酒のやうに絕えざる車體の微動につれて人を醉はす。澤崎は熱に病むが如く恍惚となつて、若し此の上、十五分間と車中に坐つて居たなら我知らず隣席となりに坐つて居る女の手でも握りはせぬかと、危く自制の力を失ひかける其の刹那、車は幸ひにも、いつも彼が下車すべき停車場に着く。彼は狼狽て車を飛出し冷い外の空氣にハツと吐息を漏すのである。

　彼は今更らしく幾度ともなく何とか方法を付けねばならぬと云つて居るが、差當り何うする道もない。室借をして居る家には年頃の娘もあり、鳥渡小綺麗こいきな下婢も居るが、要するに事が面倒である。若い會社の書記ども同然にさう屡遊びに行くのも餘りに馬鹿々々しい。つい其れなりになつて、もう彼此れ一年半、渡米以來二度目の春が廻つて來て公園の森に駒鳥の集ふ五月となつた。

　彼はいまゝで此れ程に春の力を感じた事は無い。輕い微風は肺に浸渡つて身を擽くすぐるやうに思はれ、柔い日光は皮膚に突入つて血を燃す。晴渡つた青空の下を步いて居る街の女は何れも此れも皆自分を惱す爲めに厚い冬衣を捨てゝ、薄い夏衣の下に見事な肉付を忍ばせ、後手に引上げた輕い裾からはわざと自分を冷笑する爲めに絹の靴足袋を見せるのかと思はれた。

　其の朝彼は殊更に地下鐵道内の混雜を恐れ、わざ〳〵遠廻りまでして、餘り混まない高架鐵道線によつて會社へ出勤し、自分の机の置いてある支配室へ這入つたが、すると片隅の椅子に見馴れぬ若い西洋婦人が自分の出勤を待つものゝ如く坐つて居るのに胸を躍らせた。

彼は全く失念して居たのだ。實は昨日限り長らく此の事務所で電話の取次などして居た五十近い老婦人が都合あつて辭職した處から、其の後任として新聞の廣告によつて此の若い女を雇入れたので、今日から事務を引繼ぐ爲めにと彼の命令と説明を待つて居たのである。

電話の應接と其の暇々に英文書狀の整理を手傳ふだけの事であるが、彼は一ツ□□云聞す中にも此れからは毎日此の若い女を我が傍に置いて我が事務を手傳はすのかと思ふと、妙に嬉しいやうな氣がして、かの皺だらけの半白な眼鏡をかけた以前の老婦人が居た時に比べると、事務室全體が明くなつたやう。

彼は事務を取つて居る最中にも五分と其の横顔から目を放す事が出來ない。年は二十六七にもならう。小肥こぶとりの身丈せいは高からず容色も十人並ではあるが、黑い頭髮かみを眞中から割つて鳥打帽でも冠つたやうに頭の周圍へ巻返し、上から下まで出來合の勸工場もので小綺麗に粧つた姿は品格の無い處が、乃ち重なる魔力となつて、往來なぞで一寸摺違つた男の目にも長く記憶されると云ふ其の模型タイプの一例である。澤崎は何かにつけて話をしかけ、早く懇意に打解けて見やうと勤めたが、女は日本人の會社には初めての奉公、萬事に氣の置ける爲めか、一日金米糖キヤンデーを口に頰張り相手構はずに笑つて暮す例のオツフイースガールには似も寄らず、至つて無口で、僅に其の名をミセス、デニングと云ひ、一年ほど前に寡婦になつて今は一人下宿住ひをして居るとばかり。折々は何か物思はしく頰杖をして居る事さへある。

やがて一週間ばかりも經つたが、女は一向物馴れた様子も見せ

ず、朝は往々出勤時間に後れて來る事もあり、遂に先週の末頃からは病氣とやらで缺勤し初めた。澤崎は何となく殘念な氣がして成らぬ。病氣とばかりで未だ止めるとは云つて來ぬが、矢張見知らぬ日本人の中で働くのが厭なのであらう………その中に何とか云つて來るであらうと、澤崎は次の週の月曜日一日待つて其の次の火曜日をも空しく過した。

　其の日の夕暮、彼は晩餐後に何かの用事でアムステルダム通と云つて長屋續きの見付の惡い小賣店ばかりに、路幅は廣いが如何にも場末の貧乏街らしく見える大道を行き掛けた時である。風の無い蒸暑い五月末の黃昏、街燈に火は點きながら、四邊は紫色にぽつと霞み渡つた儘まだ明い。其の邊の開け放した窓や戶口からは、無性らしく頭髮を亂した女房や、服裝の汚い割りに美しく化粧した娘の顏が見え、八百屋だの果物屋だのが露店を出して居る往來端では子供や小娘がワイ□□云つて遊んで居る。

　澤崎は譯もなく柳町か赤城下の街あたりのさまを思ひ浮べて、佇立むともなく唯ある露店の前に佇立んだ途端に、其の傍の戶口から出て來た一人の女———見れば思掛けないかのデニングである。

　澤崎は餘りの意外に、遠慮なく其の名を呼び掛けて進み寄つた。

　女も一方ならず驚いたが、まさかに逃げ隱れも出來ないので、止むなく其の場に立竦んだものの、顏を外向けて何とも云出し兼ねて居る。

「御病氣は………もう能御座んすか。」

「はい、御庇樣で………」

「此の邊にお住ひなんですか。」

「はい、此の三階に部屋を借りて居ります。」
「明日はもう伺うです。會社へは………。」
「定めしお急しい處を、濟みませんでした。」
「病氣の時はお互に止を得んです………どうです、散歩にでもお出掛の處ぢや無かつたんですか、御迷惑でないなら御一緒に其の邊までお伴しませう。」

恁う切出されてはいやとも云へず、女は其の儘澤崎と連れ立つて、何處と云ふ目的もなく並木の植つた廣いブロードウヱーの方へ歩いて行つた。ブロードウヱーも大分北へ寄つた此の邊になると兩側とも靜なアツパートメントハウスばかりで、人通も激しからず建物の間々からはハドソン河畔の樹木と河水が見える。

「どうです、河端まで行つて見ませう、あの眞青な木の葉の色はもうすつかり夏ですな。」

一町ほど歩いて樹の下のベンチに腰を下した。少時は無言で黃昏から夜にと移行く河面の景色を眺めて居たが、澤崎は忽ち思出したやうに、

「明日あたりは會社へお出になりますか。」

女は聞えぬ風で默つて居たが稍決心したらしく、

「私、實はもうお斷りしやうかと思つて居りました。」
「どうしてゞす。何か御不滿足な………。」
「どうしまして。」と強く打消して、「矢張病氣の所爲ですか、どうも氣が引立ちませんから。」
「どう云ふ御病氣です………。」

女は答に窮したらしく默つて俯向いた。澤崎は更に、

「オツフイースなぞへ働きにお出でなさるのは此度が始めてゞすか？」

「いえ、初めてと云ふ譯でも御在ません。結婚します前は長らく方々の商店や會社に通つて居りました。」

「其れぢや事務には隨分馴れておいでなさる譯ですな。」

「いえ、不可せんです。結婚しましてから丁度三年ばかりは、とんと外へも出ず、家にばかり居たものですから、つまり怠け癖が付いて了つたんですね。夫が死亡ましてからは復た元の樣に働きに出なければならない譯になつたのですけれど………もう何ですか、根氣が失りましてね。」と淋しく笑ふ。

「然し私の事務所なぞは仕事と云つても大して面倒な事はなし、西洋人の女もあなた一人で、別に交際もいらず………何にか御辛抱が出來さうなものですがね。」

「全くで御在ますよ。あなたの事務所位結構な處は、紐育中どこにもありやしません。ですから私も是非御世話になりたいと思つて居たんですが、毎朝つい………。」と云つて女は覺えず口を噤み其の頰を赧めた。

　四邊はもう夜である。明いやうで暗く暗いやうで明い夏の夜である。二人の坐つて居るベンチの後から大きな菩提樹の若葉が、星の光と街燈の火影を遮つて、二人の上に濃い影を投げて居るのに、女は稍安心したらしく竊そつと男の樣子を覗つた。

　澤崎は詩も歌も知らない身ながら、美しい若葉の夜の何となく風情深く、人なき腰掛に手こそ取らね、女と居並んで話をして居る事、それだけが非常な幸福の如く感ぜられて、話の材料なぞは一向

選ぶ處ではない。

「あなたのお連合は何をなすつていらしつたんです。」

「保險會社へ出て居りましたんです。」

「お淋しいでせうね、何かに付けて。」

「えゝ。もう………一時はどうしやうかと途法に暮れてしまひました。」

　川風が靜に鬢の毛を撫る度々四邊には若葉が囁く。近くの家で弾く洋琴ピアノの音も聞える。女は何時となく氣が打解けて來ると、何と云ふ譯もなく、日中は親しい友達にも云兼る樣な身の上の話が相手選ばずにして見たくて堪らなくなつた。優しい夏の夜の星に身の上を嘆かこつとでも云はうか………。腰掛の背に片肱をつき獨語のやうに、

「良人たくの居ます時分はほんとに面白う御ざいました。」

　澤崎も已に一年以上此國に居る身とて何時となく西洋人が露出むきだしな癡話のろけには馴れて居た。

「さうでしたらうね。」と如何にも眞顔に相槌を打ち、「どうして御結婚なすつたんです。」

「それは私も彼人も下町の會社へ行く時、毎朝同じ電車に乗合はせたのがもとで土曜日や日曜日毎に遊びに出る………ぢきに話がついて一緒になつたのです。良人やどは少し貯金が出來るまでは從前通り夫婦共稼ぎをした方がと申したんですけれど、私はもう朝早くから起きて夕方までキチンと椅子に坐つて居るのがいやで□□………實は其れが爲め一日も早く深切な人を見付けて頼りにしたいと思つて居た位なんですから、到頭我儘を通して了ひました。私には全く

朝眠いのを無理に起る程辛い事はありません。まして寒い時分なんか、暖い蒲團の中から起出して顔を洗つたり衣服きものを着たりするのは、眞個ほんとうに罪です。仕方がないもんですから、良人は毎朝、私を寢床の中に置去りにして出て行きましたが、私は其の代り土曜の夜になつたからつて、紐育の女のやうに、是非芝居へ行か無ければならないと人様に散財は掛けません。毎朝晩く起きて一日家にばかり居ますと、さア芝居へ行くのだと云つて、わざ□□衣服を着かへたり、何かするのがおつくう、、、、になりましてね、却て長椅子へでも凭掛つて小說を讀んで居る方が幾何いくらましだか知れやしません。ですから良人うちのひとも仕舞には結句お金がいらなくていゝと云うて居りました。」

　澤崎は餘り奧底なく話されて少しは辟易しながらも、猶話を絕すまいと相槌を打つ。此方は唯さへ饒舌おしやべりな西洋婦人いよ□□圖に乗つて、

「其ればかりぢやない、良人は恁う云ひますの………お前は髮を綺麗に梳上たり、衣服をキチンと着たりするよりも寢起のまゝの姿が一番美人に見えますツて………ほゝゝゝほ。私は人を馬鹿にするつて怒りましたら、良人は眞面目らしく、お前は亞米利加の女見たやうに働く爲めに出來たのぢや無い。土耳古か波斯ペルシヤの美人のやうに薄い霞のやうな衣服を着て大きな家の中で泉水へ落る水の音に晝の中もうつとり、、、、と夢を見て居る女だつて、さう申すんでした。」

　猶もつまらぬ事をあれやこれやと話し續けて居たが、軈て思出したやうに、「もう、何時でせう。」と時間を訊きそれを機會しほに

立上つた。澤崎も今は引止め兼て、
「其ぢや明日は………まあ兎に角事務所へ出ていらつしやい。待つて居ますから。」
　其の儘別れたが、いざ翌日になると、待つかひもなく、女は病氣を云立てゝ是非にも辭職する旨をば電報で云越した。
　何と云ふ我儘………日本人と見て馬鹿にする、と在米日本人の常として、直樣妙な愛國的僻ひがみ根性こんじやうを出し澤崎は大に腹を立てたが、喧嘩にもならず間もなく後任として、今度は十五六の小僧を雇入れたが、さて五日、十日と經つて見ると、去る夏の夜ハドソン河畔の腰掛に話しをした一條は自分の身にはあるまじき小說のやうな心地がし出す。殊に女の口づから良人に別れて淋しい身の上を嘆ち、遂には其の寢起の姿までが如何のかうのと、女の身にしては祕密と云つても可いやうな事を包まずに打明けてくれた。それやこれやと思合すと女は謎を掛けて自分を誘いざなつたのであるとしか思はれぬ。折角の機會をば氣の付かぬばかりに取逃してしまつたのかと思へば、遺憾の念は一層深く忽ち何處やら身内の肉を毟むしられるやうに氣が焦立つて來て、澤崎は或晚一人こつそりと、かのアムステルダム通りに赴き見覺えて居た建物の三階に上つて、それらしい戶口を叩いた。
　顏を出したのは胴衣ちよつき一枚の職人らしい、五十ばかりの大男で、食事をして居た最中と見えて、髭の端に麪パンの粉をつけた儘口をもぐもぐさせて居る。
「ミツセス、デニングと云ふのは此方ですか。」
　訊くと大男は忽ち廊下の方を振向き大聲でその女房らしい女の名

を呼び、「おい、又誰れか、彼の尼ツちよを訪ねて來た、お前、何とか云つて見てくんねえ。」

　今度は目のしよぼ、、、□□した顎の突出た婆が現出て、胡散らしく澤崎の樣子を打目戍つて居たが漸くに、

「お氣の毒さまですが、あの女はもう家には居りませんですよ。昨日の朝、店立たなだてを喰はしてしまつたんで。お前さんは矢張何か彼女あれのお身寄りですかい。」

　譯は分らぬが如何にも憎々しい物云振り。澤崎は當惑しながらも、僅に沈着おちつきを見せて、「私は彼の女を雇つて居た會社の支配人ぢや………。」

「へゝえ。」

「病氣とばかりで一向出勤せんから、鳥渡樣子を見に來たんぢやが………店立を喰したとは又何う云ふ譯だね。」

「旦那、其れぢや貴君も一杯喰された方なんですね。」と婆は俄に調子を變へて問ひもせぬのに長々と話し出す。

「旦那、あんな根性の太い奴はありやしません。以前御亭主を持つてる中は、二人で此のつい上の五階目に暮して居たんですがね、一日女郎ぢよろの腐つたやうな亂次だらしもない風をして、近邊の若い女房さん達は其れ□□商店へ出るとか、又は家で手内職をするとか、皆精一杯に稼いで居るのにあの女ばかりは手前の家一ツ掃除もしないで野良野良暮して居たんでさ。其の中につい一昨年の暮、急病で御亭主が死んだとなつてからはもう何うする事も出來ない。五階目の室は家賃も高し、一人では廣過るツて云ふので、丁度私の宅に明間があつたのを幸ひ、其れなり此處へ引越して來たんで。最初

半年ばかりは何程か貯金もあつたと見えて、几帳面に室代だけは拂つてくれましたがね、其れからは段々と狡猾ずるくなつて此の次〳〵と延し初めた。其ればかりぢや無い。随分といゝ働き口があつても二週間か三週間で、すぐ飽きてしまつて、此方から止めてしまふと云ふ始末ですもの。此の分で行つたら到底家賃の貸は取れない、と實は心配しながらも、まさか御亭主の居る時分から知つて居る中ぢや、さう因業にも出られないんで困り切つて居たんでさ。」

「ところが到頭一昨日をとゝひの夜の事つた。」と今度は傍に立つて居た職人らしい亭主が話を引繼いだ。

「一昨日の夜到頭金に困つて來たと見えて、何處からか男を喰へ込んで、己の家を體のいゝ地獄宿にしやがつた。其の前からもちよいちよい怪しい風は見えたんだが、證據が無えから默つて居たんで、一昨日の夜は一時二時と云ふ眞夜中、並大抵の友達の來る譯が無え、己の處は恁う見えても、腕一ツで稼ぐ職人の家だ、地獄の宿は眞平だ、家賃の貸も何にも要らねえから………と目ぼしい衣服と道具を質に取つて其の朝早々追出してしまつた………。」

「何處へ行つたか知らないかね。」と澤崎は覺えず嘆息した。

「知るもんですか。大方夜になつたら其の邊の酒屋でも彷徨いて居ませうよ。」

澤崎はすご〳〵階段を下りて外へ出たが、女の墮落した一條を聞知るにつけて一層の遺憾を覺え、何故あの時さうと氣付かず、見す見す機會を逸したのであらうと靴で敷石を踏鳴し齒を嚙締めた。

何にもよらず逸した機會を思返すほど、無念で寢覺の惡いものはない。彼は時を經折に觸れて彼の女の事を思起して居たが、遂に再

會する機會なくやがて在留三年となつて、歸朝の時節も早や二週間ほどに迫つて來た。

　で、多分送別の意か何かであつたらう、彼は能く花骨牌はながるたを引き馴れた二三の日本人と倶樂部の一室で正宗まさむねを飲んだ時、或る日本雜貨店の支配人で、故鄕には娘もあり孫もありながら頻と美人寫眞の蒐集コレクシヨンに熱心して居る紳士が、醉つた末の雜談に此れは近頃さる處で手に入れた天下の逸品だと自慢で示す二三枚の寫眞。

　澤崎は何氣なく眺めると何れも厭らしい身の投げ態に樣子を變へて居るが、顏は見忘れぬ彼のデニングと云ふ女である。

　あゝ、さては彼の女、樂して儲ける家業の選みなく折々は寫眞師のモデルにも成ると見える。彼は再び例の遺憾千萬に身を顫したが遂に運拙くして再會の機なく其の儘歸國して了つた。

　以後澤崎三郎氏は人から米國に關する其の意見を訊かれる時は何によらず、必ず次の如き論斷を以て話を結ぶのであつた。

「つまり米國ほど道德の腐敗した社會はない。生活の困難な處から貞操なぞ守る女は一人もないと云つて可い位だ。到底士君子の長く住むに堪へる所では無いです。」

（明治四十年四月）

一月一日

　一月一日の夜東洋銀行米國支店の頭取某氏の社宅では、例年の通り初春を祝ふ雜煮餠の宴會が開かれた。在留中は何れも獨身の下宿住ひ、正月が來ても屠蘇とそ一杯飮めぬ不自由に、銀行以外の紳士も多く來會して二十人近くの大人數である。

　キチーと云つて、此の社宅には頭取の三代も變つて、最う十年近く働いて居る獨逸種の下女と、頭取の細君の遠い親類だとか云ふ書生と、時には細君御自身までが手傳つて、目の廻る程に忙しく給仕をして居る。

「米國まで來て此樣御馳走になれやうとは、實に意外ですな。」と髯を捻つて嚴めしく禮を云ふもあれば、

「奧樣、此れでやツとホームシツクが直りました。」とにや□□笑ふもあり、又は、「何しろ二年振こんなお正月をした事がないんですから。」と愚癡ぐちらしく申譯するもある。

　何れも西洋人相手の晩餐會デンナーとはちがひスープの音の氣兼もない處から、閉切つた廣い食堂には、此の多人數がニチヤ□□嚙む餠の音、汁を啜る音、さては、ごまめ、かずのこを嚙み碎く響、燒海苔の舌打なぞ、恐しく鳴り渡るにつれて、「どうだ。君一杯ひとつ。」の叫聲、手も達かぬテーブルの彼方此方を酒杯の取り遣り。雜談蛙の声の如く湧返つて居た。

　其の時突然、

「金田は又來ないな。あゝハイカラになつちや駄目だ。」とテーブルの片隅から喧嘩の相手でも欲しさうな醉つた聲が聞えた。

「金田か、妙な男さね、日本料理の宴會だと云へば顔を出した事がない。日本酒と米の飯ほど嫌ひなものは無いんだツて云ふから………。」
「米の飯が嫌ひ……其ア不思議だ。矢張り諸君の………銀行に居られる人か。」と誰れかゞ質問した。
「さうです。」と答へたのは主人の頭取で、「もう六七年米國に居るんだが………此の後も一生外國に居たいと云つてゐます。」
　騒然たる一座の雜談は忽ち此の奇妙な人物の噂に集注した。頭取は流石老人だけに當らず觸らず、
「鳥渡人好きはよくないかも知らんが極く無口な柔順しい男です。長く居るだけ米國の事情に通じて居るから、事務上には必要の人才です。」と隱な批評を加へて、酒杯に舌を潤はした。
「然し、餘り交際を知らん男ぢや無いですか。何程、酒が嫌ひでも、飯が嫌ひでも、日本人の好誼よしみとして、殊に今夜の如きは一月一日、元旦のお正月だ。」と最初の醉つた聲が不平らしく非難したが、すると此に應じて片隅から、今までは口を出さなかつた新しい聲が、
「然しまアさう攻擊せずと許して置き給へ。人には意外な事情があるもんだ。僕もつい此間まで知らなかつたのだが、先生の日本酒嫌ひ、日本飯嫌ひには深い理由があるんだ。」
「はア、さうか。」
「僕はそれ以來大に同情を表して居る。」
「一體、どう云ふ譯だ。」
「正月の話には、ちと適當しないやうだが………。」と其男は前置

して、「つい此間、クリスマスの二三日前の晩の事さ。西洋人に贈る進物の見立をして貰ふには、長く居る金田君に限ると思つてね、彼方此方とブロードウヱーの商店を案内して貰つた歸り、夜も晩くなるし、腹も空いたから、僕は何の氣なしに、近所の支那料理屋にでも行かうかと勸めると、先生は支那料理はいゝが、米の飯を見るのが厭だから………と云ふので、其のまゝ先生の案内で、何とか云ふ佛蘭西の料理屋に這入つたのさ。葡萄酒が好きだね………先生は。忽ちコツプに二三杯干して了ふと、少し酔つたと見えて、ぢツと目を据ゑて、半分ほど飲殘した眞赤な葡萄酒へ電氣燈の光の反射する色を見詰めて居たが、突然、
「君は兩親とも御健在ですか。」と訊く。妙な男だと思ひながらも、「えゝ、丈夫ですよ。」と答へると、俯向いて、
「私は………父はまだ達者ですが、母は私が學校を卒業する少し前に死亡なくなりました。」
　僕は返事に困つて、飲みたくもない水を飲みながら其の場を紛らした。
「君の父親フアーザーは、酒を飲まれるですか。」少時して又訊出す。
「いや、時々麥酒位は遣るやうです。大した事はありません。」
「それぢや、君の家庭は平和でせうね。實際、酒は不可んです。僕も酒は何によらず一滴も飲るまいと思つて居るんですが、矢張り多少は遺傳ですね。然し、私は日本酒だけは、どうしても口にする氣がしないです………匂ひを嗅いだゝけでも慄然ぞつとします。」
「何故です。」

「死んだ母の事を思ひ出すからです。酒ばかりぢやない、飯から、味噌汁から、何に限らず日本の料理を見ると、私は直ぐ死んだ母の事を思ひ出すのです。

聞いて下さいますか――――

私の父は或人は知つて居ませう、今では休職して了ひましたが、元は大審院の判事でした。維新以前の教育を受けた漢學者漢詩人其れに京都風の風流を學んだ茶人です。書畫骨董を初め刀劍盆栽盆石の鑑賞家で、家中はまるで植木屋と古道具屋を一緒にしたやうでした。毎日のやうに、何れも眼鏡を掛けた禿頭の古道具屋と、最う今日では鳥渡見られぬかと思ふ位な、妙な幇間ほうかん肌はだの屬官や裁判所の書記どもが詰め掛けて來て父の話相手酒の相手をして十二時過ぎで無ければ歸らない。其の給仕や酒の燗番をするのは誰あらう、母一人です。無論下女は仲働に御飯焚と二人まで居たのですが、父は茶人の癖として非常に食物の喧やかましい人だもので到底奉公人任せにしては置けない。母は三度々々自ら父の膳を作り酒の燗をつけ、時には飯までも焚かれた事がありました。其程にしてもまだ其の嗜好には適しなかつたものと見えて、父は三度々々必ず食物の小言を云はずに箸を取つた事がない。朝の味噌汁を啜る時からして三州味噌の香氣にほひがどうだ、鹽加減がどうだ、此の澤庵漬たくあんの切方は見られぬ、此の鹽からを此樣皿に入れる頓馬はない、此間買つた清水燒きよみづやきはどうした又破したのぢやないか、氣を付けてくれんと困るぞ………丁度落語家が眞似をする通り傍で聞いて居ても頭痛がする程小言を云はれる。

母の仕事は慝く永久に賞美されない料理人の外に、一寸觸つても

破れさうな書畫骨董の注意と盆栽の手入で、其れも時には禮の一ツも云はれゝばこそ、何時も料理と同じやうに行屆かぬ手拔りを見付出されては叱られて居た。ですから私が生れて第一に耳にしたものは、乃ち皺枯しわがれた父の口小言、第一に目にしたものは何時も襷を外した事のない母の姿で、無邪氣な幼心に父と云ふものは恐いもの、母と云ふものは痛しいものだと云ふ考へが、何より先に浸渡りました。

　私は殆ど父の膝に抱かれた事がない。時々は優しい聲を作つて私の名を呼ばれた事もあつたですが、猫のやうにいぢけて了つた私は恐くて近き得ないのです。殊に父の食事は前申す通り到底子供の口になぞ入れられる種類のものではないので、一度も膳を並べて箸を取つた事もなく、幼年から少年と時の經つに從つて、私は自然と父に對する親愛の情が疎くなるのみか、其の反對に父なるものは暴惡ばうあく無道ぶだうな鬼のやうに思はれ、其れにつれて母上は無論私の感ずる程では無かつたかも知れないが、兎に角父が憎さの私の眼だけには世の中に何一つ慰みもなく樂みもなく暮らして居られるやうに見えた。

　此う云ふ境遇から此う云ふ先入の感想を得て、私は軈て中學校に進み、圓滿な家庭のさまや無邪氣な子供の生活を寫した英語の讀本、其れから當時の雜誌や何やらを讀んで行くと愛ラヴだとか家庭ホームだとか云ふ文字の多く見られる西洋の思想が實に激しく私の心を突いたです。同時に、父の口にせられる孔子の敎だの武士道だのと云ふものは人生幸福の敵である、と云ふやうな極端な反抗の精神が何時とは無しに堅く胸中に基礎を築き上げて了つた。で、年と

共に鳥渡した日常の談話にも父とは意見が合はなくなりましたから、中學を出て高等の專門學校に入學すると共に、私は親許を去つて寄宿舍に這入り折々は母を訪問して歸る道すがら、自分は三年の後卒業したなら、父と別れて自分一個の新家庭を作り、母を請しやうじて愉快に食事をして見やう………とよく其樣事を考へて居ましたが、人生は夢の如しで、私の卒業する年の冬母上は黃泉あのよに行かれた。

　何でも夜半近くから急に大雪が降出した晚の事で、父は近頃買入れた松の盆栽をば庭の飛石に出して置いたので、この雪の一夜を其の儘にして置いたなら雪の重さで枝振りが惡くなるからと、下女か誰かを呼び起して家の中へ入れさせやうと云はれた。處が母上は折惡しく下女が二三日風邪の氣味で弱つて居た事を知つて居られたので、可哀さうですからと自ら寢衣ねまきのまゝで雨戶を繰つて庭に出て、雪の中をば重い松の盆栽を運ばれた………母は其夜から俄に感冒かぜを引かれ忽ち急性肺炎を起した。

　私は實に大打擊を蒙りました。其の後と云ふものは友人と一緒に牛肉屋だの料理屋なぞへ行つても、酒の燗が不可ないとか飯の焚き方がまづいとか云ふ小言を聞くと、私は直ぐ悲慘な母の一生を思出して胸が一杯になり、緣日や何かで人が植木を買つて居るのを見れば私は非常な慘事を目擊したやうに身を顫はさずには居られなかつた。

　處が幸にも一度日本を去り此の國に來て見ると、萬事の生活が全く一變して了つて、何一ツ悲慘な連想を起させるものがないので、私は云はれぬ精神の安息を得ました。私は殆どホームシツクの如何

なるかを知りません。或る日本人は盛に米國の家庭や婦人の缺點を見出しては非難しますが、私には縱へ表面の形式僞善であつても何でもよい、良人が食卓で妻の爲めに肉を切つて皿に取つて遣れば、妻は其の返しとして良人の爲めに茶をつぎ菓子を切る。其の有樣を見るだけでも私は非常な愉快を感じ、强ひて其の裏面を覗つて、折角の美しい感想を破るに忍びない。

　私は春の野邊へ散策ピクニツクに出て大きなサンドウイツチや林檎を皮ごと横かじりして居る娘を見ても、或はオペラや芝居の歸り夜深よふけの料理屋でシヤンパンを呑み、良人や男連には眼もくれず饒舌つて居る人の妻を見ても、よしや最少し極端な例に接しても、私は寧ろ喜びます。少くとも彼等は樂んで居る、遊んで居る、幸福である。されば妻なるもの母なるものゝ幸福な樣を見た事のない私の目には此れさへ非常な慰藉なぐさめぢやありませんか。

　お分りになりましたらう。私の日本料理日本酒嫌ひの理由はさう云ふ次第からです。私の過去とは何の關係もない國で出來る西洋酒と母を泣かした物とは全く其の形と實質の違つて居る西洋料理、此れでこそ私は初めて愉快に食事を味ふ事が出來るのです。」

＊　＊　＊　＊

「恁う云つてね、金田君は身の上話を聞いてくれたお禮だからと、僕が止めるのも聞かずに到頭三鞭酒シヤンパンしゆを二本ばかり拔いた。流石西洋通だけあつて葡萄酒だの、三鞭酒なぞの鑑別みわけは委しいもんだ。」

　辯者は語り了つて再び雜煮の箸を取上げた。一座暫くは無言の中に、女心の何につけても感じ易いと見えて頭取夫人の吐く溜息のみ

が、際立つて聞えた。

（明治四十年五月）

曉

　單に紐育ばかりではない、合衆國中に知れ渡つて女も男もよく人が話をするのは、ロングアイランドの海岸に建てられた「コニーアイランド」と云ふ夏の遊場の事である。淺草の奧山と芝浦を一ツにして其の規模を驚くほど大きくしたやうな處である。紐育からはブルツクリンの市街を通過る高架鐵道とハドソン河を下る蒸汽船と、水陸いづれからも半時間ほどで行く事が出來る。

　凡そ俗と云つて、これほど俗な雜沓場は世界中におそらくあるまい。日曜なぞは幾萬の男女が出入をするとやら、新聞紙が報道する記事を見ても其の賑かさは想像せられるであらう。電氣や水道を應用して俗衆の眼を驚かし得る限りの大仕掛の見世物と云ふ見世物の種類は、幾十種と數へきれぬ程で、然し其の中には見物人に多少歷史や地理の知識を與へる有益なものもある。又怪し氣な踊場鄙猥ひわいな寄席も交つてゐる。毎夜目覺しく花火が上る。河蒸汽で晴れた夜に紐育の廣い灣頭から眺め渡すと、驚くべき電燈イルミネーションの光が曙の如く空一帶を照す中に海上遙か幾多の樓閣が高く低く聳え立つ有樣、まるで龍宮の城を望むやうである。

　こゝに日本の玉轉し Japanese Rolling Ball と云へば廣いコニーアイランド中數ある遊び物の中でも隨分と名の知れ渡つたものである。何の事はない、奧山でやつて居る射的や玉轉しも同樣、轉した玉の數で店一杯に飾つてある景物を取ると云ふのに過ぎない、が、第一が日本人と云ふ物珍らしさ、第二が運よくば金目の品物が取れると云ふ勝負氣とで、何時頃から評判になつたとも知れず、日露戰

爭以後は一層の繁昌、毎年の夏、此の玉轉しの店は增えるばかりである。

　かう云ふ人氣もので一儲をしやうと云ふ人達の事であれば、其の主人と云ふ日本人は大概もう四十から上の年輩。生れ故鄕の日本で散々苦勞をした擧句、此のアメリカへ來てからも多年ありと有らゆる事を爲盡し、今ではなに世の中はどうかならア、人間は土をかじツて居たつて死にやアしめえ、と云はぬばかり、其の容貌かほつきから物云ひから何處となく鰭ひれが着いて、親方らしく、壯士らしく、破落戶ごろつきらしくなつて居る。で、其の下に雇はれて每日客が轉す玉の數を數へ景物を渡してやる連中は、まだ失敗と云ふ浮世の修行がつまず、然し驃ては第二の親方にならうと云ふ程度の無識者、又は無鐵砲に苦學の目的で渡米して來た靑年である。

　自分も其の頃は其の中の一人、何をしたつて構ふものか。歐洲に渡る旅費さへ造ればと云ふ一心から、ふいとした出來心で唯とある玉轉ころがしの數取りになつた。一週間の給金が十二弗。亭主のいふには外の店ぢや十五六弗出す處もあるさうだが皆な自分で喰つて行かなくちやならねえ。乃公おらの處は十二弗で三度飯がついて店の中へ寐泊りも出來る。つまり給金から身錢一文切る事はいらねえのだ。だから其のつもりで働いてくれ給へ———との事であつた。

　自分は雇はれると、直ぐ其場から、他の者と同じやうに店先に据ゑた玉臺のわきに立つて、お客の立寄るのを待つて居たが、三時、四時過ぎる頃までは見物の通行人も至つて稀で、あつい〳〵夏の夕陽が向側の大きなビーヤホールの板屋根に照輝いて居る。ビーヤホールの右隣りは射的場で、眞白に白粉を塗つた女が口に物を頰張

つたまゝで、時々此方を向いては大欠伸をして居たが、左隣は「世界空中旅行」と看板を掛けて鳥渡見掛の大きな見世物である。入口の椅子の上には此れも白粉をべつたり塗つた乳の大きい若い女が、客の出入の少い折を幸ひ、臺の上で入場券と小錢の勘定をして居る、と其の傍には下卑た人相の男が人目を引く色模様の衣服を着て、客らしいものが通らない時でも、絕えず「被入い〳〵」と大聲に二三度怒鳴つては、頻と切符賣の女に色目を使つて何かこそ〳〵話をしかけて居た。

　四邊に電燈のついたのは五時頃であつたらう。空は青く夏の日の暮れるにはまだ間がありながら、然し一帶の景氣は何處となく引立つて來た。蓄音機へ仕掛けた様々の物音、男の客を呼ぶ叫び聲が、彼方からも此方からも響き出すと、向ひのビーヤホールでは往來からも見通せるやうな處で盛に活動寫眞を映し初める。直ぐ近くの何處かには寄席か踊場があると見えて、樂隊の太鼓と共に若い女の合唱コーラスも聞える。見物の男女は此の刻限から次第々々に潮の如く押寄せるばかりで、夜の八時から十二時過ぎまでの盛り時には往來は全く歩く隙間もなく人間で埋つて居た。軈て店の亭主が漸く靜り行く往來の様子を見計つて、

「どうだ、もうそろ〳〵戸を閉めちやア………。」

と云つたのは夜の二時である。吾々は路傍の水道で汗になつた顏を洗ひ、煙草でも一服しやうとすると早や三時に近い。雇はれて居る連中では一番年を取つた四十ばかりの如何にも百姓らしい顏をして居る男が、東北訛の發音で、

「さア〳〵乃公アもう寐るぜ。お前達のやうな眞似をして居ちやア

身體が續きませんや。若え者達はさんざ樂しむがいゝ。まだ夜は長いや………。」と云ひながら、玉臺の下に圓め込んだ毛布を出して敷伸べ、ごろりと臺の上へ、汚染みた襯衣シヤツ一枚で大の字なりに寐轉んだ。すると頭髮を綺麗に分けた書生らしい男が、

「又今夜も玉臺の上に寐るのか。好い夢でも見るかい。」

「奥の寐臺は南京蟲の巣だ。お前も少しア板の上に寐る稽古もして置くもんだぜ。毎晩々々女の處へ這込む事ばかり考へて居やがつて………。」

「乃公アまだ若いんだよ。」と書生らしい相手が云ふと、同じ仲間の一人が、助太刀と云ふ氣味で、

「お爺つアん、お前、さう金ばかり蓄ためてどうするんだい。國にや子もある孫もあるツて譯でもあるまいが………。」

「さうよ。國にや十六になる情婦いろが待つて居らア。お前達見たやうにアメリカ三界の女郎に鼻毛を拔かれて、汗水たらした金を取られる奴の氣が知れねえや。此處で一晩捨てる金を國へ持つて行つて見な、朝日が屛風へかん〳〵さすまで、お大盡さまで遊べるぢや無えか………。」

　書生どもはもう戲からかつてもつまらないと思つたか、あゝ暑いと云ひながら店の外へ出て了つた。成程戶を閉め切つた家の中はぢつ、、として居ても汗が出るやうなのと、自分は今日雇はれたばかりで何處に寢てよいのやら分らぬので、同じ樣に片隅の潛戶から外へ出た。軒の下の涼しい處に店に雇はれた連中は皆寄集つて立話をして居る。

　四邊は一時間ほど前の雜沓を思返すと、不思議な程氣味の惡い程

寂として居る。彼の大仕掛な見世物の樓閣はイルミネーシヨンの光が消えて了つたので、朦朧として彼方此方の空中に白く雲のやうに聳えてゐるばかり。廣からぬ往來は何處もやツと闇にならぬ限り、處々の電燈に薄暗く照されて居る。と、この薄暗い影の中に夢の如く幻の如く白粉を塗つた妙な女が、戸を閉めた四邊の見世物小屋から消えつ現れつして居る。シヤツ一枚の腕まくりした男が其の姿を追掛けて行つたり來たりして居るかと思ふと、忽ち「何をするんだよ。」と云ふやうな女の叱る聲、又はキヤツ□□と笑ふ聲も聞える。何れも一夜見世物小屋で怒鳴つたり踊つたりして居た連中が、今初めて身まゝ氣まゝの空氣を吸ひに出て來るのである。

　往來の端れの廣い海水浴場の方からは、何とも云へぬ冷い風と共に雨のやうな靜な岸打つ波の音が響いて來る――――何と云ふ疲れた物淋しい響であらう。自分は大方夜明しに馴れぬ身の甚いたく弱り果てた所爲であつたに違ひない。一夜湧返る狂亂歡樂の後、この淋しい疲れた波の音は深く心の底へと突入るやうに思はれた。見るともなく灰色に色褪めた夏の夜の空遠く、今や一ツ□□消えて行く星の光を打目戍つて居ると、かの怪しい女どもが戲れ騷ぐ笑ひ聲の途切れ途切れては又聞えるのさへ、遂にはあゝ浮世にはあんな生活もあるのかと、何か不思議な謎でも掛けられるやうな氣がして來るのであつた。

　玉場に雇はれた連中は目の前を過ぎる女の價踏ねぶみや批評に急しい。

「おい、どうするんだい。何時まで立坊たちんばうをして居たつて始らねえや。出掛けるなら、早く出掛けて了はうぢやないか。」

「何處へ行くんだ。もう夜が明けるぜ。」

「角の酒屋へ行つて見やうや。彼處へは毎晩寄席へ出る女が大勢來て飲んで居らア。」

「いくらだい。二弗位で上るのか。」

「相手によらア。」

「これから二弗も取られる位なら、矢張支那街へ行つた方が安く行くぜ。」

「支那街ツて云へばあの十七番に居た、ぽつちやりした目の黑いジユリヤ………知つて居るだらう。あのジユリヤがビーヤホールの踊場へ來て働かせいで居るぜ。きつと角の酒屋に來て飲んで居るかも知れねえ。」

「彼奴あいつアもう男れこが付いて居るから駄目よ。」

「日本人か。」

「うむ。ブルツクリンに居る手品てづま使ひの女房見たやうになつて居るんだ。」

「女房だつて、娘だつて、構ふ事は無え。金さへ出しやア乃公のものぢや無えか。」

「お義理一遍に………。」

「さう好きな注文を云ふない。此處はアメリカだぜ。」

「アメリカがどうしたんだ。日本人だから惚れられないと限つた事アあるめえ。日本人ならもつたい無い位だ。」

「然し乃公アもう金引替に遊んで居たつて、氣が乗らねえからな。」

「其れぢや强姦でもするさ。」

「まだ、それまでには窮して居ねえや、時節を待つのよ。」

「心細いわけだな。」

「心細い事があるかい。其の中に羨してやるから見て居るがいゝや。」

「公園なんぞうろ〳〵して巡査に捕まつて日本人の面へ土どろを塗るな。」

　此の時絶えず歩いて居る怪し氣な女の二人連が行き過ぎながら、日本人と見て戯ひ半分ハローと聲を掛けた。

「お出でなすつた。」

「わるくないぜ。」

「瘦せて居るぢや無えか。」

「夏向だからよ。」

「後をつけて見ろ。」

　連中の二三人が其の儘女の後を尾けて行つた。殘つた人數は如何にも面白さうに其の方を見送りながら、

「爲様の無え奴等だ。國で親兄弟が聞いたら泣くだらう。」

「太平洋と云ふ大海があるんで、先づお互に仕合と云ふものだ。何も乃公達だつて初ツから恁うなるつもりで米國へ來たのぢや無えからな。」

「見ろ。奴等は海の方へ曲つて行つたぜ。游泳およぎ場ばにやまだ人が居るのか知ら。」

「今頃行つて見ろ。怪しい奴が彼方にも此方にも砂原すなツぱらにごろ〳〵して居らア。」

「かうして居たつて爲様がねえ。ぶら〳〵出掛けて邪魔して遣

れ。」

「つまらない岡燒をかやきをするな。」

「然し、海の風は身體に藥だぜ。」

「何を云ふんだ。かう毎晩夜明しをして居ちや、藥も糸瓜へちまもあるものか。」

「ぢやア、例の通り、何處かで埒を明けて了ふのかな。乃公達は的のない海邊よりか、矢張行きなれた南京街へ落ちて行かうや。」

　連中は二組に分れた。一組は海水浴場の方へ、一組は夜通し通つて居る電車の停車場をさして出て行つた。自分は一人取殘されたものゝ、然し家へ這入つて玉臺の上に寢るのも厭だし、と云つて、何處へも外に行く處がない。

　星は一ツ殘らず消えて了つたが、まだ明けきらぬ夜の空は云ひ難い陰鬱な色をして、一帶に薄い霧に蔽はれて居る。明日はまた驚く程蒸暑くなる前兆である。

　軒の下に蹲踞しやがんだまゝ、自分は思はずうと□□と居眠りしたかと思ふ間もなく、誰やら耳許近く呼ぶ聲にはつと顔を上げて見ると、先程海の方へ出て行つた連中の一人であるらしい。自分と同じ位な若い書生風の男が葉巻を口に啣へて立つて居る。

「どうしたんだ。寢るのなら店の中に寢臺があるぜ。」と自分の顔を見下したが、「君はまだ此う云ふライフに馴れない方だね。」と云つて何か思出すらしく葉巻を口に啣へ直した。

「皆なは何うした。」と自分は少し耻る氣味もあつて態とらしく眼を擦る。

「相變らず淫賣だのえたい、、、の知れない女を捜し歩いてゐるの

さ。」

　如何にも疲れたと云ふやうに自分の傍へ同じ様に蹲踞んだが、近く自分の顔を打眺めて、「どうだね、君。われ□□の生活は随分墮落したもんだらう。」

　自分は答へずに唯輕く微笑んだ。

「君は何時アメリカへ來たんだ。もう長いのか。」

「二年ばかりになる。君は………。」と自分は問ひ返した。

「今年の冬で丁度五年だ。夢見るやうだな。」

「何處か學校へ行つて居るのか。尤も今は夏で休みだらうけれど………。」

「さうさ。來た初め二年ばかりはそれでも正直に通つて居たツけ。尤もその時分にやア、僕は國から學費を貰つて居たんだ。」

「ぢや、君は無資力の苦學生と云ふんでもないんだね。」

「かう見えても、家へ歸れば若旦那さまの方よ。」と淋しく笑ふ。

　成程其の笑ふ口許、見詰める目許から一帶の容貌おもざしは、玄關番、食客、學僕と云ふやうな境遇から、一躍渡米して來た他の青年とは違つて、何處か弱い優しい處がある。身體は如何にも丈夫さうで、夏シヤツの袖をまくつた腕は逞しく肥えて居るが、其れも勞働で錬磨きたへ上げたのとは異り、金と時間の掛つた遊戯や體育で養成した事が注意すれば直ぐ分る。幾年か以前には隅田川のチヤンピオンであつたのかも知れぬ。

「日本ぢや何處の學校だつた。」

「高等學校に居た事がある。」

「『第一』か。」

「東京は二年試驗を受けたが駄目だつた。仕方がないから、三年目に金澤へ行つてやつと這入れた。然し直に退校されたよ。」

「どうして………。」

「二年級の時に病氣で落第する。其の次の年には數學が出來なくつて又落第………二年以上元級に止まる事が出來ないと云ふのが其の時分の規則だから退校された。」

「其れでアメリカへ來たんだね。」

「直ぐぢやない。退校されてから二年ばかりは家に何にも爲ないで遊んで居た。女義太夫を追掛けたり、吉原へ繰込んだり、惡い事は皆な其の間に覺えた。」

「………………。」

「母親は泣く父親は怒る。然し其の儘にしちやア置けないので、到頭米國へ遊學させると云ふ事になつたのだ。」

「直ぐニユーヨークへ來たのか。」

「いや、マサチユーセツツ州の學校へ行つた。二年ばかりは隨分勉强したよ。僕だつて何も根からの道樂者ぢや無い。一時高等學校の入學試驗に失敗したり、其れから又退校されたりした時にや、自分はもう駄目だと思つたが、勉强して見りやア、何にさう僕だつて人に劣つて居るわけぢや無い。」

「さうとも………。」

「マサチユーセツツの學校ぢや三人居た日本人の中で、兎に角僕が語學ぢや一を占めた位だつた………。」

「卒業しないのか。」

「中途で止して了つた。」

「どうして、惜しいぢやないか。」
「さう云へば其樣ものさ。然し今更後悔したつて始らない。僕は又後悔しやうとも思つちや居ない。」
「………………。」
「仕方のない奴だと思ふだらう。然し僕は全く感ずる處があつて廢學して了つたのだ。一生涯僕はもう二度と書物なぞは手にしないだらう。」
　自分は彼の顏を見詰めた。
「別に大した考へがある譯ぢやないが、僕は學位を貰つたり肩書がついたりする身分よりか此樣處にかうしてぶら□□して居る方が結句愉快だからさ。」
「或る意味から云へば、或はさうかも知れない。」
「學校へ這入つてから二年目の夏の事だ。夏休みを利用して紐育へ見物に出て來たのは可かつたが、秋になつてもう學校へ歸らうと云ふ時分に、どうした事だつたか、屆くべき筈の學資が來ないぢや無いか。實に弱つたね。今日來るか明日屆くかと待つて居る中に、學校へ歸る旅費は愚か、愚圖々々して居ると下宿代までが怪しくなつて來た。僕は今日まで自分の腕で錏びた一文稼いだ事がない。如何にして自分は其身を養つて行くかと云ふ方法を知らない。だから、さア、國許から金が來ない………何れ來るのだらうが、もう來ないやうな氣がする。と、夜もおち□□寢られないぢやないか。何だか無暗と飢ひもじいやうな氣がする。乞食になつた夢ばかり見るのだ。」
「無理はない。」

「已むを得ないから、僕は殘つて居る金のある中下宿の勘定をすまして、安い日本人の宿屋へ引移した。其れから二週間も待つて居たが、まだ送金が屆かないぢやないか。僕はもう此れアいよ□□駄目だ。何とか手段を考へなくちや成らない………と云つて友達も相談相手も何にもないアメリカぢやしやうがない。遂に決心して西洋人の家庭へ奉公に行く事にした。」

「ハウス、ウオークだね。」

「さうさ。宿屋に泊つて居る連中は皆なさう云ふ手合だから、毎日話をして居る中に大槪樣子は分つた。思つたよりか苦しくも無さゝうだから、えゝ、どうにか成るだらうともう自暴半分、始めよりか大分膽が据つて來たよ。君も知つて居るだらう。皆なが遣るやうに先づヘラルド新聞社へ行つて、Japanese student, very trust worthy, wants position in family, as valet, butler, moderate wages. といふやうな廣告を出した。二三日たつと直ぐ返事が二三通も來た。然し僕は何う云ふ家が可いのか分らないから、行き當りばつたり一番先に尋ねて行つた家へ給金は向うの云ふまゝ三十弗で働く事にした。其の時には下女同樣の奉公をして、三十弗の月給が取れるとは、流石はアメリカだと思つて喫驚した。」

「然し能く辛抱が出來たね。學費を送る位の家なら君は所謂お坊ちやん育ちの身分だらうが………。」

「人間には反抗と云ふものがあるよ。お坊ちやん育ちだつたからこそ辛抱が出來たのだ。辛抱どころか遂に面白くなつた。君には分らないかも知れない。鳥渡說明の爲にくい事情だが………まア恁う云ふ譯だ。先づ僕の家庭から話さなくツちや成らんな。」

「父親ファーザーは何をして居られる。」

「學者さ———丸圓學院の校長をして居る。僕の親として紳士として、社會的にも個人的にも殆ど一點非の打ち處がないと云つて可い位の人物だが、然しあまり完全過ると物事は却つて不可んよ。水清くして魚住まずと云ふ事があるからね………。僕は餘り健全な家庭に育つた爲め思ひ掛けない處から腐敗し始めたのだ。」

自分が問ひ掛けやうとするのを手で制して語りつゞけた。

「今になつて、此樣處で親の評判を吹聽するのは馬鹿々々しいやうだが、實際の處、僕の父は其の頃から世間で云ふ通り、餘程人から崇拜された人物だつたと見えて、家には何時も塾同樣に書生が七八人も居た。君も父の名前位は何かの書物で見られた事があるかも知れない。兎に角僕は極く幼少い時分から、家の書生やら近所の者なぞから、父と云ふ人は非常にえらい、、、先生だと云ふ事を、何時となく耳にして居たが、然し如何いふ譯で、何れほどえらい、、、のか知らないから、自分も此の儘大人になれば、自然と先生になれるものだと思つて居た。ところが、たしか高等小學に進む時だつたよ。其の頃から數學が出來なくつて、殆ど落第しかけた時、學校の教師から恁う云はれた事がある。君のお父樣は世間も知つての通り法律の大學者だ。餘程勉强なさらないと君ばかりではない、父上のお名前にも關はります。家へ歸ると無論學校から注意書が廻つて居たので、母親から叱られる。父親からは懇々と云訓され、毎夜十時まで學課の復習をしろとの事であつた。

僕は頑是ない子供心に、始めて自分は學問が出來ないのだと氣が付いて見ると、もうひどく氣が挫けて了つて、其の後一二週間ばか

りと云ふものは家の書生なぞに顏を見られるのが辛くて堪らない………あまり外へも出ずに部屋へ引込んで、父から云はれたやうに夜晩くまで勉强はして居たが、何時とはなく、自分はもしやこんなに勉强して居ても、父のやうにえらく、、、なれなかつたら如何しやうと、子供心に自分の將來が無暗と心細く思はれる事があつた。この心配———將來の憂慮だね、此れがつまり僕の精神を腐らして了つた蟲だと云つてもいゝ。僕は小學から尋中じんちゆうへと次第に進んで行くにつれて學問は增々むづかしくなる。一方では父の名望地位はいよ□□上る。昔父の玄關に居た學僕が學士になつて禮に來る。僕は唯意氣地なく小く見えるばかりだ。すると、家の書生や親類なぞは誰が云出すともなく、僕はやがて父の家を繼ぐ時分には父のやうな法律の大學者になるだらうと云ふし、僕自身も又是非さうなるべき責任があるやうにも思ひ、又心からなつて見たいとも思ふ。思へば思ふほど氣にかゝつて來るのは自分の實力で、僕は父の云はれる事がしみ□□身にこたへる度々、とても僕は駄目だ………と譯もないのに獨りで絕望して居た。

　然し無論これは世間も何も知らない子供心の事で年を取れば次第に氣も大きくなる。と云ふものゝ、子供の時に感じた事は一生忘れるものぢや無い。僕はやつとの事で入學した高等學校は退校されて、少し自暴になつた擧句、アメリカへ送られてからも矢張さうだ………折々父の手紙にでも接すると、父はこれほど深切に自分を勵ましてくれるが、果して自分は學術に成功する才能があるのか知らと云ふやうな氣がしてならない。やつて見れば譯なく出來る事でも僕は自分のイマジネーションで、何時も駄目だと締めて了ふ。

かう云ふ絕望の最中、まア想像したまへ。僕はふいと送金が延引した爲めに、云はゞ一時家との關係が中絕して了つたのだらう。故郷へ錦を着て歸るべき責任が失なくなつた———何と云ふ慰安だらう。もう死なうが生きやうが僕の勝手次第。死んだ處で嘆きを掛ける親が無ければ、何と云ふ氣樂だらうと云ふやうな氣がしたのさ。」

彼は語り疲れて少時默つた。

「其れで、君はハウス、ウオークと云ふ皿洗ひの勞働を辛抱したんだね。」

「さうだ。送金は程なく屆いた、が、もう時已に晚しさ。僕は二週間ばかり奉公して、食堂の後で皿を洗つて居る中に、すつかり墮落して了つた。君は經驗があるかどうか知らないが、實に呑氣なものだ。それア馴れない事だから、初めは苦しい、情ないやうな氣もする、隨分まごつきもするが、元々大してむづかしい仕事ぢやない。家族が食堂で食事するのをボーイの役目で皿を持つて廻ればいゝのだから、譯はありやしないさ。主人達の食事が濟むと皿を洗ひ、地下室の臺所へ下りて、コツクの婆に小間使の女と三人、荒木のテーブルを圍んで食事をするのだが、境遇と云ふものは實に恐しいもんさね。皿を洗つて居れば、自然々々と皿洗のやうな根性になつて行くから奇妙だ。朝、午、晚、三度々々食事の給仕をする外に客間と食堂の掃除をするんで、身體は隨分疲勞くたびれるから、手のすいた時と云へば居眠りをするばかり。物を考へたり、心配したりするやうな、つまり頭を使ふやうなことは自然になくなる………其の代り肉慾食慾は驚く程增進して來るものだ。一日の勞働を了つた後の

食事の甘い事と云つたらお話にならない。食へるだけ腹一杯食ひ込むと其の後は氣がとろり、、、とし了つて、自然と傍に坐つて居る小間使に戲からかひ初める。手を握るばかりぢやない、擽つて見やうとして、甚く肱鐵砲を喰ふのだが、其れが又何とも云へぬ程面白い。すると、向うも下女は矢張下女で、怒りながらもつまる處戲はれて見なければ何だか物足りないやうな氣がするのだ。惚れたの何うのと云ふ事はありやア爲ない。下女と下男———これアもう必然的に結合すべきものだ。」

夜は次第に明けて來た。消え行く電燈と共に見世物小屋の女達も何時の間にか姿を隱して了つて、四邊は一刻々々薄明くなるにつれて、いよ〳〵寂と物靜かになつて行く………聞えるものは濱邊の砂を打つ波の音ばかり。

「此の如く僕の運命は全く定まつて了つた。僕は一方では以前にも增して、いよ〳〵父に會す顏が無いと良心の苦痛に堪へない、と同時に、一方では此の動物的の境遇がます〳〵氣樂に感じられる。つまり煩悶すればするほど深みへと落ちて行くんで、冬中は彼方此方の家庭へ給仕人になつて働いて步く。夏になつて家族が市中の家を引拂つて避暑地へ旅行するやうになれば、每年此う云ふ夏場を目付けて轉付ごろついて步いて居るんだ。」

「然し、最後には君、どうするつもりだね。」

「どうする………どうするか、どうなるか。」と苦悶の顏色を示したが彼は遂に恁う叫んだ。

「いや〳〵、其樣事を考へない爲に僕は此樣馬鹿な眞似をして居るんだ。自分ながら自分の將來を考へる腦力もなくなつて了ふやうに

と、僕は働く、飲む、食ふ、女を買ふ。あくまで身體を動物的にしやうと努めて居るんだ。」

　彼は胸中の苦しみに堪へぬかして、自分を置去りにしたまゝ向うの方へと行つて了つた。

　一閃せんの旭日が高い見世物の塔の上に輝き初めた―――何たる美しい光であらう。自分は一夜閉込められた魔窟から救ひ出されたやうな氣がして覺えず其光を伏拜んだのである。

（明治四十年五月）

市俄古の二日

三月十六日———市俄古シカゴ見物に行かうと定めた日である。

例年よりは大變に暖いと云ふ事で、この二三日降り續いた雨に去年から降り積つて居た雪は大方解けて了つた。天氣は相變らず曇つて居たけれど、久しい冬の眠りから覺めた街の樣子はもうがらりと變つて居る。雪の上を滑つて居た低い橇は大きな車輪の馬車となり、その馭者の恐しい毛皮の外套は輕い雨着と變つた。總のついた毛糸の頭巾を冠り、氷の上を滑つて居た子供や娘は、洗出されたセメント敷の步道を、新しい靴の踵に踏み鳴らしつゝ走廻つて居る。子供でなくても、人家の庭や果樹園に黑い濕つた土と、雪の下に一冬を送つた去年の靑芝の現れ來たのを眺めては、程なく來るべき春を思浮べて、誰でも自然おのづと雀躍こをどりせずには居られまい。

午前九時半の汽車に間に合ふやう、自分は手提革包の仕度もそこそこに、町端れの四辻を過ぎる電車に飛び乘り、下町のミシガン中央線の停車場に赴いた。

カラマズウ市から市俄古までは凡そ百哩、正四時間で到着するとの事である。汽車はカラマズウの町を離れると直樣波の樣に起伏して居る木の少ない丘陵をかの間や、眞黑に冬枯して居る林檎園に沿うて走る。自分は岡の間の凹地に殘る鹿子かのこ斑まだらの雪の模樣や、牧場の小川から溢れ漲る雪解ゆきげの水が腐つた柵を押崩すさまなぞ、まるで露西亞小說の敍景のやうな景色を幾度も目にして過ぎた。

　インデアナ州に這入ると、製造場の多い、汚い小さな街が増え、軈てミシガン湖レーキの畔に出る。然し、湖水の面は曇つた空と共に濛々たる霧に閉され、岸邊に漂ふ大きな氷塊と、無數の鷗の飛廻るのを眺めるばかり。見ぬ北極の海もかくやと想像せられるのである。

　間もなく汽車は湖水に沿ひながら、市俄古の市中に入り、イリノイス中央線の停車場に着した。午後の一時半頃なので、プラツトフオームから續く階段を上つて待合室に入り、其の片隅の一室を占めた料理店レストラントに這入つた。

　中は二つに區別してある。一つはランチ、カウンターとか云つて、一寸日本の居酒屋と云つたやうな體裁。手取り早く立食ひをして行く處。他の方は白い布を掛けた食卓と椅子が置いてある普通の食堂である。立食の方は時間もかゝらず、勘定も安いので、殆ど空間もなく混み合つて居る中には、不思議に可成り綺麗な扮装みなりの婦人も交つて居た。

　自分は食事を濟まして、廣い階段を下り往來へ出やうとしたが、まだ不知不案内の都會の事、自分の目指す友人の家は西の方やら、東の方やら。

　入口の石段下には馭者が馬車を並べて客待きやくまちをして居るので、自分は手招ぎして一人を呼び寄せ、

　「市俄古大學の傍まで幾何いくらだ。」ときくと「二弗」と答へた。

　隨分遠方であるとは知つて居たが、少しく法外のやうに思はれたので、外國の旅の耻には搔き馴れて居る事とて、再び停車場に戻

り、居合せた驛夫を捕へて質問した。驛夫は深切に、

「停車場の出口から直ぐと市内を往復する電車に乗つて、五十五丁目の停車場で下りるのが一番便利だ。」と教へてくれたので、自分は更に切符十仙を拂ひ、プラツトフオームに來る電車を待ち受けた。

　間もなく三輛の列車が來て、停車すると入口の戸が驛夫の手を借りずに自然と開いて、進行し始めると同時に再び自然と閉されて了ふ。車中なかには女客は少く、商人らしい男が多い。自分は市俄古大學の近傍に住んで居る一友人を訪ねて行くつもりなので、隣席に坐つて居る若い男を顧みて、何丁目へは………と友人の宿所を尋ねると、まるで子供に物を教へるやうに、細々と道筋を示してくれた後、やがて衣嚢ポケツトの中に入れた手帳の間から地圖まで引出した。自分は日本流に帽子まで取つて厚く禮を云ふと、

「誰でも外國へ來れば皆困るんですから、其樣お禮には………、」と彼の男は自分の餘りに丁寧なのに少しは驚いた風であつた。アメリカでは男同士の挨拶に帽子なぞ取るものは一人もないからであらう。彼は言葉をつゞけて、

「私も實は外國人です、和蘭おらんだ人じんですよ。もう十年から此の國に居ますが………あなたは如何です、アメリカはお好きですか。」

「貴兄あなたはいかゞです。」と自分は訊き返すと彼は微笑して、

「世界中で一番好い處と云へば矢張生れ故郷………あなたも矢張さうでせう。」

　彼はさる商店の手代をして居る事から、聽てそろ□□とお國自慢

に取りかゝらうとした折、電車は自分の降りるべき停車場に着いた。自分は重ねて禮を云ひつゝ車を出で街に降りた。

　辻の瓦斯燈に五十五丁目と書いてある。自分の行先は五十八丁目なので、卽ち三丁歩けば可いのだ。始めて來た土地でも恁う容易たやすく見當の付くのは、規則正しく數字若しくはアルハベツトの順に區別されてある亞米利加の市街の最も便利な一つである。番地とても、街の右側が奇數ならば、向側は偶数と云ふ風になつて居るので、東京の人が其の土地の番地を捜し得ぬやうな虞おそれは決して無い。

　自分は安心してゆつくりと歩いた。久しく空を閉した冬の雲は、先程から幾重にも層をなしつつ動いて居たが、次第々々に青空を現はし、遂に太陽の光までを漏らすやうになつた。雪解の往來は宛ら沼のやうになつて居るので、自分は稍乾いて居る歩道サイドヲークを拾ひ□□歩いて行くと、何と云ふ不順な氣候であらう、丁度五月のやうな暑氣を感じ、汗は額に流れ出て、今朝までは着心の好かつた外套の今は重苦しい事云ふばかりも無い。

　幾軒も同じ石造りの三階建の貸家の並んで居る中に、やがて目的の番地を見出した。此の邊は急がしい市俄古の市内うちとは思へぬばかり人通りも少く、町の片側は芝生の廣場（後で聞けば、ミツド、ウエーとて十餘年前萬國博覽會の一部であつたのを其儘公園にしたのだとの事）その廣場を越して、遙右手には鼠色の市俄古大學の建物が見え、左手には大方ホテルでも有るらしい大きな高い凌雲閣スカイスクラツパーの二つ三つ立つて居るのが、丁度雨上りの白い雲の頻と往來する空模様と調和して、妙に自分の眼をひいたの

で、自分は訪ねやうとする家の戸の外に佇んだまゝ、暫くは呼鈴も押さずに眺めて居た。

　すると、二階の窓の方で、自分には何の譯とも聽取れなかつたが、若い女の聲がして、バタ〳〵と駈け降る跫音、そして入口の戸が開いた。

　「ミスターＮツて仰有る方ぢやありませんか。」

　十七八かと思はれる小作りの婦人、金色ブロンドの前髪をふつくりと大きく取り白い上衣ウエーストに紺色の袴スカート。見るから愛らしい圓顔の口許に、態とらしいまで愛嬌ある靨えくぼを浮べ、華美はでな、無邪氣な、奧底の無い、アメリカの處女特有の優しい聲で、

「ジエームスはまだ會社から歸りませんけれど、此の間からあなたのお出を待つて居ります。まア、お上んなさいまし。」

　自分は案内されて客間に通つた。

　室内は淋しからぬばかりに長椅子ソフワー、安樂椅子、机デスク、石版の繪額、中古の洋琴なぞを置いたゞけで、自分が想像した市俄古の生活としては、其の華美ならざるに驚いた。家の主人は裁判所の判事、今、自分を接待してくれるのは、その一人娘のステラ嬢で、自分がミシガン州で知己となつたジエームスの未來の妻たるべき人である。

　然り、彼ジエームスは既に度々自分に此の娘の事を話した。懷中時計の裏に貼付けて、肌身放さず持つて居る美しい其の寫眞をも幾度となく見せてくれた。ジエームスの實家はミシガン州にあるので、去る頃歸省して居る最中、自分は一方ならず懇意になつたので

ある。ボストン電氣學校の卒業生で、シカゴのエヂソン電氣會社の技師となり、この家に室借りをして居たが、彼は書生時代から洋琴が上手、娘ステラは胡弓バイオリンが好きと云ふので、折々試みる晩餐後の合奏は、宵々毎に二人の愛情を結び付け、遂に婚約エンゲージする事になつたとやら。して、互に心の底に、そも□□の始め、云はれぬ愛の誓をなさしめたのはシユウマンが「夢」の一曲を合奏した瞬間であつたと云ふ事も、自分はジエームスから聞いて居た。

「今夜は私に是非、あの『夢の曲』を聞かして頂きたいものです。」

　云ふと、ステラはさも驚いた樣に、しなやかな片手に輕く頰を押へ、「夢ドリーム」と叫んだが、激しい回想の念に打たれて、大きく息をつき、「ジエームスは其樣事まで、あなたにお話して了つたんですか。」

「えゝ、何も彼も………。」

「まあ、ほゝゝゝゝ。」と高く鈴のやうな聲で笑つたが、少しも感情を抑へない此の國の少女が胸の響は自分の耳にまで聞えるやうに思はれた。

　彼女は突然安樂椅子から立ち、すた□□と次の室へ行つたかと思ふと、一册の寫眞帖アルバムを持つて來て、今度は犇と自分の傍へ椅子を摺り寄せ、膝の上に開いて見せて、

「私達の寫眞ですよ。日曜のたんびに撮つたんです。」

　日曜日毎に連れ立つて遊びに出掛けた所々の公園で撮影うつし合つたのを、一枚一枚月日を記して貼つてある。

　ステラは、此れはジヤクソン公園の湖邊、此れはミシガン大通アベニユーの石堤、此れはリンコルン公園の木陰………と語調も急がしく説明する中にも、彼女は折々自分は今や世界中での一番幸福な娘の一人であるとの自信を、深い緑色の目の色に輝かせた。

　自分は心の底からステラの幸福を祈る切なる情に迫められると同時に、幸なるかな、自由の國に生れた人よ、と羨まざるを得なかつた。試に論語を手にする日本の學者をして論ぜしめたら如何であらう、彼女ははしたない、、、、、ものであらう、色情狂者であらう。然し、自由の國には愛の福音より外には、人間自然の情に悖つた面倒な教義をしへは存在して居ないのである。

　此の夕、自分は忘れる事の出來ぬ樂しい晩餐デンナーを試みた。戀人のジエームスが歸つて來る。父親の老判事が歸つて來る。一家母親を合せて食事した後、若い二人は自分の請こひに應じて、彼の「夢の曲」を演奏したのである。花形の笠着た朦朧たる電燈の光に、男は肩幅の廣い背を此方にして洋琴に向ふと、女は胡弓を取つて倚りかゝるやうに男の傍に佇立む。長椅子には白髮の母親、鼻眼鏡を掛けた大きな禿頭の老判事、硝子窓の外には幽に濕けた三月の夜を急いで歩いて行く人の靴音。

　やがて若い二人は演奏し了つたが、娘は樂器を手放すや否や、もう堪へられぬと云ふやうに、男の胸に身を投げ掛け、二度ほど激しい接吻を試みた。兩親は手を拍つて喜び、その再演を迫つたが、娘は猶ほ少時は、激しい感動を靜め兼ねたのであらう、男の胸に顔を押當てた儘で。然し突然立ち直つて、再び樂器を手にすると、今度は亞米利加人が大好きな、彼の愉快なる「デキシー」の一節、老判

事までが椅子に坐りながら足拍子を踏み始めた。

　時計はやがて九時を打つた。ステラの家には今生憎と空間がないと云ふので、先程、ジエームスが二軒置いて先の素人下宿屋に自分を案内すると云つて居た處から、自分は家族一同にグツドナイトを告げジエームスと共に外へ出た。

　自分は何とか一語ジエームスに向つて、御身等おんみらの戀は如何に幸福なるかよとの意味を傳へたいと思ひながら、空を見ると夜の雲の烈しい往來ゆきゝに氣を取られ自分はその儘默つて歩いた。彼は何やら流行唄を口笛に吹きつゝ早や素人下宿の戸口に着いた。

　下宿屋と云つても別に樣子の變つた事は無い。ステラの家とは殆ど間數も建方も同じやうである。自分は此の家の細君に案内されて、貸間の中では一番上等な表向フロントの一室に入り、五分ほどしてジエームスの立去るや、自分は直衣服を着換へて、靜に寢床の上に身を横へた。

　瓦斯燈を消すと、日蔽を差上げた硝子戸からは夜の空が一杯に見える。空は暗いながらも、往來の雲のかげには月が潜んで居る爲めか何處とはなしに微明うすあかるく、路傍の樹木や、遙の高い建物が影の樣に黑々と見分けられる。然し、幸にも今日は汽車の疲れに枕上何の物思ふ所もなく、直樣身は海底に沈み行く心地して、深い眠りに入つたのである。

　三月十七日――――目覺めたのは八時、見ると一面に濕ぬれて居る硝子戸の上に、朝日がキラ□□輝いて居る。衣服を着換へながら、窓際に立ち寄つて、外を見れば、濡れた往來には風に打拂はれた細い樹の枝が、彼方此方に散亂して居る。暴風があつたに違ひない。

それにしても、自分は能く夢一つ見ずに一夜を過す事が出來たものだ。哀れな人間は眠りの最中さへ、絕えず種々の夢に苛まれるものを。昨宵ゆうべは此の夢一つ見ぬ誠の快眠に、自分は始めてかの牧場の木蔭に横る動物のやうに、生存の勞苦から遠かつた安樂と幸福を得たのである。

　九時の定めと聞いた朝餐の食堂に下りて行つた。

　四人づゝ坐るべき小形の食卓が三脚置いてある。商人らしい中年の男が二人一番端れの食卓に市俄古新聞シカゴトリブユーンを讀んでゐる。中央のには學生風の婦人が一人。すると案内の細君は、自分を此の中央の食卓に請じたので、かの婦人は今まで一人で退屈さうに食事の運び出されるのを待つて居た所から、殊には外國人と見て取つて直樣話しかける。

　然し話し掛ける質問は十人が十人大抵きまつて居る———何時此の國へお出でになりました。アメリカはお好きですか。ホームシツクにおなりぢやありませんか。日本のお茶は大變よう御在ますね。日本のキモノは綺麗ですね。私は日本の事だと云へば夢中クレージーですよ………。

　自分は何でもよい、早く話を他に轉じたいと思つたが、折能く、下髪を黑いリボンで結んだ十四五の娘が食事を運んで來たので、此れを機會に、ナイフを取りながら、

「あなたは大學へお通ひなのですか。」

　聞くと、「えゝ。文科の方へ………、」との答である。此れに稍力を得て、

「文科………それぢや小說なぞも御覽になりますか。」

「えゝ、大好きです。」と婦人は憚る所なく答へる。アメリカには日本のやうに女學生に限つて小説を禁ずるやうな無慙むざんな規則はないと見える。

彼女は新刊小説の題目を數多あまた並べて批評をしたが、不幸にも自分はアメリカの文學については、此れまで何一つ注意を拂つた事が無いので、折角の婦人が高説も其程には趣味を解し得なかつた。自分が知つて居るアメリカの作家と云へば、ブレツトハート、マークトイン、ヘンリーゼームス、高々此れ位のものであらう。去年の暮であつたか、紐育の友から其の頃文壇を風靡して居る二三の大家の作を送付されたが、何れも半分ほど讀んで止してしまつた事がある。猶ほ折々は雜誌など開いて見るけれども、何故か此の新大陸の作家中には、ドーデ、ツルゲネフのやうなものを見出す事が出來ない。大方アメリカ人にはかゝ哀愁の深い作物は、その趣味に適して居らぬのであらう。

朝餐は思ひの外早く濟んだ。かの女學生は、「明日の午後には大學構内のマンデルホールで春季の卒業式があるから、御見物なすつては………。」と云ひながら食卓の上に置いた一册の本を取り片手に前髪の縺もつれを撫で□□出て行つた。

殆ど入れ違ひに戸口の鈴が鳴つたかと思ふと給仕の娘が、「お客樣です。」との取次ぎ。

出て見るとジエームスであつた。山高帽子を少し阿彌陀に冠り、例の無造作な聲で、グツドモーニングを繰返しながら此れから街の會社に行くので、自分も一緒に見物旁々出掛けてはとの事。早速勸めに應じて共々往來に出て、昨日の晝間下車した同じ停車場から市

内通ひの電車に乗つた。

　丁度、あらゆる階級のシカゴ人が下町の會社や商店へ出勤の時間なので、車中には席もない程男や女が乗り込んで居る。彼等は何れも最短時間の中に最多の事件の要領を知らうと云ふ恐しい眼付で新聞を讀みあさつて居る。五分十分位に停車する何處のステーシヨンにも新聞を持たずに電車の來るのを待つて居るものは唯の一人もない。何と云ふ新聞好きの國民であらうか。彼等は云ふであらう、進歩的の國民は皆一刻も早く一事でも多く世界の事件を知らうとするのだと………。あゝ然し世界はいつになつても珍らしい事變つた事もなく、同じ紛紜ごた□□を繰返して居るばかりでは無いか。外交問題と云へばつまりは甲乙利益の衝突、戰爭と云へば強いものゝ勝利かち、銀行の破產、選挙の魂膽、汽車の顚覆、盜賊、人殺、毎日々々人生の出來事は何の變化もない單調極るものである。佛蘭西のモーパツサンは早くも此の退屈極る人生に對して堪え難い苦痛を感じ「水の上」なる日記の中に、「厭ふべき同じ事の常に繰り返へさるゝを心付かぬものこそ幸なれ。今日も明日も同じき動物に車引かせ同じき空の下同じき地平線の前同じき家具に身を取り巻かせ同じき態さまして同じき勤めする力あるものこそ幸なれ。堪へがたき憎しみ以て世は何事の變るなく何事の來るなく、懶ものうく疲れたるを見破らぬこそあゝ幸なれや………。」と云つて居るではないか。されば、饑ゑたるものゝ食を求むる如く、此の變化なき人生の事件を知らうとするアメリカ人の如きは最も幸福と云ふべき者であらう。

　列車は休まず湖水の波際を走つて居る。何となく新橋品川のあた

りを過ぐる心持がすると思ふ間もなく最後の停車場に着するや、車中の一同は皆忙し氣に席から立つ。ジエームスは此處がバンビユーロンの停車場で市俄古中最も繁華な商業地への這入口はいりぐちだと教へてくれた。

　電車から溢れ出る無數の男女は互に肩を摩り合はさぬばかりに、ゾロ〳〵とプラツトフオームから續いた頑丈な石橋を渡つて行く。見渡すと橋向うは數多の自動車オートモビルが風の如くに往來して居るミシガン大通アベニユーで、更に、此處から西へと這入る幾條の大通りには何れも二十階以上の高い建物が相競うて聳えてゐる。空は三月の常として薄暗い上に左右から此等の高い建物に光線を遮られてゐるので、大通の間々は塵とも烟ともつかぬまるで闇のやうな黑いものが渦巻き動いて居る。そして今しも石橋を渡り盡した無數の男女の姿は呑まれる如く、見る〳〵中にこの闇の中———市俄古なる闇の中に見えなくなつて了ふのであつた。

　自分は漠然たる恐怖に打たれた。同時に是非を問ふの暇もなく自分も文明破壞者の一人に加盟したい念が矢の如く叢り起つて來た。正直な日本の農民は首府の東京を見物してその繁華（若し云ひ得べくんば）に驚くと共に、無上の賞讃と尊敬を土產に元の藁家に歸るのだが、一度時代の思潮に觸れた靑年は見るに從ひ聞くに從ひ、及びも付かぬ種々な空想に驅られる愚さ。自分は步む事も忘れて石橋の上に佇んで居ると、ジエームスは何と思つたか微笑みながら振向いて、

「Great City」と自分に質問するらしく云掛けたので、

「Ah! monster.」と自分は答へた———何と形容しやうか、矢張

人々の能く云ふ通り怪物モンスターとより外に云ひ方はあるまい。

　ジエームスは前面のミシガン大通に聳えた建物を指して、あれはアンネキスと云ふ旅館、その隣がオーヂトリヤムと云ふ劇場、遠くの彼れは卸賣の註文を取引する會社の塔である。あれは何、これは何、と一つ□□説明してくれた末、まだ少し時間もあるからマーシヤル、フヒールドと云ふ大商店へ案内しやうと云つた。

「市俄古で一番………紐育でも那様あんな大きな商店はない。だから世界一と云つてもいゝのです。女ばかりでも七百人から働いて居ますからな。」

　ジエームスの話は恐らく虚言ではなからう。此の商店を見物する事は市俄古を通る旅人の殆ど義務と云つても可いやうになつて居るのである。衣服家具小間物靴化粧品など諸有る日用品を商ふ店で、市中目抜きのステート、ストリートの角に城郭の如く聳えて居る。自分は群衆の中を通り抜けエレベーターに乗つて二十階近くある其の最絶頂に上り、磨き立てた眞鍮の欄干に凭れて下を覗いて見た。

　建物は丁度大きな筒の様に、中央は空洞をなし、最絶頂の硝子天井から進み入る光線は最下層の床の上まで落ちるやうになつて居るので、出入の人々が最下層の石畳の上を歩行して居る様を何百尺の眞上から一目に見下す奇觀。男も女も漸く拇指程の大きさも無く、兩腕と兩足とを動して、うじ□□蠢いて行く様、此様こんな滑稽な玩弄物おもちやが又とあらうか。然し一度此の小さな意氣地なく見える人間が、雲表に高く聳ゆる此高樓大廈たいかを起し得た事を思ふと、少時しばし前文明を罵つた自分も忽ち偉大なる人類發達の光榮に得意たらざるを得なくなる。

人は定まらぬ自分の心の淺果敢あさはかさを笑ふであらう。然し人の心は何時もその周圍の事情によつて絕え間なく變轉浮動して居るに過ぎない。例へば夏の日に冬の寒さを思ひ冬の日に夏の涼しさを慕ふやうなもので、ルーテルの新教ルーソーの自由、トルストイの平和、何れか絕對の眞理があらう。皆な其の時代と其の周圍の事情とが呼起した聲に外ならぬ。

ジエームスは會社へ出勤するとて共にエレベーターで下に降り、商店の戶口で別れた。自分は此れからミシガン大通の美術館へ見物に行くのである。

（明治卅八年三月）

夏の海

七月十日の記

　自分の泊つて居るＭヱム子しの住居は炎暑の爲め折々人死のある東側イーストサイドの貧民町からは遠く七八哩も離れて、殆ど紐育の市中とは思へぬ位、五階の窓からは西の方一帯にハドソンの河上を見渡し、東の方にはコロンビヤ大學の深い木立を望む極く閑靜な山手でありながら、然し敷石や煉瓦に燒け付く暑はまだ人の目を覺さぬ中から室中を溫室むろのやうに爲て居る。汗は油となつて總身から湧起わきだして來るので、朝の食卓についても食慾は全く去り一皿のオートミールさへ啜り了る勇氣がない。

　日曜日なのでＭ子は自分を案内かた〳〵ニユーゼルシー州のアシベリパークとよぶ海水浴場に行つて見やうといふ。

　早速家を出で地下鐵道サブウヱーに乗り、市の北端から南端まで僅に三十分あまり。停車場の石段を上つて市中でも一番高い建物の群り立つて居る紐育中の紐育とも云ふべき下町の街を過ぎて南の波止場に赴いた。見ると横付にされた汽船の甲板、切符の賣場、波止場の前の公園、共に一杯の人である。亞米利加人ですら初めて紐育を見るものは市中如何なる處へ行つても人並の溢れ漲つて居るのに一驚を喫すると云ふ位である。氣の弱い自分は、「到底乗り切れまい。」と落膽した調子で云つたが、永く此の修羅場に馴れて居る所謂敏捷スマートなＭ子は平氣なもので、自分の手を引きながら、ズン〳〵群衆の中へ割つて這入り、どうやら道を造つて、到頭汽船の

甲板に上り、あり合ふ疊椅子を捜出して腰を下した。

　汽船は五分ほどして纜ともづなを解いた。波止場の上に往來して居る女の衣服が遠く花園の花の如く見える頃になると、ハドソン河口の偉大な光景が遺憾なく眼前に開展せられる。赫々たる夏の空高く聳ゆる紐育の高い建物を中心として、右の方にはハドソン河を隔てゝ煤烟雲と棚曳くニユーゼルシーの市街を眺め、左の方には世界の港灣から集來る幾多の汽船が自由に其の下を往來して居るブルツクリンの大橋、續いてブルツクリンの市街。而して此の恐るべく驚くべき平和の戰場をば唯の一目に見下して居るのは、片手に鉾ほこを差上げて港外遙かの海上に立つ自由の女神像である。

　自分は今まで此の樣な威儀犯すべからざる銅像を見た事は無い。覺えず知らず身を其の足下に抛なげうつて拜伏したいやうな氣がするのである。この深い感動は全く銅像建設の第一義とも云ふべき其の位置の宜しきが故に外ならぬ。何れの美術にしても所謂アクセツソリーなるものを無視しては美術の效果を全からしむる事は出來ないが殊に銅像記念碑等について自分は此の感を深くする。人は木の葉に等しい船よりして、彼方に民主國の大都府を臨みつゝ大西洋上に此の巨像を仰いだなら、誰とて一種の感慨に打れざるを得まい。この銅像は新大陸の代表者、新思想の説明者であると同時に、金城鐵壁の要塞よりも更に強力な米國精神の保護者である。自分は此の銅像が佛蘭西より寄贈されたものである事を聞いて居るが、其の建設者なる一美術家の力を思へば、神にも等しいではないか。

　自分等を載せた汽船は一度は遠く海岸の景色も見分みえわかぬほ

ど、廣い沖合に出たが、軈て再び靜かな陸地に沿うて進んだ。晴れ渡つた青空に滿渡る明い夏の日光は水平線上に浮ぶ眞白な雲の峯、平な海水、枝も重氣に茂つて居る海岸の樹木を照して、雲の白さ、水の藍色、木葉の綠に、云はれぬ愉快な光澤を與へて居る。見渡すと沿岸は一帶に牧場にでもなつて居るらしい低地續きで、水面には處々に、高く茂つた蘆荻あしの洲が現れ、其の蔭をば眞白な輕舟ヤツトの帆が走つて行く。鷗の群が花の散るやうに飛ぶ。自分は此う云ふ水彩畫その儘の小山水を、偶然無名の里に見出した嬉しさ。世界に知れ渡つた名所古跡に遊ぶの比では無い。

　去年自分は落機山ロツキーさんを越え、またナイヤガラ瀑布を過ぎた折、この世界の奇勝も豫想した程には自分の心を動さなかつたが、それに反してミゾリ州の落葉の村、ミシガン州の果樹園の夕暮に忘れられぬ詩興を催され漫そゞろに感じた事がある――――およそ造化の巧を集めたそれ等の名山靈水は久しい間世の人に驚かれ敬はれて居る事、若しミルトンが失樂園ダンテの神曲にも譬へ得べくば、彼の名も無き村落の夕暮の景色は正に無名詩人が失戀の詩とも云ふべき歟。トルストイはベトーヴエンの音樂よりも農奴ムージツクが夕の歌に動され、ジヨージ、エリオツトは古代の名畫よりも小さな和蘭畫を愛したと云へば、自分が常に博士や學者が考究の玩弄物になつて居るクラシツクの雄篇大作よりも、ツルゲネフ、モーパツサンの小篇に幾多の興を覺ゆる事、獨り淺學の故とのみ限られはせまい。

　汽船は二三箇所狹い海水浴場の波止場に立ち寄り、午後の一時過

プレザントベーと云ふ同じ夏場に到着した。水際一帯の低地は公園になつて居て、小い音樂堂、料理屋、玉場などが樹の蔭に散在して居る。此處から電車に乗つて一時間あまり、目的のアシベリイ、パークに到るまでの沿道には盡く夏のホテル夏の貸別荘と、木立の涼しい牧場とが入替り立替り續いて居る。

　木庭の楓に網床ハンモックを吊し身を長々と横へて小説を讀んで居る若い姉妹、緑滴る縁側ベランダに安樂椅子を並べて往來を眺めながら樂し氣に語り合うて居る若い夫婦、牧場から野の花を摘んで鐵の垣根道を歸つて來る若い戀人同士、手を引合ひ唱歌を歌つて走廻つて居る小娘の幾群、花園を前にした門の戸口に其の友を訪れる美少年の幾組、到る處愉快な笑ひ聲と話聲、口笛とピアノの響。

　此の晴渡つた明い夏の日、爽快な海の風吹く水村は世の夢を見盡した老人の隱場では無く、青春の男女が青春の娯樂青春の安逸青春の癡夢ちむ醉ひ狂すべき溫柔郷である。

　自分は走行く電車の上から幾人と數へ盡されぬ程多くの美人多くの美男子を見た。自分は美人美男子を見る時程、現世に對する愛着の念と、我と我存在を嬉しく思ふ事はない。科學者ならぬ無邪氣の少女は野に咲く花を唯だ美しいとばかり毒艸どくさうなるや否やを知らぬと等しく道學者警察官ならぬ自分は、幸にして肉體の奧に隱された人の心の善惡よしあしを洞察する力を持たぬので美しい男美しい女の歩む處、笑ふ處、樂しむ處は、凡て理想の天國であるが如く思はれる。ましてや、此の夏の海邊は冬の都の劇場舞蹈場の如く、衣服と寶石の花咲く溫室では無く、赤裸々たる雪の肌の薫る里であるをや。

男は身輕なジヤケツトに麥藁帽子、女は眞白な日傘に帽子も冠らず渦巻く金髪や黑髪ブルネツトの光澤を誇り、短い袴の裙から、皺一ツ無い絹の靴足袋に愛らしい小形の靴を見せ、胸さへ透見えるやうな薄い上衣ウエーストの袖は二の腕までも捲り上げ腰を振り肩で調子を取りながら、輝く日光の中を歩む樣、恰も空飛ぶ鳥のやうである。

自分は西洋婦人の肉體美を賞讃する一人である。その曲線美の著しい腰、表情に富んだ眼、彫像のやうな滑な肩、豐な腕、廣い胸から、踵の高い小な靴を穿いた足までを愛するばかりか、彼等の化粧法の巧妙なる流行の選擇の機敏なるに、無上の敬意を拂つて居る一人である。彼等は其の毛髪の色合、顏立、身體付によつて、各巧に衣服の色合や形を選び、十人並の容貌も、能くその以上に男の眼を引くやうにする。飜つて日本の兒女の態を見れば彼等は全く此の般の能力を缺いて居るやうに見えるでは無いか。尤も日本人と云へば非難と干涉の國民であるから此の社會に養成された繊弱かよわい女性は恐れ縮つて思ふやうに天賦の姿を飾り得ないのかも知れない。

電車はアシベリイパークの海邊に臨む町の四辻に停つた。

茫々たる大西洋を前に四五軒並んで居る高い木造りの旅館の縁側、辻の角の藥種屋ドラツグストアー、波の上に築き出した散步場、何れも男や女で一杯になつて居る。其の眞白な衣服と日傘は青い空と海の色とに相映じて云はれぬ快感を與へるのである。

自分はM子ヱムしと共に散步場の階段から海邊の砂地に下り、何處か水着を貸す家はあるまいかと其の邊を見廻したが、不思議や人

は大勢波際を散歩して居ながら游泳するものは一人も無い。衣服を脱ぐべき小屋は皆な戸と閉して居る。

「別に海が荒れて居る譯でもないのに、如何したのであらう。」

　Ｍ子しは暫くの間不審さうに四邊の樣子を眺めて居たが、忽ち思付いて、

「日曜日だからだ。」といつた。

　米國では土地によると、宗教上の關係から日曜日には凡ての遊戯を禁制する所がある。アシベリイパークも恁かゝる例の一ツであつたのだ。

　此の州の或町に行くと、日曜日には一切舟遊びを禁じながら馬車や自動車オートモビルを馳らす事を許して居る滑稽な矛盾を見た事もあるとＭ子はやがて自分に話した。

　二人は少時砂の上に腰を下し雲のみ浮ぶ無限の大洋に對して居たが、軈て再び散步場に出で、レモン水の一杯に渴いた咽喉を濕した後、先刻上陸したプレザントベー公園に戻り、歸りの汽船ふねの出帆するまで一睡を試る事にして走はせ來る電車に飛び乗つた。

　公園の入口に下車すると直樣二人は水邊の木蔭に步み寄り柔い靑草の上に腰を下す。見渡す眼の前の景色は白い夏雲の影を映した平かな入江を隔てゝ、夏木立の低く茂る間から農家の屋根や風車。まるで平和な和蘭畫を見るとしか思はれぬ。

　自分は無暗と幸福の念に打たれ、半は身を草の上に橫へながら、更に眼を靜な水の上に注ぐと、湖水に等しい入江の唯中に一葉の眞

白な小舟ボートが飄然として中空から舞下りたローヘングリンの白鳥かとも怪しまれた。然し乗手は若い女と男の二人ぎりらしく、男は其の強い腕に力を籠めて漕ぎ行くと見え、舟は見る□□中に一方に突出た蘆の洲の茂りの蔭に隱れて了つた。自分はハタと草の上に倒れ全く寢床の上に臥るやうに身を伏ると自分の眼の高さは丁度水の面と並行するやうになるので、滿々たる潮は忽ち身を浸すやうに思はれ、青い楓の葉越に見える夏の空は平常よりも更に高く、更に廣く見えながら、懶く動く白雲は其に反して次第□□に我身を包むべく下りて來るやうに思はれた。軈て四邊は模糊として霧の中に隱れるが如く、折々水面を渡つて來る微風そよかぜの靜に面を撫て行くのを感ずるばかり。身體中は骨も肉も皆溶けて氣體となり殘るものは繊細な皮膚ばかりとなつて、遂に水と雲の間に自分は魚よりも鳥よりも輕くふはふは浮び出した………あゝ白日ひるの夢。

ミシガン州の片田舍に居た頃、丁度五月の末であつた。楓メープル、楡エルム、槲オークなぞの大樹の若葉は鬱蒼として村落を包み、野草は萋々せい□□として牧場を蔽ひ、林檎、桃、櫻の花は小丘をかを攀よづる果樹園に、紫色のライラツク眞白な雪球花スノーボール、紅の薔薇は人家の小庭に咲き亂れる北國の春の半。南方から春夏を此地に集ひ來る駒鳥ロビンと黒鳥ブラツクバードは庭と云はず墓場と云はず街と云はず村と云はず、樹のある處、花咲く處には、聲を限りに長閑な歌を歌ひ續ける。然し大陸の常として日和續きの日中は、日本ならば最う七月の暑かとも思はれる強い日の光に、自分は狹い居室の氣を晴す爲め、村はづれから起伏する小丘の間を、鐵道の線路に沿ひ、次第々々に人無き槲の森林に迷ひ入り、

白い雛菊デージーや黄金色なすバタカツプスの咲き亂るゝ野草の中に身を投入れると、幾多の栗鼠は物音に驚いて、草の中を四方に逃げ散り、逸早く檞の梢から梢を渡つてキヽと鳴く。

一巻の詩集は例の如く衣嚢の中に携へて居たものゝ、奇しき自然の前に對しては、如何なる美術も如何なる詩篇も、要するに怪異と誇張と時には全く虚僞としか見えぬので、其樣人工的のものには手を觸るゝ氣もせぬ。思ふが儘に身を延して、高い梢越の空を仰ぎ、濕つた土と草の香を嗅ぎつゝ、鳥の歌、栗鼠の叫びに耳を澄まして居ると、自分は全く世間を見捨てた或は世間から見捨てられたやうな氣になる。日本であると隨分遠い山里に行つても、土地は多く開拓され盡して居るので、何となく浮世の風の通つて居る氣がするけれども、さすがは新大陸の廣漠たる、町から二哩出るならば、何處へ行つても此う云ふ無人の境が現れ、此れに異郷の寂寞と云ふ主觀的の情趣を加味して見るので、樹木の茂り、水の流、空行く雲の有樣は、凡て自分には一種云ひ難い悲愁の美を感じさせる。空想は泉の如く湧起り自分は放浪の生活の冷い快味を思ふにつけ、一層の事アラビヤの女と駱駝と並べて砂漠を歩み、天幕の下に眠つて見たらば如何であらう、かと思ふと、忽ち旅で病にかゝり日光の照さぬ裏町の宿屋に倒れるやうな運命に出逢つたら………と今度は覺えず慄然ぞつとして明日にも日本に歸り度いやうな、極端から極端の事に思を走せ、遂には氣疲れして其のまゝ混惑の夢に落ちて了ふのである。

異郷の晝の夢。單調な我が生涯に嘗て經驗した事の無い盡せぬ情

味を添へてくれたものは此の晝の夢である。今日も又端無く大西洋の潮流れ入るプレザントベーの邊に臥して、自分は夢の中に忽ち美妙の音樂を聞つけて目を覺した。公園の端の料理屋で樂隊オーケストラが何やら靜かなクラシツクの一曲を奏し出したのである。

　然し、自分は猶暫く睡後の意識の朦朧として居る處から眼前の入江から森、雲までを、もう十年も過ぎた會遊の地を望む如き心持で、何とは無しにしげ〳〵眺め入つたが、やがて後の方に近く跫音を聞き付けたので振向くとM君であつた。彼も今方目を覺して、歸りの汽船の時間を聞きに波止場まで行つて來たのだと云ふ。

　二人は木蔭を出で音樂を奏して居る公園の料理屋に入り冷した果物と生薑しやうが酒しゆに咽喉を潤した後、夕の五時過に船に乘つた。

　途中で日は落ちたので、大西洋上に燃る夕榮の美しさを見盡し、徐おもむろに紐育の港口に近づく頃には、逸早くかの自由の女神像の高く差上げた手先に、皎々かう〳〵たる燈明の輝き初めるのを認めた。續いて夕波高く漲る彼方に、山脈のやうに空を限る紐育の建物、ブルツクリンの大橋、無數の碇船舶、引つゞく波止場々々々燈火の一齋に煌きらめき渡るさま、日の中に眺めた景色よりも更に偉大に更に意味深く見える。

　汽船の波止場についた時は丁度八時、二人は晩餐を準とゝのへる爲め、夜は殊に賑ふ十四丁目通りの唯と有ある佛蘭西の料理屋カツフヱーに這入つた。

（明治卅八年七月）

夜半の酒場

紐育市役所の廣場を前にして、いつも人馬の雑沓するブルツクリン大橋の入口から高架鐵道の通つて居る第三大通サードアベニユーを四五丁ほども行くと、チヤタム、スクヱヤーと云つて、此處から左へ這入れば猶太ジユー街まち、右手に曲れば支那街から、續いて伊太利亞街へと下りられる廣い汚い四辻に出る。

一口にポアリーと稱して、各國の移住民や勞働者の群集するところ。同じ紐育の市内ではありながら新世界の大都會を代表すべき「西側ウエストサイド」からは自と一劃の別天地。彼方は成功者の安息地であるならば、この「東側イーストサイド」の別天地は未成功者もしくは失敗者の隱れ場所であらう。

されば路行く人も地下鐵道の車中で互に衣服の美を爭ふ「西側」とはちがひ、女は帽子も戴かず、汚れた肩掛シオールを頭から被り、口一杯に物を頬張りながら歩く。男は雨曝しの帽子に襟カラーもなく、破けた下襯衣から胸毛を見せ、ズボンのポケツトには燒酎ウイスキーの小壜を突込んで、處嫌はず黄い嚙煙草の唾を吐き捨てゝ行く。で、歩道サイドヲークの面は此等の人々の痰唾でぬる、、□□して居る上に、得體の知れぬ怪し氣な紙屑やら、襤褄片やら、時としては破けた女の靴足袋が腐つた蛇の死骸見たやうにだらり、、、と横はつて居る事さへある。車道は何處も石を敷いてあるが重い荷車ワゴンの車輪で散々に曳き崩され、乾く間のない荷馬の小便は其の凹み□□に溜つて蒼黑く濁り淀んで居る。

街の兩側に物賣る店の種々あるが中に、西洋にも此樣ものがある

かと驚かれるのは電氣仕掛にて痛みなく文身ほりもの仕り候―――と硝子戸に看板を掛けた文身師の店である。其處此處と殆ど門並目に付くのは如何はしい寶石屋と古衣屋とで、其の薄暗い帳場の陰から背の屈つた猶太人の爺が、キヨロ〳〵眼で世間を眺めて居るかと思へば、路傍の食物店に伊太利亞の婆が青蠅のぶん〳〵云ふ中を慾德無さゝうに居眠りして居る。

　此樣工合に何處を眺めても、引續く家屋から人の衣服から、目に入るものは一齊に暗鬱な色彩いろばかり。空氣は露店で煮る肉の匂、人の汗、其の他云はれぬ汚物の臭氣を帶びて、重く濁つて、人の胸を壓迫する。で、一度此の界隈へ足を踏入れると、人生の榮華とか歡樂とか云ふ感念は全く消え失せ、胸は只だ重苦しい惡夢にでも襲れて居るやうな心地になるのである。

　或時―――冬の夜の事である。自分は猶太町に在る猶太人の芝居を見物した歸りぶら〳〵此の邊を步いて見た。もう十二時過と見えて、古衣屋も寶石屋も、その他の店も皆燈を消して居て、街の角々にある酒場サルーンばかりが今こそと云はぬばかり、時を得顏に電燈を輝かして居た。

　自分は突と戶を押して這入ると、カウンターに身を倚せながら勞働者の一群が各コツプを片手に高聲で話合つて居たが、ふと自分の耳に付いたのは、奧深い彼方から幽に聞える破れピアノに女の騷ぐ聲々。で、其の儘、突當りの戶を押試みると身は流るゝ如く扉と共に眞暗な廊下へと滑り込んだ。

　女の笑ふ聲は更に五六步先なる戶の中と覺しいので、自分は臆せずに進んで此の二番目の戶口へ近寄ると跫音を聞き付けてか、此の

度は内から戸を開けてくれたものがある。鍵穴から見張をして居た番人で、自分が這入ると再び戸をばつたり閉めた。

外部から此様こんな處に此樣廣いホールがあらうとは誰あつて思ひ付かう。室の周圍の壁に近寄せて、數多の食卓と椅子を据ゑ、其の片隅には古ぼけたピアノが一臺。胴着ちよつき一枚になつて汚れた襯衣から腕を見せた大男が折々片手で汗を拭きながら、此のピアノをひいて居ると、その側に坐つて居る瘦せた背蟲の男が靑白い橫顏を見せながらバイオリンを彈く。食卓の男女は、一組二組と立つて室中を迂曲うねり迂曲り舞步いて居るではないか。

何れを見ても此れはと思ふ風采みなりのものは一人もない。太いズボンの水兵連中に交つて、中にはせい□□美裝めかしたつもりで、汚れぬ襟に襟飾を付けて居るものもあるが、子供の腕よりも太さうな其の指と、馬の蹄見たやうな厚底の靴とで、日中は道普請をしたり煉瓦を運んだりして居る輩てあひである事が直ぐ分る。

女はと見れば、年齡の多少も分り兼るものばかり。顏中白粉をこて、、、□□塗立てた上に頰紅を濃くし、下睫したまぶちへ墨を入れて居るものもある。着古して皺だらけになつたスカートに、洗晒しの夏物を着て居ながらも、尙都の華奢くわしやを學ぶ心か舞臺にでも出さうな踵の高い細い靴を穿き、鬘を冠つたやうに入毛いれげをした髮の間や、頸、腕、指なぞには、無暗と硝子製のダイヤモンドを輝して居る。

ピアノとバイオリンの奏樂進むにつれて、此等の女と抱き合ひながら、水兵や勞働者の入りつ、亂れつ床の塵と煙草の煙と酒の匂とで電燈の光も黃く朦朧となつて居る中を狂するやうに舞ひ踊るさ

ま、自分は已に淺間しいと云ふ嫌惡の境を通越して、何とも云ひがたい一種の悲哀———嘗て故鄕で暗い根岸の里あたりから遠い遊廓の絃歌を聞いた時のやうな、その悲哀を感ずるのであつた。

　舞蹈ダンスの曲は止んだ。男女は各元のテーブルに歸ると白いジヤケツトを着た給仕人が、注文を聞いて廻る。最う腰も立たぬ程に醉つて居ながら、猶ウイスキーを煽る水兵もあれば、女ながらも其の劣らず强いブンチをがぶ□□やりながら、時にはテーブルを叩いて大聲に云罵るのを聞けば、凡そ劣等な中にも劣等なる言語。スエヤーの數々。

　自分は片隅のテーブルに一人ビールを傾けつゝこの奇異なる四邊の光景から、軈て汚れた板張の壁に掛けてある額なぞを眺め廻した。

　たぶんフツトボールを營業にして居る女の一組と覺しく、逞しい筋肉を其のまゝ見せた肉襦袢の四五人が手を取り合つて立つて居る一枚の寫眞に續いては、鬼のやうな顏をした拳鬪家ボクサーが兩手を前にいざと身構へして居る肖像畫があり、向側の壁には察する處此の近邊を繩張内にして居るものであらうか、制服を着けた消防夫の寫眞が二三枚並べて掛けてある。

　忽然、二人連の女が自分の占めて居るテーブルの空椅子に腰を掛けた。自分は好奇心の誘いざなふ儘に此の社會に限つて通用する合圖の目瞬きをして見せると、金にさへなると見れば人種の差別なぞは一向に頓着しない連中と見えて、早速椅子を自分の方へぴつたり引寄せたばかりか、其の片肱を自分の肩の上に頰杖をして、「卷煙草シガレツトは無くツて。」と云ふ。

自分は一本の巻煙草を渡した後通過る給仕人ウエーターを呼ぶと、女はカクテールをを命じた。自分は更にビールの一盞を新しくさせて、さていろ□□と冗談話の中から此の人達の身の上を聞出さうと絶えず注意したが、一向に要領を得ない………

「名前も何にもありやアしない。キッチー………黒髪のキッチーて云へば、それで通つて居るんだよ。」

「家は何處だい。」

「家は………紐育でもブルツクリンでも宿屋と云ふ宿屋は皆な私の家さ。」

「色男はあるのかね。」と聞くと、

「ほゝゝゝほ。」と笑ひ出して、「お金のある奴は皆な色男………。」

と云ひながら突然、自分の頬に接吻した後頭から肩を左右に搖りながら―――will you love me in December, as you do in May　―――と鼻歌を歌ひ出した。

折から又もやピアノとバイオリン、連中は以前の如くに踊り出す。

女は突と握つて居る私の手を引寄せ、「今夜………いゝんでせう。」

「何が………」と態と不審さうに聞返すと女は甚く不興な顔付になつて、

「分つてるぢや無いか………ホテルさ。」

自分は微笑んだ儘答へなかつた。

「不可ないの。さう………。」と云つて女は一寸両肩を搖上げて横

を向いたかと思ふと、忽ち舞蹈の音樂に合はせて再び鼻歌を續けたが、遠くのテーブルから目瞬せする水夫の連中を見付けて、其の儘すた□□立去つて又もウイスキーを煽つて居る。

　軈て自分も席を立ちかけた途端、彼方の戸口からホールへ這入つて來た二人連の音樂師がある。

「おゝ、ジヨージだ、イタリアン、ジヨーだ。」と給仕人の一人が乞食の音樂師を見て叫ぶと、其の邊のテーブルに居た地廻りらしい男が、

「暫く姿を見せなかつたぢや無えか。いゝ儲口でもあつたのか。」

「大した事も無えが、暫く田舍を歩いて居た………。」とその儘ピアノの傍に進寄つて、空椅子に腰を掛け、頸から襷掛にしたバンジヨーと云ふ樂器を取下して壁に倚せ掛けると他の一人は小形のマンドリンをば膝の上に抱へたまゝで、

「どうだね、親方………。」と此度は此方からピアノ彈に挨拶をする。

「相變らずよ。」と胴着一枚に腕巻りのピアノ彈は皺枯れた聲で、

「どうだ、まアー杯やりねえ。」

　給仕人がビールを近くのテーブルに持運ぶ。

「ありがてえ、頂かうよ。」と二人の伊太利亞人は早速飮干すと洋琴彈は如何にも親方然と、

「お禮にや及ばねえ、好鹽梅にお客樣も大勢だ………早速いつもの咽喉を聞かしねえ。」

　伊太利亞人は各バンジヨーとマンドリンとを取りあげ、ピアノの横へ直立し、さて歌出すのは自分には意味の分らぬ南歐の俗歌であ

る。

　然し歌の節は東洋風に極く緩かで、聲は錆のある顫ひを帶びた何處にか一種の輕い悲みを含んで居る。泥醉した水夫も女郎も職人も丁度廓で新内を聞くと云つたやうに、皆な恍惚として少時は場中水を打つたやう。

　彼方此方から五仙十仙と、祝儀の銀貨が床の上に投出されるので、自分もポケツトから廿五仙銀貨を奮發した。いや、自分は四邊の人目を牽く事さへ厭はなかつたなら五十仙、一弗位は惜みはしなかつたのだ。あの多く母音で終る伊太利亞語そのものが、自分の耳には云ひがたく快いのに、乞食の音樂師がゆがんだ帽子に天鵞絨の破衣、眞赤な更紗模様のハンケチを頸に卷いた風體から、房々と額へ垂らした黑い縮れた頭髪、黑い睫毛、薄い口髯、それから南歐の暖あつい太陽に燒かれた其の顏色が絕えず思ひを南國に馳せて居る自分には何と云ふ譯もなく深い詩興を呼起させたからである。

　二人は歌ひ了つて床の上に投出された祝儀の銀貨を拾ひ集めながら、やがて自分のテーブル近くまで來たので、

「お前さん、伊太利亞は何處から來たんだね。」

　彼は人種の異つて居る自分の顏を見上げたが驚きもせず怪し氣な英語で、

「島から、シヽリー島からです。」

「何年ばかりに成る。」

「まだやツと九ケ月にしか成りませんや、初めは金儲をするつもりで來たんですがね、北の歐羅巴から來た奴等のやうに地の底や火の中で那樣手ひどい家業が出來るものか、怠惰者なまけものは何處へ

行つても同じ事、慫して處々方々、歌つて歩いて居るんでさ。でもまア神様のお助けツて云ふんでせう、どうにか此うにか其の日のパンにやあり付きまさア。」

舞蹈の音樂が又奏し出される。男や女は再び夢の世の人の如くに煙草の烟の中を、彼方此方あちこちと舞ひ歩く。

すつかり祝儀を拾ひ集めた二人の伊太利亞人は片隅のテーブルに引退いて又二三杯のビール。自分は重い空氣の中に長く閉込められて居た苦しさに冷い深夜の風に吹かれやうと靜に席を立つた。

（明治卅九年七月）

落葉

アメリカの木の葉ほど秋に脆いものはあるまい。九月の午過の堪へがたい程暑く、人はまだ夏が去り切らぬのかと喞かこつて居る中、其の夜ふけ露の重さに、檞オークや楡エルムや菩提樹リンデンや殊に碧梧のやうな楓樹メープルの大きな葉は夏のまゝなる其の色さへ變へずして、風もないのにばさりばさりと重さうに懶氣ものうげに散り落ちる。

自分は四邊がすつかり秋らしくなつて、朝夕の身にしむ風に枯れ黄ばんで雨の如く飛ぶ落葉を見るよりも、如何に深い物哀れに打たれるであらう。譯もなく早熟した天才の滅び行くのを見るやうな氣がする。

自分は夕暮に一人、セントラル、パークの池のほとりのベンチに腰をかけた。日曜日の雜沓に引變へて平常の日の靜けさ。殊に丁度今頃は時間の正しい國の事とて何處の家でも晩餐をして居る時分で

あらう。馬車自動車は無論、散歩の人の跫音も絶えて、最後の餌をあさり了つて栗鼠りすの鳴く聲が梢に高く聞えるばかり。灰色に曇つた空は夜にもならば雨か、夢見る如くどんよりと重く暮れはてゝ行く。湖のやうな廣い池の面が黑く鉛のやうに輝き、岸邊一帶を蔽ふ繁りは次第々々に朧になつて、その間からは黃い瓦斯燈が瞬きしはじめた。

　絕えずあたりの高い楡の木の梢からは細い木の葉が三四枚五六枚づゝ一團になつて落ちて來る。耳を澄ますと木の葉が木の葉の間を滑り落ちて來るその響が聞きとれるやうに思はれる。木の葉同士が互に落滅を誘ひ囁き合ふのであらう。

　或ものは自分の帽子、肩、膝の上。あるものは風が誘ふのでもないのに、遠く水の上に舞ひ落ち流れと共に猶も遠くへ遠くへと行つて了ふ。

　ベンチの背に頰杖をついて自分は何やら耽る物思ひの中に、ふと詩人ヴヱルレーンが「秋の歌」と云ふのを思ひ出した。

Les sanglots longs
　Des violons
　　De l'automne
Blessent mon cœur
　D'une langueur
　Monotone.

「秋の胡弓の咽むせび泣く物憂き響きわが胸を破る。鐘鳴れば、われ色靑ざめて、吐く息重く、過し昔を思出でゝ泣く。薄倖の風に運ばれて、こゝかしこ、われは彷徨さまよふ落葉かな。」と人の身を

落葉に比ぶる例は新しからぬだけ、いつも身にしむ思ひである。殊に今旅の身の上を思出せば………あゝ自分は早や何處に何度異郷の地に埋るゝ落葉を眺めたであらう。

　上陸したその年の秋を太平洋の沿岸に、其の翌年はミゾリの野ミシガンの湖邊又ワシントンの街頭に、やがてこのニユーヨークの落葉も既に二度目である。

　去年始めてこの都會の落葉を見た頃には、自分は如何に傲慢で得意で幸福であつたらう。自分は新大陸の各地方の異る社會異る自然をすつかり見盡して了つたつもりで、これからは世界第二の大都會の生活を觀察するのだと、無意味に自分を信用して、日曜日毎に、この池のほとりに來ては散歩の人の雜沓を打ち眺めた。

　やがて木の葉は落盡した。寒い風が枝を吹き折つた、雪が芝生を蔽ひ盡した———藝界社交の時節が到來した。

　自分はシエーキスピア、ラシーンからイブセン、ヅーデルマンに至る種々な舞臺を見て、世界古今のドラマを鵜呑みにした氣になつた。ワグナーの理想もヴエルヂの技術も盡く味つて其の意を得たと信じたばかりか、自分は早くも將來日本の社會に起るべき新樂劇の基礎を作る一人である。あらねばならぬ樣な心地がした。自分は管弦樂を聽いて、クラシツク音樂の纖細美麗な處から、近代ロマンチツクの自由なる熱情を味ひ、更に破天荒なるストラウスの音樂の不調和無形式を讃賞した。猶これのみには止まらず、折々は美術館の戶口を潛つてロダンの彫刻マネーの畫を論じた事もあつた。

　自分の机はプログラムやカタログの切拔の新聞紙の山をなしたが、それをば整理して行く間もなく季節は過ぎて、淋しい梢は若芽

と咲く花に飾られ、重い外套の人は輕い春着の粧ひに變じた。自分も世間の人と同じやうに新しい衣服新しい半靴新しい中折帽を買つた。然しアメリカの流行は商業國だけあつて形が俗である。自分は飽くまで米國の實業主義には感化されないと云ふ事を見せたいばかりにいろ〳〵苦心した結果は「愛ラムの詩ルーズ」を書いた時分の若いドーデの肖像か、もしくは寧そバイロンをまねたいものだと毎朝頭髪を縮し太い襟かざりをばわざ〳〵無造作らしく結ぶのである。

人は定めし自分の愚を笑ふであらうが、自分獨りは決して愚とも狂とも思つては居らぬ。自分はかのイブセンが世を去つた當時、ボストンの或る新聞で見た事であるが………イブセンは眞白になつた頭髪をば一度も櫛を入れた事がないと云ふ樣に、わざ〳〵搔亂し、國王から贈られた勳章を胸にさげて鏡に向つて喜んだと云ふ意外の弱點があつたとやら。

虛言うそか眞まことか問ふ處ではない。よいも惡いも泰西詩人の事と云へば隨喜の涙に暮れるあまり、人眞似せずには居られない。自分はわざとこれも無造作らしく帽子を斜に冠り櫻の枝の杖を片手に詩集か何かを小脇にして、稍しばらく己れの佇む姿を鏡に映して見た後、漸く外に出て、春の午後人の出盛る公園に赴くのである。例の如く池のほとりを一廻り步み了れば、必ずシエーキスピーヤ初めスコツトやバーンズなぞの銅像の並んで居る廣い並木道に出で、ベンチに腰を下して、銅像と向合ひに悠然と煙草の煙を吹く。

すると、何時ともなく暖い春の日光ひかげに照される身のうつとり夢心地になるや否や、自分も已にそれ等不朽の詩聖の列に加られ

たやうな氣になつて了ふ。自然と口の端の筋肉が緩んで來て深い笑靨ゑくぼがよる。遂には自分ながら妙に氣まりが惡くなつて、そツと身のまはりを見まはせば道の兩側に並ぶ大樹の若葉の美しさ。その梢から透き見える大空の青さ、晴れやかさ。道の左右に海の如く廣がつて居る芝生の緣りの濃さ、爽快さわやかさ、何處から流れて來るとも知れぬ花の香の優しさ懷しさ。恐らく、自分の一生涯、この時ほど幸福な事はなかつたであらう。

　眼の前には絕間なく輕裝した若い女が馬車を馭したり、馬に乗つたりして行過ぎるが、何れも皆自分の方を眺めては微笑んで行くとしか思はれない。

　自分は若い中にも猶若く、美しい中にも猶美しい女の笑顏を眺めると、譯もなく幸福な戀を空想するのである………自分は麗しい英文で何か著作をする、それを讀んだ女が作者の面影を慕つて訪ねて來る。人生を語る、詩を語る、遂には互に祕密をかたる。何時か自分は結婚して了つて、ロングアイランドか、ニユーゼルシーの海邊あたり、ニユーヨークからは汽車で一二時間位で往來の出來る田舍に家庭を作る。小さいペンキ塗の村莊カツテーヂで、そのまはりには櫻や林檎の果樹園があり、裏手の森を拔ければひろ□□した牧場から、ずツと遙かに海が見える。自分は春や夏の午後、秋の日暮前、冬の眞晝なぞ、窓際の長椅子に身を橫へて、讀書につかれたまゝ、居眠まどろむともなく居眠む。と、隣の室からは極く緩かなリツストのソナタのやうなものが聞い。妻の彈ずるピヤノの曲にはつと目覺むれば………自分はこゝに初めて夕暮の冷い風に面を吹かれてベンチの上なる現實の我れに立返るのであつた。

かやうな夢に耽つた春の日も一夏を過ぎて………今は早や秋、飛散る木の葉を見ればさながら失へる戀の昔を思ふにひとしい。

木葉もやがて落ち盡すであらう。寒い北風と共に劇界樂界の時節も再び廻つて來るであらう。街の辻々停車場の壁は到る處劇場の廣告畫や音樂者の肖像に飾られるであらう。然し自分は去年のやうに大膽な無法な幸福な藝壇の觀察者として存在する事が出來るであらうか。また來る春には再びかゝる烟のやうな夢に醉ふ事が出來るであらうか。

夢、醉、幻、これが吾等の生命である。吾々は絕えず、戀を思ひ、成功を夢みて居ながら、然し、それ等の實現される事を望んで居るのではない。唯だ實現されるらしく見える空あだなる影を追うて、その豫想と豫期とに醉つて居たいのである。

ボードレールは云ふ。———醉ふ、これが唯一の問題である。人の肩を壓おさへて地に屈ませやうとする「時」と云ふ恐ろしい荷の重さを感じまいとすれば、人は躊躇する事なく醉つて居ねばならぬ。酒、詩、德、何でもよい。若し、宮殿の階段、谷間の草の上、或は淋しい室の中、時として、醉が覺めてわれに返る事があつたら、風、波、星、鳥、又時計、凡そ飛び、動き、廻り、歌ひ、語る諸有るものに向つて、今は如何なる時かと問ふがよい。風は、波は、星は、鳥は、時計は答へるであらう、醉ふべき時だ、酒でも、詩でも、美德でも、何でもよい、もし「時」と云ふものゝ痛しい奴隷になるまいとすれば、絕ゆる間なく醉うて居ねばならない………。

＊　＊　＊　＊

　四邊は早や夜である。森は暗く空は暗く水は暗い。自分は猶もベンチを去らず木間に輝く電燈の火影に頻と飛び散る木の葉の影を眺めて居た。

（明治卅九年十月）

夜の女

一

　ブロードウヱーの四十二丁目と云へば、高く塔の如くに聳ゆるタイムス新聞社の建物を中心にして、大小の劇場、ホテル、料理屋、倶樂部から、酒場サルーン、玉場、カフエーなんぞ、夜を徹して人の遊び歩く處である。されば又人並の遊びには猶物足らぬ人間の更に耽つて遊びに行く處も尠くは無い。

　ニユーヨーク座と云つて何時も木戸口に肉襦袢などきた艶しい舞娘をどりツこの看板を幾枚も出し、相當の劇場が休業する炎暑の時節にも大入で打通す例になつて居る小芝居の角を曲ると俄に寂とした横町に出る。

　卽ちブロードウヱーから高架鐵道の走つて居る第六大通シキスアベニユーへと拔ける裏町で、直ぐ目に付く建物は角のニユーヨーク座と裏合うらあはせに立つて居るハドソン座の樂屋口。其の筋向には見付の惡からぬライシユーム座の表口から少し離れては、夜深に女役者や舞娘がお客を連れ込む小綺麗なホテルが二三軒、硝子張の屋根がある其の門口には大きな鉢物の植木が置いてある。其の他上町で見るやうな近代風の高いアツパートメント、ハウスの三四軒立つて居る外は、兩側とも皆六七十年前の形式かたちの五階造の貸長屋ばかりで、其の窓々には殆ど門並に Ladies' Tailor （女物仕立所）又は印度渡來の Palmist （手相判斷）、音樂指南なぞ種々の小札が、下宿人を捜す明室あきまの廣告と共に相交り、時には支那料

理の赤い提灯も見える。

　此の横町、日中は殆ど人通りが絕えて居るが、夕暮頃からは長いレースの裾から踵の高い靴を見せ、陸に上つた水禽みづとり見たやうにしなしな腰を振つて步く女の往來漸く繁く、夜半過になると端から端まで相乘の小馬車で一杯になつて了ふ。

　立ち續く此の貸長屋の中には面白い處があるんだと、倶樂部あたりの若いものは皆知つて居る。然し紐育の市中は警察が喧しいとの事で、戶口には人目を惹くやうなものは一ツも出して無い。唯何番地と戶口に揭げてある番號で云ひ傳へ聞き傳へて知るものは知つて居り、知らざるものと見れば大通りに居る辻馬車の馭者が、過分の祝儀を目的に無理にも案內してくれる。

　表付は古い貸長屋の事で見る影もないが、這入ると下座敷は天鵞絨の帷幕カーテンで境した三間打通しの廣い客間で、敷物も壁も黑みがゝつた海老色えびいろを用ひ、天井は稍薄色にして金色の唐草を描き、椅子も長椅子も同じ重い海老色の天鵞絨張、其處へ天井から大な金色の花電燈が下げてあるので、一見何となく嚴めしく、何やら田舍芝居で見る公爵デユーク某が宮庭パレースの場とも云ひた氣な樣子である。

　表の客間の壁一面には幾多の女が裸體にされた儘抱合ひ今にも猛獸の餌ゑばになるのを待つて居る羅馬ローマ時代基督敎徒迫害の大畫が掛けてあり、次の間には裸體の女ニンフが四五人白鳥と戲れながら木蔭の流れに浴みして居る、此れも非常な大作で、人物は實物程の大さもあらう。室の隅々には眞物ほんものらしく植木鉢に植ゑ付けた造り物の椰子の葉が靑々として居る。

此の家の内儀マダム、名をミツセス、スタントンと云ふ。何處の生れやら誰も知るものはない。何でも極く若い時分から女郎屋に下女奉公をして居る中、知らず□□此の道の呼吸を覺え、ハウスキーパーと云つて家内中の賄方となり、市俄古、費府フイラデルフイヤ、ボストンと女郎屋から女郎屋を稼ぎ歩き、小金を蓄めた曉、紐育に出て來て獨力で現在の店を開き、今日でもう三十餘年商賣をして居るのださうだ。

ぶく□□肥つて腰の周圍なぞはホテルの廣間に立つ大理石の柱ほども有らうかと思はれる。口の大い、目の小い、四角な顏で、髮の毛は眞白だが、何時も白粉をつけ、一の字形の眉毛に黛まゆずみを引いて居る事さへある。

若い時から男は好きだが、其の爲めに金なぞ使つた事はない。道樂は寶石を買集める事が第一だと自ら吹聽して居る。成程五本の指殘らず指環を穿め、人と話をする時にはキチンと膝の上に其の手を置き、絕えず手巾で寶石を磨こする癖がある。指環の外に内儀が生命同樣の寶物として居るのは金剛石ダイヤモンドの耳飾で、其の價一對で二千弗したとか、然し日常耳朶に下げて居ると、餘りに人目を引き、何時ぞや舞踏の歸り途三度も追剝に後を尾けられたのに、すつかり膽を冷し、其の後は二重の錠を下してトランクの底に藏つてある——この有名な物語は家中の女ども知らぬものは一人もない。

往來に面した二階の一室が、内儀の居間と寢部屋を兼ねた處で、天井から日本製の日傘と赤い鬼灯ほゝづき提燈ぢやうちんとを下げ、戸口に近く矢張日本製と覺しい黑地に金鷄鳥を繡取つた二枚折

の屏風が置いてあるので、それ等の花々しい東洋風の色彩が古びた蠟石の煖爐と大な黃銅ブラス製の寢臺とに對して、一種驚くべき不調和を示して居る。

　室の中央には何時も「ジヤアナル」に「紐育プレツス」と云ふ繪入の新聞を載せた小さいテーブル、其の上に立派な鸚鵡の籠が置いてある。中なる鸚鵡はこの家に住む事既に十年、此の社會でのみ使用される下賤な言語をすつかり聞き覺え、朝から晩まで棲木とまりぎを啄つゝいては黃色い聲で叫びつゞけて居ると、其の傍の安樂椅子の上にはトムと呼ぶ鼠ほどの小さな飼犬が耳を動し、人の來て抱いてくれるのを待つて居る。

　內儀は午後の一時過に漸く目を覺ますと、第一に此のトムを抱き上げて接吻し、鸚鵡の鳴き立てるのを叱りながら、黑奴ニグロの下女が持運ぶ朝餐あさめしを濟して、新聞を讀み、窓際に置いた植木の世話に半日を送つて、夕暮の六時になるのを待つて居る。此れからが漸く此の家の夜明けである。下女が合圖の銅鑼鐘を叩くや否や、內儀はしづしづトムを抱いて、地下室ベーズメントの食堂に下り、仔細らしく主人席に坐ると、其れからどや〳〵と二階、三階、四階の部屋々々に寢て居た女供が、靴足袋一つの裸體身の上に緩かなガウンを引纏はせ、何れも何時頃だらうと云ひさうな怪訝な眼をしながら下りて來て各おの〳〵席につく。其の同勢五人。

　內儀の右側に坐る第一がイリスと云ひ第二がブランチ、第三番目がルイズ左側にはヘーゼルとジヨゼフイン。

　此の五人各それ相當の經歷と性格とを持つて居るのである。

　第一のイリスと云ふのはアイルランド人の血統で南部ケンタツ

キー州の生れとやら。年は二十三四。圓顔で、この人種特徴の頤は短く、瞳子の碧い目は小く、髪は光澤のある金色である。撫肩の何處か弱々しい姿をして居るが、腰から足の形の美しい事は自分ながらも大の自慢で、其の證據には二度程美術家のモデルになつた事があると云つて居る。家は地方で相當の財産家ものもち、十六七まではカソリツク教の學校に居たとやら云ふ事で、折々飛んでも無い時に何を思出してか、口の中で讃美歌を歌つて居る事がある。一體に浮かぬ性質たちと見えて男を相手に酒を呑んでも別に騷ぎはせず、さうかと云つて病氣や何かの時でも大して鬱ふさいだ顏もした事がない。

　これに反して隣に坐つて居るブランチと云ふのは親も兄弟もなく、紐育の往來端で犬と一緒に育つた生付いてのお轉婆者。もう三十になると云ふが極めて小柄な處から、其の瘦せた血色の惡い顏に厚化粧をして、入毛澤山の前髪に赤いリボンでも付けると、夜目には十六七の娘に化けてまんまと男を欺す。大の酒喰ひで而も手癖が惡く、お客の枕金を掠くすねて「島」の監獄へ送られた事もあつたとやら。寄席へ出る藝人と辻馬車の馭者をして居る黑奴二人までを色男にして居ると云ふので、仲間のものからは白人種の感情から一層嫌惡されて居る。

　さて三番目のルイズと云ふのは頭髮も眼も黑い小肥こぶとりの巴里パリー娘こで、年はかなりに成ると云ふが、本場の化粧法が上手な所爲せゐか何時も若く見える。二年前、亞米利加は弗の國と聞いて情夫をとこと一緒に出稼ぎに來たので、金になると云へば、何樣事でも平氣で男の玩弄物おもちやになる。其代り自分の懷では酒一

本買つた事がないとて、此れも仲間から可くは云はれて居らぬ。

左側のヘイゼル。此れは英領カナダ生れの頑丈な大女で、鞠を入れた様な其の胸から、逞しい二の腕や肩の様子如何にも油ぎつて、傍近く寄ると肌の臭と身中の熱氣を感ずるかと思はれる。身體の割合に恐しく小い圓顔の口に締りもなく眼も鋭からず、昔は牧場で牛の乳でも搾つて居た田舎者とも思はれて一同好人物おひとよしだと馬鹿にして居るが、いざウイスキーに醉ふとなると、其の逞しい腕に恐れて、一同冷嘲半分に機嫌を取るのが例である。

最後のジヨゼフイン。これは姿も容色きりやうも家中での秀逸であらう。年もまだ二十を越したばかり。兩親は伊太利亞の獅子里島から移住して今でも東側の伊太利街で露店の八百屋をして居るとか。南歐美人の面影を偲ばせる下豐しもぶくれの頰は桃色して、眼は黑い寶石のやうな潤んだ光澤を持ち、眉毛は長く描いたやう。十四五の時からイーストサイドの寄席や麥酒ビーヤガーデンなぞに出て流行歌を歌つて評判を取り、其の後は一時コーラスガールになつてブロードウヱーの芝居に出た事もあつたが、つい身を持崩して病氣にかゝり、大事の咽喉を潰して了つた。尤も病院を出た後は元の聲には成り得たが、もう怠惰癖がついて、漸次色の巷に身を下して了つたのだ。けれどもまだ浮世の底を見透す樣な苦勞と云ふ苦勞も知らず、同時に死んで見たいと思ふ程な情夫まぶの味も覺えた事なく、唯だ□□綺麗な衣服を着て、若い男と巫山戲て居たい眞盛り、惡い事と云へば何でも面白い年頃なので、浮いた今の身は理想の境遇。寢て居る時と、物喰うて居る時の外は、夜晝の別なく、一時本職にした流行歌を歌ひつゞけ、さらずば可笑しくもない事をキヤツ

□□と云つて笑ひ、家中狹しと步廻つて居る。

　この五人、毎日いづれか一度、物爭ひをせぬ事はない。が、暴風の過ぎるやうに、一時間も經つと何も彼も忘れて了つて又友達になり、一緒に口を合して更に又他のものゝ陰口に日を送つて居る。

　晩食はいつも極つたロースビーフか然らずばロースポークと馬鈴薯。クラムベリー、ソースにセレリー。其れが濟んでデザートに一片のパイかプツデングに紅茶の一杯。めい□□は部屋に戾つて長々とお化粧に取り掛つて夜の十時、内儀が家中の呼鈴を鳴らすと此れを合圖に一同は下の客間に下りて、來るべき客を待つ。流石商業國の女だけあつて此れから一夜を皆々營業時間ビジネスアワーと云つて居る。

　で、この刻限になると、家中五人の外に内儀と特約して毎夜外から出張して來る女も四五人はあつて、つまり十人以上の人數が或者は白いウヱーストに襟飾した素人風、或者は夥しいレースの飾をつけた夜會服の裾長く、貴族の舞蹈會もよろしくと云ふ樣で、手に扇さへ持ち、各客間の彼方此方に陣取るのである。

二

　十一時が過ぎて、近所の劇場しばゐの閉場はね時どき、往來は一時しきり、人の跫音、車の響、馭者の呼聲喧しく、やがて十二時が鳴つて寂しんとすると、これから一時二時頃までが、料理屋、倶樂部、玉突場歸りの連中の繰込む時分。今方何處かの商店員らしい三人連の若者をば、手癖の惡いブランチと佛蘭西生れのルイズと、夜だけ外から稼ぎに來るフロラと云つて、電車の車掌の女房で、もう

二人の子持、亭主と相談づくで金儲をして居る其の女とが各二階三階の部屋へ連込んだが、すると其の後直様戸口の鈴が再びチリン〱と鳴つた。

　マリーと呼ぶ黑奴の下女が戸を開ける。半白の番頭らしい肥つた男と後には地方の商人らしい三人。金になる客と見て内儀自ら出迎へ表の客間へ通した。

　番頭らしい男はいゝ年をして此れも友達の義理だと云はぬばかり、いやに沈着きながら椅子に坐る前、一座の女供を見渡したが、早くも藝人上りの若いジヨゼフインの姿を見るや、こいつ堀出物と忽ち耻を忘れ、自ら進寄つて同じ長椅子に坐り、「どうだ、一ツ三鞭酒と行かうか。」と膝の上に女の手を引寄せる。

　他の地方出の三人は客間へ這入るが否や、正面に掛けた基督教徒迫害の大裸體畫———意外な處に意外な宗教畫を見出して膽を潰したらしく、一同並んで椅子に付きながら、美術館でも見物する様子で少時は畫面を見詰めたまゝ默つて居る。その席に居た女は勿論、次の客間からも二人三人境の帷幕カーテンを片寄せて進み出で、各三人を取巻いて其の邊の椅子に着くと、黑奴がシヤンパンの大罎二本とコツプを持出して注ぎ廻る。

　「さあ緣起に一杯………。」と白髮の番頭が第一に杯を上げ、一口飮んだコツプを其の儘ジヨゼフインの唇に押付けてグツと飮干させた。

　内儀は杯コツプを手にした儘佇立み三人の方を見て「何れかお氣に召しましたら。」と客の氣合を伺つたが三人とも少してれ、、氣味で唯ニヤニヤ笑つて居る………折から客間の外の廊下で「左様な

ら、お近い中に。」と云ふ聲、接吻の響も聞えて二階のお客を送出した女。ブランチは鼻歌を歌ひ腰を振りルイズは後毛を氣にして撫でながら、フロラは態とらしく俯向いて客間へ這入つて來た。

二人は其の儘離れた片隅の椅子に着いたが、ブランチはお客と見るや、他の朋輩には遠慮もなく、猶も鼻歌を歌ひながら一人の客の傍に進み寄り、突然だしぬけに其の膝の上に腰をかけ、

「御免なさい。」と目に情を含ませ指先に挿んだ巻煙草を一服して静に男の顔に吹き付ける。

此の様子に男は今がた一杯シヤンパンを引掛けた後の漸く元氣づいた處なので、片手に女の啣へた巻煙草を取つて一服し、同時に片手では其の膝から滑り落ちぬやうにと女の腰をば引抱へた。

此れを見て他の一人も今は躊躇せず、一番柔順しい女と見立てゝ金髪のイリスの方へ、まだ醉ひもせぬのに肩を寄せ掛ける。殘りの一人は誰れ彼れの選好みはせぬ貪欲ものと見え、右から左り左りから右と、一座の女の顔は見ずに、衣服の上からも推測される胸の形や夜會服の白い肩のあたりのみを打目戍つて、獨り賤しい空想に耽ける様子。

此に於て一座の形勢已に定つたと見て、第一に席を去つたのは加奈陀生れの大女ヘーゼル、其の他のもの此れにつゞいて一人二人と幕越しなる次の客間へと引き退つたが、椅子に坐るとヘーゼルはさも憎く□□しく舌打して、「呆れて了ふぢや無いか、あの手長のブランチたら………後から遣つて來やがつて馴染でもないお客の膝に馬乗になつてデレ付くなんて、私ア眞個ほんとうに呆れ返つ了つたよ。」と云へば、其の傍に居た女が、

「何しろ、黑人ニツガーを情夫いろにして居る恥知らずだもの………。」と相槌を打つ。

　此樣な風で每夜お客の取り遣りから起る悶着が其の翌日迄も引續いて陰口の種となり、遂に噂された當人が聞込んで默つて居られず、口喧嘩に花を咲すが例である。

　然し今の處は幸にも隣の噂は醉つた男の太い笑聲に打消されて聞えぬ最中。ブランチは男の膝の上に馬乘りになり絹の靴足袋をした兩足をブラ□□させ、兩手に男の肩を捕へて船ボート漕ぐ樣に前身を動し、

「もう二階に行きませう。」と短兵急に早く埒を明けて了はうと迫つた。

「時は金」の格言を身の守護まもりとする金の都の女供、短い時間に多くを得やうとすればべん□□と一人の男の心任せに大事の時間を潰すは大の禁物である。處が又內儀に取つては酒代は全部其の所得になるので、呑む客と見れば一分なりと客間に引止めて酒を賣らねば成らぬ。此に於て往々內儀と女供の間には利益の衝突を免れず………昨夜も私わたいの腕でシヤンパン五本も拔いて遣つた癖に唯た一週間宿賃が待てないんだとさ………抔云ふ不平は常に絕る時がない。

　內儀は今二度目のシヤンパンを注いで廻つた後、座をつなぐ爲めにと自ら洋琴を彈き初め、

「ジヨゼフイン。一ツ何かお歌ひな。」と先刻から長椅子の上で半白の番頭を相手にして居た伊太利種のジヨゼフインを顧ると、舞娘をどりツこ上りのジヨゼフインは年も若く慾も少く、相手構ず騷ぐ

性質たちとて自分から手を叩き、

I like your way and the things you say,

I like the dimples you show when you smile,

I like your manner and I like your style,

............I like your way!

と聲一杯に歌ふと其れにつゞいて番頭も調子を合した。

　ブランチは此の様に稍焦れ込み、「私、もう醉つて苦しいわ。」と三十以上の婆の癖に鼻聲を作り、男の胸の上にピツタリ顔を押當てて大く息を付けば、金髪のイリスも此れに模ならひ、

「二階へ行つてゆつくり話しませう、ね、ね。」と男の指を握つて引張る。

　番頭この様を見て、「いや其方の方ぢや、もう眞猫しんねこをきめて居るんだな、内儀さん、其れぢや最う一本でお開きとするか。」

　内儀得たりと洋琴から飛離れ、「マリー、早く。シヤンパンの御用だよ。」

　流石のブランチも今は絶望して運を天に任すと云ふ風で、「大變な御元氣ですね。」と力なく云へば番頭一人で悦に入り葉巻の烟を濃く吹いて、

「酒に女にお金がありやア何時でも此の通り.........ジヨゼフイン、最う一遍先刻の歌を聞して吳んな。」

I like your eyes, you are just my size,

I'd like you to like me as much as you like,

I like your way!

　折柄又もや戸口のベルが鳴る。丁度最後のシヤンパンを持ち出したマリー、慌忙あわてゝ御免下さいとお酌を内儀に任して廊下へ飛出した。

　どや□□お客が次の客間へと這入る氣勢。つゞいて其の場に居た大女のヘイゼル、佛蘭西から來たルイズが可笑しな發音の英語………やがて皺枯れた男の聲で、「シヤンパンなんぞ拔く金は無えや。」と怒鳴るのが聞えた。

三

入れ替り立ち替り人の出入絶間なく、夜も既に三時過ぎになつて一しきり客足が止つた。

女供一同流石毎夜を明し馴れた眼も稍疲れ、知らず□□酔ふシヤンパンや麥酒やハイボールの混飲ごたのみに頭も重くなつて、元氣のジヨゼフインも今は流行歌唄ふ勇氣もなく、ピアノに片肱ついて生欠伸をし、ブランチは隅の方で下つて來る靴足袋を折々引上る振をしては其の中に揉込んだ紙幣さつの胸算用をして居るらしい。

イリス、ヘーゼル、ルイズ、フロラ、皆々長椅子へ並んで坐り繡眼鳥めじろが押合ふ樣に、互に肩と肩とを凭合せ、最う話の種噂の種も盡き果てた模樣。今は絶間なく喫す煙草にも飽きたらしく折々互に顏を見合せる。其の中には、「あゝ、お腹が空いた。」と云ふものもあるが、然し「それぢや何か買はうか。」と進んで發議するものは一人もない。

突然、呼鈴が家中の疲れを呼覺した。

元氣を付ける爲めか、マリーを待たずして、内儀自ら戸口に出ると高帽シルクハツトに毛裏付の外套白手袋に洋杖ケーンを持つた二人連、何處から見ても間違の無い交際場裡の紳士と云ふ扮裝いでたちに内儀は恭々しく先次の客間に案内し、「皆さんお客樣ですよ。」と呼ぶ。

大女のヘイゼル最初に立上り次の間に進入る前に女供の癖として物になりさうな客か否かと境の幕から盗見したが忽ち怪訝な顏をして後を振り返り、「シツ」と一同を制した。

「一件かい。」と一同は直に了解した様子で顔を見合せる中進出でたのはブランチ、同じく幕の間から見透して、

「うむ、さうだよ。」と最う拔足して一同の傍に立戻り、「探偵だよ。夜會服ドレツスなんぞ着やがつて………内儀さんは氣が付かないのかね。私やアちやんと顔に見覺えがある。」

　此の一言に流石は泥水を吸ふ女供、紐育の警察が月に一度は必ず酒類の脫稅販賣と夜業の現行犯を取押へる爲めに客に仕立てゝ探偵を入込す、このお灸には何れも一度や二度の經驗のないものはないので皆騷がず慌忙ず拔足差足、廊下ホールから地下室ベーズメントの食堂に逃れ出で或者は裏庭から隣の庭へと忍入り、或者はいざと云へば往來へ逃る用意で、地下室の戶口に佇立んだ。

　內儀は二度まで一同を呼んだが誰も出て來ぬので此の社會は萬事悟が早く、さうかと腹で頷付きシヤンパンをと男が命ずるのを利用して、自ら大罎を取つて波々と注いだ後、「旦那、いけませんよ。御冗談なすつちや………。」と云ひながら靴足袋の間から二十弗紙幣二枚ばかりも掴出して、其の儘男のポケツトに揉込み、「罪ですよ。」と笑ふ。

　此に於て探偵二人我意を得たと云ふ樣子で、「はゝゝゝは。此れも勤めぢや、其れぢや又近い中に………。」と立上つた。

「どうぞ、よろしく。」

　妙な挨拶。內儀は漸く送出して戶をばつたり。其の儘客間の長椅子に酒樽を轉した樣にどしりと重い身體を落し、「あゝ、畜生奴ツ。」と大聲に怒鳴つた。

　其れなり暫くの間家中は寂となつて物音を絕したが、軈てチリン

チリンと頸に付けた鈴を鳴しながら飼犬のトム、幕の間から顔を出し心配さうに内儀の顔を打目戍る。續いて食堂から上つて來たブランチ、同じく客間を一寸差覗き、「内儀さん………。」と一聲。

　然し内儀は最う落膽して返事をする勇氣もないらしい。

「内儀さん、それでも今夜はよく柔順しく歸つたねえ。」

「さうともね、」と内儀は稍腹立しく、「二十弗紙幣三四枚も掴ましたんだもの………。」

「二十弗三四枚………。」と敏捷いブランチ、必ず掛價を云つて居ると見て、態とらしく、「お氣の毒でしたね。」

　この時どや□□と裏庭へ逃出した連中が、「おゝ寒い、凍死こゞえしん了はア………。」と云罵りながらもう怖物なしと見て、客間へ駈入る。ブランチは意地惡く又も話を大袈裟に、

「内儀さんは二十弗紙幣七八枚も掴したんだとさ。」

「まア………。」と皆々内儀の顔を見た。

　内儀は女供が同情と驚嘆の聲に一層いま□□しくなつたと見え、忽然椅子に凭れた半身をキツと起し、一同を見渡して、

「何も其樣に驚く事はないよ、五十年此方叩上て來た腕だアね。鳥渡一目見れア、此奴は五弗で默つて歸るか、十弗で目を潰るか………其の邊の見つもりはまだ□□お前さん達は修行が肝腎さ。何しろ五十年と云ふ月日だよ。大統領ルーズベルトもマツキンレーもまだ鼻ツ垂しの時分からだ。」

「五十年………。」と誰かゞ繰返すと、他の一人が、

「其の時分にはカーネギーも一文なしの土方でせうね。」と訊く。

「さうだらうよ。私も其の時分には指環一ツ無しで暮したもん

だ。」

　一同返す語なく口を噤む。内儀は意氣昂然と身を反し、「全くの話さ。五十年前は指環一ツなし………。」と自ら過去の經歷を回想し、人生に打勝つた目下の成功に云ひ知れぬ得意を感じたらしく、しづ□□椅子から立上り女供を尻目に睨んで二階に上つて行つた。

　で、その裾の音が聞えなくなるかならぬ中に、最う堪へ兼て、長椅子の上に轉つて笑ひ出したのは無邪氣のジヨゼフイン。

「大統領ルーズベルトも未だ鼻垂しの時分から………。」とブランチが口眞似をすると、ヘイゼルが、

「五十年前は指環一ツなし………。」

「ほゝゝほゝゝゝほ。」と一同は吹出して笑つた。

　何處かの室で時計が鳴つた。車掌の女房フロラは聞澄して、「もう四時だ、今夜は緣起でもない。私やそろ□□歸らうよ。」と此れも外から稼ぎに來るジユリヤと云ふのを顧みた。

「さうだね。ぢやア行かう。」

　二人は三階へ上り夜の裝束を脫捨てゝ外出そとでの小ざつぱりした風に着換へ、帽子を冠りベールから襟巻の仕度を濟して內儀が室の戶を鳥渡叩き、

「四時過ましたから歸りますよ、又明晩、さよなら。」

　ばた□□駈下りて廊下の外から一同に、さよ——なら、と長く聲を曳いて往來へ出ると、出合頭に佛蘭西から一緒に手を引合つて稼ぎに來たルイズの情夫、自動車の運轉手をして居る奴が、

「今晩は。」と歐洲風の妙な手振で鳥打帽を取り、「ルイズは………。」と訊く。

「客間に居るよ。お樂みだね。」

　夜明の五時近くからが情夫どもの繰込む時刻である。色男は其の儘石段を上つて戸口のベルを押した。

「おゝ寒い。」と態とらしく身を顫してフロラとジユリヤは六番通の方へと行き掛ける。もう十二月の半とて市中を馳る電車の響は岸打つ波の如くに消えつ起りつ絕間なく聞えながら、何處やら深い寂しさの身に浸みわたり、角の芝居小屋の間からひろ〳〵と見えるブロードウヱーの大通は初夜よひの儘に明く照されながら、其の街燈の光は月よりも蒼く水よりも冷く見え、流石の大都も今が寂しい眞盛りである。

　二人は云合した樣に身を摺寄せ、四五間も行掛けると例のコーラスガール抔が泊込むホテルの前、二三輛客待をして居る辻馬車の影から、

「今夜は大分早いぢや無えか。」と大きなパイプを啣へた一人の男が立現れた。ジユリヤは四邊の火影に見透して、

「おや、掛け違つて、久振だねえ。」

　電車の車掌をして居るフロラの亭主である。每夜四時の交代に近所の停留場から制帽制服の儘何時でも此の邊で女房の歸りを待受けて居るのだ。フロラは輕く接吻して、「探偵いぬが這入つたんで緣起でもないから、四時きつかりに切上て了つたんだよ。」

「さうか。でも可成出來た方か。」と恥を知らぬ亭主。女房も平然としたもので、

「さうだね。大した事もなかつたが、それでも皆なそれ〳〵忙しかつたよ、ねえ。」とジユリヤの方を見返ると、

「うむ。」と頷付き、「一番上手なのは矢張ブランチだね、私にや、然しあゝは行かないよ。」

「フロラ、お前も少し見習ふが可いぢやないか。」

「何だつて。よけいなお世話だ。」

「深切に云つて遣るんぢやねえか。」

「いゝよ。」とフロラは手にした暖手套マツフで亭主の顔を打つ。

「はゝゝゝは。怒るない。」

六番通へ出て表戸の火は消して居るが内は夜通明いて居る酒場の前まで來た。ジユリヤの亭主は此の酒場の給仕人である。車掌夫婦は、「それぢや、あばよ。」と行掛けるのをジユリヤは呼止めて、「其樣に急いそがないだつて可いぢやないか、時たまには私わたいの可愛い人の顏も見て遣るもんだよ。」

「ちげエねえ。」

ジユリヤが先に立つて車掌夫婦共々 Familiy Entrance と書いた目立たぬ裏手の戸を押して内へ這入つた。

冬の夜の明けるには猶間があらう。人通りの絶えた六番通の彼方から醉つて居るのか、或は寒氣をまぎらす爲めか、中音に歌つて來る男の聲………

......I wish that I were with you, dear, to-night;
For I'm lonesome and unhappy here without you,
you can tell, dear, by the letter that I write.

突然、遠くから街を震動しつゝ襲來る高架鐵道の響。犬が何處かで吠出した。

（明治四十年四月）

ちやいなたうんの記

　何うかすると、私は單に晴渡つた青空の色を見た丈けでも自分ながら可笑しい程無量の幸福を感ずる事があるが、その反動としては何の理由何の原因もないのに、忽如こつじよとして闇の樣な絶望に打沈む事がある。

　たとへば薄寒い雨の夕暮なぞ、ふと壁越に聞える人の話聲、猫の鳴く聲なぞが耳につくと、もう齒を喰ひ縛つて泣き度いやうな心地になり、突如いきなり、錐きりで心臟を突破つて自殺がして見たくなつたり、或は此の身をば何とも云へぬ恐しい惡德墮落の淵に投捨て見たいやうな、さま〳〵な暗黑極る空想に惱される。

　かうなると、最う何も彼も顚倒して了つて、今まで世間も自分も美しいと信じて居たものが全く無意義に見えるばかりか厭はしく憎くなり、醜と云ひ惡と云はるゝものが、花や詩よりも更に美しく且つ神祕らしく思はれて來る。凡ての罪業惡行が一切の美德よりも偉大に有力に見え、眞心から其れをば讚美したくなる。

　丁度世間の人が劇場や音樂會へでも行くやうに、私は夜が來ると云へば其の夜も星なく月なき眞の闇夜を希こひねがひ、死人や、乞食や、行倒れや、何でもよい、さう云ふ醜いもの、悲しいもの、恐しいものゝあるらしく思はれる處をば、止みがたい熱情に驅られて夜を徹してゞも彷徨さまよひ歩く。

　されば紐育中の貧民窟と云ふ貧民窟、汚辱をじよくの土地と云ふ土地は大概歩き廻つたが、この恐るべき欲望を滿すには人の最も厭いみ恐れるチヤイナタウンの裏屋ほど適當な處はないらしい。然し

チヤイナタウン——其の裏面の長屋テネメント。こゝは乃すなはち人間がもうあれ以上には堕落し得られぬ極點を見せた惡德汚辱疾病死の展覽場である………

　私はいつも地下鐵道に乘つて、ブルツクリン大橋ブリツヂへ出る手前の小い停車場に下る、と、この四邊あたりは問屋だの倉庫續きの土地の事で日中の騷ぎが濟んだ後は人一人通らず、辻々の街頭の光に照されて漸く闇を逃れて居る夜の空には、窓も屋根もない箱の樣な建物が高く立つて居るばかり。中部ブロードウエーの賑かな夜ばかりを見た人の眼には、紐育中にも此樣こんな淋しい處があるかと驚かれるであらう。路傍には貨物を取出した空箱が山をなし、馬を引放した荷馬車が幾輛となく置捨てゝある。其の間を行盡すと其處がもう貧民窟の一部たる伊太利亞の移民街で、左手にベンチの並んで居る廣い空地を望み、右手は屋根の歪んだ小家續き、凸凹した敷石道を歩み、だらだら坂を上れば、忽ちプンと厭な臭氣にほひのする處、乃ちチヤイナタウンの本通りに出たのである。

　街は彼方に高架鐵道の線路の見える表通りから這入つて、家續きに迂曲うきよくして二條に分れ、再び元の表通りへと出て居る誠に狹い一區劃ではあるが、初めて入つた人の眼には、凸凹した狹い敷石道の迂曲する工合が、行先き知れず、如何にも氣味惡く見えるに違ひない。家屋は皆な米國風の煉瓦造りであるが、立並ぶ料理屋、雜貨店、靑物店など、その戸口毎に下げてある種々の金看板、提灯、燈籠、朱唐紙べにたうしの張札が、出入や高低たかびくの亂れた家並の汚なさと古さと共に、暗然たる調和をなし、全體の光景をば誠に能く憂鬱に支那化さして居る。

夜になつて、横町の端れから支那芝居の喧かしましい銅鑼鐘どらがねの響が聞え、料理屋の燈籠には一齋に灯がつくと、日中は遠く市中の各處に勞働して居た支那人も追々に寄集つて來て、各自てんでに長煙管を啣へながら、路傍で富籤や賭博の話に熱中して居る。其の樣子が西洋人には如何にも不思議に思はれると見えて、何事にも素早い山師が CHINA TOWN BY NIGHT――なぞと大袈裟な幟のぼりを立て、見物のオートモビルに好奇の男女を載せ、遠い上町から案内して來るもあり、又は立派な馬車でブロードウヱー邊の女郎を引連れ、珍し半分、支那料理屋で夜を更かさうと云ふ連中もある………

然し要するに、此れはチヤイナタウンの表面に過ぎぬ。一度料理屋なり商店なり、其れ等の建物の間を潜つて裏へ拔けると、何れも石を敷いた狹い空地ヤードを取圍んで、四五階造りの建物が、其の窓々には汚い洗濯物を下げた儘、塀の如くに突立つて居る。

私が夜晩く忍び行く所はこの建物―――其の內部は蜂の巢のやうに分れて居る裏長屋である。

此處へ這入込むには厭でも前なる狹い空地を通過ぎねばならぬ。空地の敷石の上には四方の窓から投捨てた紙屑や襤褸片ぼろきれが蛇のやうに足へ纏付からみつくのみか、片隅に板圍ひのしてある共同便所からは、流れ出す汚水が、時によると飛越し切れぬ程池をなして居る事さへあり、又、建物の壁際に沿うては、ブリキ製の塵桶ごみをけが幾個いくつも並べてあつて、其の中からは盛に物の腐敗する臭氣が、只さへ流通の路を絕れた四邊の空氣をば、殆ど堪へが

たい程に重く濁らして居る。で、一度、こゝに足を踏入れさへすれば、もう向うの建物の中を見ぬ先から、………丁度線香の匂をかいで寺院内の森嚴しんげんに襲はれると同樣、清濁の色別いろわけこそあれ、遠く日常の生活を離れた別樣の感に沈められるのである。

　で、折に觸れた一瞬間の光景が、往々にして、一生忘れまいと思ふほど、强い印象を與へる事がある。………確か晴れた冬の夜の事、私は例の如く帽子を眉深まぶかに外套の襟を立て、世を忍ぶ罪人のやうに忍入ると、建物と建物の間から見える狹い冬の空に、大きな片割月の浮いて居るのを認めた。光澤つやの無い赤い其の色は、泣腫なきはらした女の眼にも譬たとへやうか。弱々しい其の光は、汚れた建物の側面から滑つて遙か下なる空地の片隅に云はれぬ陰慘な影を投げた。扉や帷幕カーテンを引いた窓の中には火影の漏れながら人聲一ツ聞えぬ。すると、何處から出て來たとも知れぬ大きな黑猫が一匹、共同便所の板圍ひの上をのそ□□と、其の背を圓く高めながら、悲し氣な落月の方に顏を向けて一聲、二聲、三聲ほども鳴續けて、其れなり搔消すやうに姿を隱してしまつた。私はこの夜ほど深い迷信に苦しめられた事は無い………。

　又、或時は夏の夜、一日太陽に照された四方の壁は、容易に熱氣を冷さぬのみか、吹く風を遮つて、この空地の中は油の鍋も同樣である。流れ溢るゝ汚水からは生暖かい臭氣が眼にも見える烟のやうに、人の呼吸いきを閉すかと思はれたが、然し、建物の内なる狹い室の苦しさは其れ以上と見えて、悉く明放した四方の窓々からは何れも半ば裸體になつた女供が、逆さになる程身を外に突出して居る。明るい燈影が其の肩を越して漏れ出づるので、冬の夜とは全く

違ひ、空地の上に落ちる夜の色は明く光澤がある。向合せの窓と窓からは、罵るのやら、話すのやら、人の耳を裂くやうな女の聲の響き渡るが中に、高い建物の屋根裏では、其樣物音には一向構はず、大方支那人が彈くのであらう、齒の浮く胡琴の響が、キイ、キイ………と單調な東洋的の旋律メロデイを休まずに繰返して居た。私は四邊の臭氣と熱度に弱り果て聞くともなしに佇立むと、あゝこの調和、この均齊、私はこれほど痛ましく人の身の零落破滅を歌つた音樂を聞いたことはないと思つた。

　空地を行盡すと扉のない戸口がある。這入れば直樣狹い階段で、折々啖唾たんつばの吐き捨てあるのを、恐る□□上つて行くと、一階毎に狹い廊下の古びた壁には、薄暗い瓦斯の裸火が點いて居て、米國中他の場所では夢にも嗅げぬ煮込の豚汁や玉葱の臭氣にほひ、線香や阿片の香氣かをりが著しく鼻を打つ。

　見れば、ペンキ塗の戸口には、「李」だとか、「羅」だとか云ふ苗字やら、其の他縁起を祝ふ種々な漢字を筆太に書いた朱唐紙がベタベタ張付けてあり、中では猿の叫ぶやうな支那語が聞える。が、然らざる戸口には、蝶結びにしたリボンなぞを目標にして、べつたり白粉を塗立てた米國アメリカの女が、廊下に響く跫音を聞付けさへすれば、扉を半開に、聞覺えの支那語か日本語で、吾々を呼び止める。

　この女供は米國の社會一般が劣等な人種とよりは、寧ろ動物視して居る支那人をば唯一の目的にして———其の中には或る階級の日本人も含んで———此の裏長屋の中に集つて來たものである。人間社會は、如何なる處にも成敗上下の差別は免れぬ。一度、身を色慾

の海に投捨てゝも、猶ほ其の海には清きあり濁れるあり、或者は女王の榮華に人を羨ますかと思へば、或者は盡きた手段の果が、かくまでに見じめ、、、な姿を曝す。

　彼等は、何れも其身相當の夢を見盡して、今は唯だ「女」と云ふ肉塊一ツを、この奈落の底に投げ込み、最う悲しいも嬉しいも忘れて了つた、慾も德もなくなつて了つた。其の證據には戶口へ佇む男を呼び止めても、いきなりに最後の返事を迫め問ふばかりで、世間普通の浮女うかれめの樣に、媚を含む言葉使ひ、思せ振の樣子から、次第に人を深みに引入れやうとする、其の樣な面倒な技巧を用ひはせぬ、もしや男が否とも應とも云はずに、素見ひやかし半分、戲ひでもしたならば、其れこそ大變、彼等は忽ち病犬やまいぬの如くに吼たけり狂ひ、諸有る暴言雜語の火焰を吐く。

　實際、彼等は、譯もないのに唯だもう腹が立つて立つて堪へられぬのらしい。喧嘩をしたくも相手のない時には、幾杯となく傾ける強い火酒ウイスキーに、腸はらわたを燒きたゞらせ、床の上に身を踠もがいて、大聲に自分の身の上を云罵り、或は器物を破し、己れの髮毛を引挘つて居るなぞは珍しからぬ例である。然し、或者に至つては、早や此の狂亂の時期さへ經過して了つて、折さへあれば鴉片の筒を戀人の如く引抱へ、すや□□と虛無の平安を樂しんで居るものも少くはない。

　あゝ毒烟の天國——ある佛蘭西の詩人は PARADIS ARTIFICIELS（人工の樂土）と云つた——この夢現の鄕さとに遊ぶまでには、人は世の常ならぬ絕望、苦痛、墮落の長途を經なければならぬ、が、一度、此處に至れば全く煩悶未練の俗緣を脫して了ふ事が出來るの

であらう。見よ、彼等の眠りながらに覺たる眼の色を。私は恐る恐る打目成る度毎に、自分は僅ばかり殘つて居る良心に引止められて、何故一思にこゝまで身を落す事が出來ないのかと、勇氣と決心の乏しいのに云はれぬ憤怒を感ずるのである。

　裏長屋の中には、此れ等、惡の女王、罪の妃、腐敗の姫のその外に、明い日の照る處には生息し得ず、罪と惡の日蔽の下に、漸と其の安息地を見出して居るものは、猶二三に止まらぬ。

　女供を上得意にして、盜品や贋造物いかさまもののさま□□を賣りに來る猶太ジユーの爺おやぢがある。肩にかけた小箱一ツを生命に、一生涯を旅から旅にと彷徨ふ白髮の行商人がある。萬引を渡世に、其の品物を捨賣にして歩く黑人くろんぼの女がある。日本の遊廓あたりで、「使屋つかひやさん」と云ふ樣な、女郎の雜用をして居る親なし宿なしの惡少年がある。然し、其の中にも、殊更哀れと恐しさを見せるのは、明日は愚か今日の夕の生命さへ推量られぬ無宿の老婆の一群である。

　吾々はかの女郎の身の上をば、此れが人間の墮ち沈み得られる果の果かと即斷したが、其の又下には下があつた。あゝ最後の破滅、最後の平和に到着するまでに、人は幾度、如何に多く、惡運の手に弄ばれねば成らぬのであらう。

　彼等は其の捻曲つた身をばやつと裸體にせぬばかり、襤褸を引纏ひ、腐つた牡蠣かきのやうな眼には目脂めやにを流し、今はたゞ虱の爲めに保存してあると云はぬばかり、襤褸綿に等しい白髮を振亂して、裏長屋の廊下の隅、床下、共同便所の物蔭なぞに、雨露を凌

いで居て、折々は頼まれもせぬのに、女郎の汚れ物を洗つたり、雑用をたしたりして、やつと其の日の食にありついて居るのである。然し彼等は此の方が、社會の慈善と云ふ束縛、養老院と云ふ牢獄に收められて了ふよりも、結句安樂で自由であると信じて居るのであらう、若しや此の穴倉へ巡査の靴音の響く恐れでもあると豫知すれば、不思議な程敏活に、其の姿を隱して了ふ、が、然らざる時は、往々にして、天下を横行せんず勢を見せ、夜陰に乗じて彼方此方と、女郎の室々を巡つて物乞をする。これには流石の女供も敵し得ない。若し腹立ちまぎれに打つか蹴るかしたならば、直ぐと其の場で死んで了ふかと思はれるので、僅に戸の外へ突出せば終夜大聲を出して泣き叫んだり、又は惡たれて其の場に行倒れたまゝ鼾をかいたりする。或時、私は此樣厭がらせを云つて居るのを聞いた。

「いゝよ、さう因業いんごふな事を云ふんなら、もうお情は受けますまい。その代り、お前さんも、もう直きだ、みじめを見た曉に想知るだけの事だ………。お前さんはまだ若くつて、いくらでも商賣が出來るつもりだらうが、瞬く中だよ。ぢき乃公おら見たやうになつちまふ。鏡なんぞ見る心配はいらねえ、何時背負ひ込んだとも知らねえ毒が、何時か一度は吹出さずにや居ねえ。顔の皺なんかよりや、頭の毛が御用心。鼻が塞る、手が曲らア、顫へて來らア。足が引ツつれて腰が曲らア。物は試しだ、乃公の手を見なせえ………。」

　鏡に向つて夜の化粧をして居た女は、覺えずアツと叫んで兩手に顔を蔽ひ、其の儘寢床の上に突伏した。乞食老婆ばゝあは氣味惡く「ヒヽヽヽヽ」と笑つてよろ〳〵と女の室から廊下へ出て來たの

で、戸口から内の様子を覗いて居た私も、急に物恐しくなつて、慌忙てゝ其の場を逃げ去つた事がある。

　思出すのはボードレールが Ruines! ma famille! ô　cerveaux congénères!（殘骸！　わが親族！　わが腦漿！）と叫んでユーゴーに贈つた LES PETITES VIEILLES （小老婆）の一篇である。

　私はチヤイナタウンを愛する。チヤイナタウンは、「惡の花」の詩材の寶庫である。私は所謂人道慈善なるものが、遂には社會の一隅から此の別天地を一掃しはせぬかと云ふ事ばかり心配して居る。

夜あるき

余は都會の夜を愛し候そろ。燦爛たる燈火の巷ちまたを愛し候。

余が箱根の月大磯の波よりも、銀座の夕暮吉原の夜半を愛して避暑の時節にも獨り東京の家に止り居たる事は君の能く知らるゝ處に候。

されば一度ニユーヨークに着して以來到る處燈火ならざるはなき此の新大陸の大都の夜が、如何に余を喜ばし候ふかは今更申上るまでもなき事と存じ候。あゝ紐育は實に驚くべき不夜城に御座候。日本にては到底想像すべからざる程明く眩き電燈の魔界に御座候。

余は日沈みて夜來ると云へば殆ど無意識に家を出で候。街と云はず辻と云はず、劇場、料理屋、停車場、ホテル、舞蹈場、如何なる所にてもよし、かの燦爛たる燈火の光明世界を見ざる時は寂寥に堪へず、悲哀に堪へず、恰も生存より隔離されたるが如き絶望を感じ申候。燈火の色彩は遂に余が生活上の必要物と相成り申候。

余は本能性に加へて又知識的にこの燈火の色彩を愛し候。血の如くに赤く黃金の如くに清く、時には水晶の如くに蒼きその色その光澤の如何に美妙びめうなる感興を誘ひ候ふか。碧みどり深き美人の眼の潤ひも、滴るが如き寶石の光澤も、到底これには及び申さず候。

余が夢多き青春の眼には、燈火は地上に於ける人間が一切の慾望、幸福、快樂の象徵なるが如く映じ申候。同時にこれ人間が神の意志に戾もとり、自然の法則に反抗する力ある事を示すものと思はれ候。人間を夜の暗さより救ひ、死の眠りより覺すものはこの燈火

に候。燈火は人の造りたる太陽ならずや、神を嘲りて知識に誇る罪の花に候はずや。

　さればこの光りを得、この光に照されたる世界は魔の世界に候。醜行の婦女もこの光によりて貞操の妻、德行の處女よりも美しく見え、盜賊の面も救世主の如く悲莊に、放蕩兒の姿も王侯の如くに氣高く相成り候。神の榮え靈魂の不滅を歌ひ得ざる墮落の詩人は、この光によりて初めて罪と暗黑の美を見出し候。ボードレールが一句、

Voici le soir charmant, ami du criminel,
Il vient comme un complice, à pas de loup; le ciel
Se ferme lentement comme une grande alcôve,
Et l'homme impatient se change en bête fauve.

「惡徒の友なる懷いとしき夜は狼の步み靜に共犯人かたうどの如く進み來りぬ。いと廣き寢屋ねやの如くに、空徐おもむろに閉さるれば心焦立つ人は忽ち野獸の如くにぞなる………」と。余は昨夜も例の如く街に灯の見ゆるや否や、直に家を出で、人多く集り音樂湧出るあたりに晚餐を食して後、とある劇場に入り候。劇を見る爲めには非ず、金色に彩りたる高き圓天井、廣き舞臺、四方の棧敷に輝き渡る燈火の光に醉はんが爲めなれば、余は舞姬多く出でゝ喧かしましく流行歌など歌ふ趣味低きミユーヂカル、コメデーを選び申候。

　こゝに半夜を費し軈て閉場のワルツに送られて群集と共に外に出るや、冷き風颯然さつぜんとして面を撲うつ………余は常に劇場を出でたる此の瞬間の情味を忘れ得ず候。見廻す街の光景は初夜の頃入場したる時の賑さには引變へて、靜り行く夜の影深く四邊あたり

を罩こめたれば、身は忽然見も知らぬ街頭に迷出でたるが如く、朧氣なる不安と、それに伴ふ好奇の念に誘はれて、行手も定めず歩み度き心地に相成り候。

然り、夜深ふけの街の趣味は、乃ちこの不安と懷疑と好奇の念より呼び起さるゝ神祕に有之候これありそろ。既に灯を消し、戸を閉したる商店の物陰に人佇立めば、よし盜人の疑ひは起さずとも、何者の何事をなせるやとて窺ひ知らんとし、横町の曲り角に制服いかめしき巡査の立つを見れば、譯もなく犯罪を連想致し候。帽子を眉深まぶかに、兩手を衣嚢かくしに突込みて步み行く男は、皆賭博に失敗して自殺を空想しつゝ行くものゝ如く見え、闇より出でゝ、闇の中に馳過はせすぐる馬車あれば、其の中には必ず不義の戀、道ならぬ交際まじはりの潛めるが如き心地して、胸は譯もなく波立ち、心頻に焦立つ折から、遙か彼方に、ホテルやサルーンの燈火、更けたる夜を心得顏に赤々と輝くを望み見れば、浮世の限りの樂みは此處にのみ宿ると云はぬばかり。入りつ出でつ搖ゆらめく男女の影は放蕩の花園に戲れ舞ふ蝶に似て、折々流れ來る其等の人の笑ふ聲語る聲は、云難き甘味を含む誘惑の音樂に候はずや。

恐しき「定め」の時にて候。この時この瞬間、宛ら風の如き裙の音高く、化粧の香を夜氣に放ち、忽如として街頭の火影に立現るゝ女は、これ夜の魂、罪過と醜惡との化身に候。少女マルグリツトの家の戶口に惡魔メフイストが呼出す魔界の天使に御座候。彼女等は夜に彷徨ふ若き男の過去未來を通じて、その運命、その感想の凡てを洞察し盡せる神女に候。

されば男は此處にその呼び止とむる聲を聞きその寄添ふ姿を見る

時は、過ぎし昔の前兆を今又目前に見る心地して、その宿命に満足し、犧牲に甘んじて、冷き汚辱の手を握り申候。

　余は劇場を出でゝより更け渡りたるブロードウヱーを歩み□□て、かのマヂソン廣小路に石柱の如く聳立そばだつ二十餘階の建物をば夢の樓閣と見て過ぎ、やがて行手にユニオン廣小路とも覺しき樹の繁り、その間を漏るゝ燈火を望み候。近けば木蔭の噴水より水の滴る響、靜き夜に恰も人の啜り泣くが如くなるを聞き付け、其のほとりのベンチに腰掛け、水の面に燈影の動き砕くるさまを見入りて、獨り湧出る空想に耽り候。

　余は何者か、余に近く歩み寄る跫音、續いて何事か囁く聲を聞き候ふが、少時しばらくにして再び歩み出せば、………あゝ何處にて捕へられしや。余はかの夜の惡女と相並びて、手を引るゝまゝに、見も知らぬ裏街を歩み居り候。

　見廻せば、兩側に立續く長屋は塵に汚まみれし赤煉瓦の色黑くなりて、扉傾きし窓々には灯も見えず、低き石段を前にしたる戸口の中は、闇立ち迷ひて、其の縁下ベーズメントよりは惡臭を帶びたる濕氣流れ出でて人の鼻を撲つ。女は突然立止まりて、近くの街燈をたよりに、少時余が風采みなりを打眺め候ふが、忽ち紅したる唇より白き齒を見せて微笑み候。

　余は覺えず身を顫はし申候。而も取られし手を振拂ひて、逃去る決斷もなく、否、寧ろ進んで闇の中に陷りたき熱望に驅られ候。

　不思議なるは惡に對する趣味にて候。何故に禁じられたる果實は味美うるはしく候ふや。禁制は甘味を添へ、破壞は香氣を增す。谷川の流れを見給へ。岩石なければ水は激せず、良心なく、道念なけ

れば、人は罪の冒險、惡の樂しみを見出し得ず候。

余は導かるゝ儘に闇の戸口に入り、闇の梯子段を上り行き候。梯子段には敷物なければ、恰も氷を踏碎くが如き物音、人氣なき家中に響き、何處より湧き出るとも知れぬ冷き濕氣、死人の髮の如くに、余が襟元を撫で申候。

二階三階、遂に五階目かとも覺しき處まで上り行き候ふ時、女はかち、、□□と鍵の音させて、戸を開き、余をその中に突き入れ候。

濃き闇は此處をも立罩め候ふが、女の點ずる瓦斯の灯に、祕密の雲破れて、余の目の前には忽如として破れたる長椅子、古びし寢臺、曇りし姿見、水溜れる手洗鉢なぞ、種々の家具雜然たる一室の樣、魔術の如くに現れ候。室は屋根裏と覺しく、天井低くして壁は黑ずみたれど、彼方此方に脫捨てたる汚れし寢衣、股引、古足袋なぞに、思ひしよりは居心好き家と見え候。されど、そは諸君が寢藁打亂れたる犬小屋、若しくは糞にまみれし鳥の巢を覗見たる時感じ給ふ心地好さに御座候。

眺め廻す中に、女は早や帽子を脫り、上衣を脫ぎ、白く短き下衣シユミーズ一ツになりて、余が傍かたへなる椅子に腰掛け、卷煙草を喫し始め候。

余は深く腕を組みて、考古學者が砂漠に立つ埃及エヂプトの怪像スフインクスを打仰ぐが如く、默然として其の姿を打目戍り候。

見よ。彼女が靴足袋したる兩足をば膝の上までも現し、其の片足を片膝の上に組み載せ、下衣の胸ひろく、乳を見せたる半身を後に反し、あらはなる腕を上げて兩手に後頭部を支へ、顏を仰向けて煙

を天井に吹く様。これ神を恐れず、人を恐れず、諸有る世の美徳を罵り盡せし、慘酷なる、將はた、勇敢なる、反抗と汚辱との石像に非ずして何ぞ。彼女が白粉と紅と入毛と擬造まがひの寶石とを以て、破壞の「時」と戰へる其の面は孤城落日の悲莊美を示さずや。其が重き瞼の下に、眠れりとも見えず、覺めたりとも見えぬ眼の色は、瘴煙しやうえん毒霧どくむを吐く大澤の水の面にも譬ふべきか。デカダンス派の父なるボードレールが、

Quand vers toi mes désires partent en caravan,

Tes yeux sont la citerne où boivent mes ennuis.

「わが慾情、隊商カラバンの如く汝が方に向ふ時、汝が眼は病める我が疲れし心を潤す用水の水なり。」と云ひ、又、

Ces yeux, où rien ne se révèle

De doux ni d'amer.

Sant deux bijoux froids où se mêle

L'or avec le fer.

「嬉し悲しの色さへ見せぬ汝が眼は、鐵と黃金を混合まじへたる冷き寶石の如し。」と云ひたるも、この種の女の眼にはあらざるか。

余は已に小春の可憐、椿姫マルグリツトの幽愁のみには滿足致し得ず候。彼等は餘りに弱し。彼等は習慣と道德の雨に散りたる一片の花にして、刑罰と懲戒の暴風に萎しをれず、死と破滅の空に向ひて、惡の蔓を延し、罪の葉を廣ぐる毒草の氣槪を缺き居り候。

あゝ惡の女王よ。余は其の冷き血、暗き酒倉の底に酒の滴るが如く鳴りひゞく胸の上に、わが惱める額を押當る時、戀人の愛にはあらで、姉妹の親み、慈母の庇護を感じ申候。

放蕩と死とは連る鎖に候。何時も變りなき余が愚をお笑ひ下され度く候。余は昨夜一夜をこの娼婦と共に、「屍しかばねの屍に添ひて横る」が如く眠り申候。

（明治四十年四月）

六月の夜の夢

　放浪さすらひの此の身を今北亞米利加の地より歐羅巴の彼岸に運去らうとする佛蘭西の汽船ブルタンユ號は、定めの時間にハドソン河口の波止場を離れた。

　七月の空に怪しき雲の峯かとばかり聳立つ紐育の高い建物、虹よりも大きく天空に横はるブルツクリンの大橋、水の眞中に直立する自由の女神像―――此の年月見馴れ見馴れた一灣の光景は次第□□に空と波との間に隱れて行く………と、船はやがて緑深いスタトン、アイランドの岸に添ひサンデーフツクの瀬戸口から今や渺茫べうばうたる大西洋の海原に浮び出やうとして居る………

　亞米利加の山も水もいよ□□此の瞬間が一生の見納めではあるまいか。一度去つては又いつの日いづれの時、再遊の機會に接し得やう。

　自分は甲板の欄杆てすりに身を倚せかけ、名殘は盡きぬスタトン、アイランドの濱邊の森なり、村の屋根なりと、今一度見納めに見て置きたいものと焦り立つた。彼の島の濱邊に自分は船に上る昨日の夜半まで、まだ過ぎ去らぬ今年の夏の一ケ月あまりを暮して居たのである。然るを七月午前の烈しい炎暑は鉛色した水蒸氣に海をも空をも罩め盡し、森や人家と共にかの小高い丘陵をかをも雲か霞のやうに模糊もことさせてゐる。

　名殘、未練、執着――嗚呼こんな無慚な堪難い苦悶くるしみが又とあらうか。只さへ心弱いこの身のましてや一人旅、もしや今夜にも悲しい月の光の靜に船窓を照しでもしたなら、自分は狂亂して水

に身を投ずるかも知れぬ………。泣きたい時には泣くより外にしやうはない。悲しい時にはその悲しみを語るがせめての心遣りであらう。自分は大西洋上、波に搖れながら筆を執る………。

＊　＊　＊　＊

　思返すと日本を去つたのは四年前。亞米利加は今わが第二の故郷となつた。忘れられぬ事、懷しい事の數ある中にも、殊更忘れ兼ねるのは昨夜別れた少女をとめの事である、愛らしいロザリンが事である。

　此年の夏の初め果樹園に林檎の花の散盡した頃であつた。自分は此の四年間米國社會の見たい處調べたい處も、先づ大概は見歩いたので、此の秋の末頃には國許から歐洲渡航の旅費の屆くまで、紐育市中の暑さを避ける爲め灣口に横はるスタトン、アイランドの濱邊に引移つたのであつた。

　スタトン、アイランドと云へば一夏を紐育に滯在して居た人は誰も知つて居やう。サウスビーチだのミツドランドビーチだのと其處彼處に海邊の見世物場涼み場遊泳場およぎばなどのある島で。然し自分が靜養すべく選んだ處は（同じ島の中ではありながら）土曜日曜位に市中から極く釣好きの連中が來るばかり、其の他のものは恐く其の地名さへも知らない位な極く邊鄙な不便な海邊の一小村であつた。

　屋形船のやうな楕圓形の平い大きな渡船で海を横ぎり、彼方の岸に達すると直ぐ汽車で三十分ばかりの距離みちのりである。日頃青いものを見る事の出來ぬ紐育の市中から、突然この島に上ると四邊の空氣の香しさ、野の色の美しさに、人は只だ夢かとばかり驚くで

あらう。殊更に自分を驚喜せしめたのは、米國の田園と云つても例の大陸的の漠とした單調な景色に倦あぐみ果てゝ居た曉、この島の景色が全く其の反對で、如何にも小さく愛らしく、そして變化に富んで居る事であつた。汽車道を境にして片側には小い林や小流のある青い野を越して一帶に靜な內海が見え、片側には綠の濃い雜木林を戴いた小山が高く低く起伏して居る樣子、何となく逗子鎌倉あたりの景色を思出させる樣な處がある、かと思へば又平地一帶を眼の達とゞく限り、黃白くわうはくの野菊が咲き亂れて居る繪のやうな牧場や、葦よし、蘆、がま、、、河骨かうほねなぞさま□□な水草の萋々せい□□と繁茂して居る氣味の惡い沼地なぞもある。

飽ずにかう云ふ景色を見送りながら、小い木造の停車場四五箇所も通り過すと、やがて自分の下るべき村の停車場に到着する。板敷のプラツトフオームに降りると直ぐ、往來の兩側には、向合せに獨逸人の居酒屋が二軒、其の前には何時も濱邊の宿屋から案內の乗合馬車が出張して居る。で、この近所は人家も稍建て込んで居て、荒物屋、八百屋、肉屋、靴屋なぞ、村中の日用品を賣捌く小店も見え、赤子や子供の叫ぶ聲、女房達の罵る聲も聞えるが、此處から一本道を右なり左へなりと、繁つた楓の並木の下を二三町も行くと、兩側ともに曾て斧を入れた事もないらしい雜木林や、野の花の美しく、青草の茫々と生茂つた岡があつて、其の蔭にちらばらと汚れた板葺の屋根が見えるばかり。四邊一面絕え間もなく囀る小鳥の歌につれて、折々犬の吠る聲鷄の鳴く聲が遠く遠くの方へと反響する。

自分が下宿した家と云ふのは更でも靜な此の本道から、凸凹した小山を超えて遂には遙か彼方の海邊へと通じて居る曲りくねつた小

路のほとりに立つてゐる緣側附の二階家である。前方まへには高い雜草や灌木が風も通さぬ樣に繁つた藪をなし、後一帶はこんもりとした槲オークの林で圍はれて居る。緣先には屋根を蔽ふ櫻の老木が二本、少し離れた芝生の上には此れも二株、大きな林檎の樹が低く枝を廣げて居る。

　主人は五十ばかりの頭髮の赤い小男で、この島の鐵道會社に彼れ此れ二十年近くも雇はれ、每朝汽車で本局の事務所へ通つて居る。亞米利加人としては割合に口數をきかぬ靜かな男であつたが、自分が或人の周旋で下宿する約束を濟し、初めて市中から引越して來た時には、まるで十年會はなかつた親類を迎へるやうな調子で、容貌きりやうの惡い齒の汚い其の妻と共に家内は殘らず裏の菜園から鳥小屋までも案内し、スポートと呼ぶ飼犬までを自分に紹介してくれるやら、此の島スタトン、アイランド全體の地理を說明するやら、さて最後には客間に飾つてある二十年ほども以前のウエブスター大辭書を取出して來て、英語で分らぬ事があつたら此の字引を使ふがよいと注意してくれた。

　自分は裏手の槲の森に面した二階の一室を借り、午前の中だけはこの年月シカゴや、ワシントン、セントルイスなど、米國の彼方此方を通過ぎた折々、取集めた儘にしてあつた種々さま〴〵の目錄やら書類やら其樣ものゝ整理をした後、午後は緣先の櫻の木蔭で海の方から小山越に吹いて來る涼風を浴びながら、讀書と午睡に移り行く日影のやがて散步すべき夕方になるのを待つのであつた。

　家族と共に晩餐を濟すと丁度七時半頃である。自分は杖を片手に

何時も家の前の灌木と雜草の間を通ずる小徑を辿り、小高い岡を超えて海邊の方へと下りて行く。と、波打際一帶は濕しけた牧場で紐育本州の海岸のやうに怒濤の激する岩や石なぞは一ツもない。そして沼か澤のやうに葦よしの繁つて居る一條の長い浮洲うきすが濃い藍色の海原に突出て居る。この浮洲の輪廓はいかにも柔かく曲線の緩ゆるやかな事は最初一目見た時自分は何と云ふ譯もなく歡樂の夢に疲れた裸美人の物懶ものうげに横はつて居るやうだと思つた。

　浮洲の陰には日頃内海の隱な上にも潮の流の猶急ならぬを幸ひ、近村の釣船や小形のヤツトや自動船モトーボートなぞが幾艘となく繫がれてゐる。それ等の舟は何れも眞白に塗り立てゝあるので丁度公園の池に白鳥スワンの浮いて居るやう。日の落ちた黃昏の頃には夕照ゆふやけの紅色くれなゐと暮れ行く水の靑さとが、この浮洲一帶の綠の色と相對して形容の出來ない美しい色彩を示すのである。

　最早や島中の他の勝地妙景を探り歩く望みも餘裕もなくなつた。自分は每日同じ處に佇んで同じ入江と浮洲ばかりを飽ずに打眺めるのであつたが、やがて四邊は次第に暗くなつて最後に殘る彼の眞白な小舟ボートの色さへ、黑ずむ水と共に見えなくなると、亞米利加の黃昏は消え去る事早く、何時の程にか靜で明い六月の夏の夜となる…。

　あゝ六月の夏の夜。何たる空想夢現の世界であらう。日增しの暑さに四邊は夥おびたゞしい蚊であるが、同時に野一面森一面、無數の螢が雨のやうに亂れ飛ぶ。夕潮が生茂る葦の根に啜泣く。水楊や楓の葉が夜風に私語さゝやく。蟋蟀こほろぎと蛙かはづの歌の絕えざる中に何とも知れぬ小鳥が鳴く。空氣は一夜の中に伸びたいだけ

伸びやうとする野草の香に滿ちて居る。自分は放浪の身のよしや一度は詩人と云ふ詩人が夢に見る瑞西スヰスの夏伊太利亞の春の夜に逢ふ事があるとしても、然しこのスタトン、アイランドの夏の夜の樣ばかりは如何なる時とても忘れる事は出來まいと思つた。何故なれば自分は今眠れる海を前にし、憩へる林を後にし、高き野草の中に半身を埋め、無限の大空に無數の星を打仰ぎ、諸有る自然の私語を盜み聽き、殊には蒼然として物凄じい螢の火の雨を見遣つて居ると、此の身は何時ともなく冬の來るべき北亞米利加の大陸に居るやうな心地はせず、所謂デカダンス派の詩人の歌う夢の鄉さと「東の國オリアン」の空の下にでも彷徨ふやうな一種の強い神祕と恍惚とに打れるからである………。

この島に引移つてから丁度一週間目の夜の事である。自分は例の如く黃昏の浮洲を眺め飽した後、家の方へ歸行くとも心付かず、足の導くがまゝに元と來た草徑を辿つて岡の麓まで來た。

多分氣候の所爲であつたらう。螢の火は常よりも蒼く輝き、星の光もまた明に、野草の薰かをりも一際高く匂ひ渡るので、自分は日頃よりも一倍深く、あゝ此れこそ眞個ほんとうの愉快な夏の夜だ。地上には花の枯萎む冬も嵐も死も失望も何にもなく、身は魂と共に唯夏と云ふ感覺の快味に醉ふばかりだと感じた………同時に自分は兎か狐のやうに、四邊を蔽ふ雜草の中に寢られるだけ安樂に眠つてしまひたいやうな氣が起り、杖にすがつて今更の如く星降る空を遠く打仰ぐ………其の時突然前なる小山の上の一軒家からピアノの音につれて若い女の歌ふ聲が聞えた………。

自分はハツとばかり耳を澄したが、するとピアノの調しらべは露の雫の落ちて消ゆるが如く消え失せ、歌も亦ほんの一節、つれ□□の餘に低唱したものと見えて、途絶えたなり、後は元の明く蕭然しめやかな夏の夜であつた。蟲の聲ばかり、蛙の聲ばかり。

自分は群れ集る蚊をも忘れて久しい間草の上に佇んだ末は、遂に腰まで下してぢツと岡の上なる家の方を眺めて居た。

歌はもういくら待つて居ても、二度聞える望はない。木蔭を洩れる窓の灯が不意と消えた、かと見れば、二聲ばかり犬の吠る聲、つづいて垣根の小門をばカタリと開る音がした。

自分は初めて空想から覺め早足に岡を越えて、曲りくねつた草徑をわが家の方へと辿つて行つたが、すると突然四五間先に動いて行く眞白な物の影を見た、………小作な女の後姿である。夏の夜の空の明り星の輝き螢の火に自分はその女が蚊を追ふために折々日本製の團扇うちはを動かす細い手先と、眞白な衣服につれて白い布の半靴まで、薄暗いながらにはつきりと見分ける事が出來た。幽暗朦朧の中には却て微細なものゝ見分けられる事がある。

女の姿は一度草徑の曲る處で、其の背丈よりも高い雜草の中に隱れたが、同時に何か口の中で歌ふ歌が聞えて、遂に其の行き盡した處は意外にも自分の泊つて居る家の前であつた。

自分は驚いて四五間此方に立止る。其れとも知らぬ女は家の外から若い甲高な聲で、ホ、ホ———と冗談らしく呼び掛けると、何事にも禮式のない無造作な處が米國生活の特徴で、内からは女房が大聲で———Comeカム inイン———と叫んだ。然し女は室内なかへは入らずハニーサツクルの蔓草咲き匂ふ縁側の上口に腰を下した。

この女こそ彼の歌の主、この女こそ自分が今忘れやうとしても忘れられぬロザリンである。

然し初めて宿の妻から紹介された時には、自分は夢にも此樣ことにならうとは思つて居なかつた――いや單に懇意な友達になり得やうとも思はなかつた位である。何故なれば自分は此の年月の經驗で、米國の婦人とは如何しても自分の趣味に適するやうな談話をする事が出來ない。彼女等は極端な藝術論や激しい人生問題の話相手とするには餘に快活で餘に思想が健全過るので自分は折々新しい場所で新しい婦人に紹介されても、其後は單に語學の練習と人情觀察の目的以外には、決して純粹の座談笑語の愉快は期待しない事にして居るのであつた。

さればその夜、初對面のロザリンに對しても例によつて例の如く、若い婦人に對する若い男の禮儀として、嫌ひなオートモビルの話でも、又は敎會チヤーチの話でも、何でもして見るつもりで居た。處が劈頭第一に、自分はオペラが好きか何うかと云ふ意外な質問に會ひ、つゞいてプツチニの「マダム、バターフライ」の事、今年四五年目で再び米國の樂壇を狂氣せしめたマダム、メルバが事、其れから今年の春初めて亞米利加で演奏されたストラウスの「シンフホニヤ、ドメスチカ」の事など、意外な上にも意外な問題に宛ら百年の知己を得たやうな心地で、殆ど嬉し涙が溢れて來さうであつた。

自分は白狀するが實際西洋の女が好きである。自分は西洋の女と、英語であれ、フランス語であれ、西洋の言語で、西洋の空の下、西洋の水のほとりに、希臘ギリシヤ以來の西洋の藝術を論ずる

事が何よりも好きである。つまり自分が妙に米國の婦人を解釋して了つたのも最初あまりに豫期する事の多かつた結果に外ならぬのであらう。

　宿の妻は餘に話が高尚なのと又一ツには此の國の習慣として、若いもの同士の談話が興に入ると見れば、母親でも教師でも成りたけ其の興味の妨げをせぬやうにと、座をはづすが常とて、何かの物音を幸ひに裏手の鷄小屋の方へと出て行つた。

　話はいつか日本の婦人の生活流行結婚の事などに移つて居たので、自分は極く無頓着に、ロザリン孃は米國婦人の例として矢張獨身論者ではあるまいかと質問して見た。

　すると彼の女は「一般」と云ふ平凡な例の中に數入れられたのを、非常に憤慨したらしい樣子で、一寸、ドラマチツクな手振をなし、「私は決して獨身主義ではない、けれども屹度獨身で了らなければならないと思つて居る。それも決して消極的の結果ではないから絕望した悲慘な憂鬱なフランスの寡婦やもめのやうなものにもならず、さうかと云つて米國の褊狹へんけふな冷酷な老孃オールドメイドにもなりはしない。私はアメリカの教育は受けたが五歲の年まではイギリスに育つて、兩親とも昔から純粹のイギリス人です。イギリス人は斃たふれるまでも笑つて戰う。だからもしや一生獨身で暮すやうな事になつても、私は死ぬまで此の通り何時までも此の通りのお轉婆娘でせう。」

　云切つたその言葉には英語に特有の强い調子が含まれて居ると共に、成程動しがたい英人の決斷が宿つて居るらしく聞えたが、然し自分にはロザリンの弱々しい小作りの姿を見ると、其の語調の强烈

なるだけ深く何とも知れぬ一味の悲哀を感ずるのであつた。夏とは云ひながら餘りに美しく靜な夜の所爲であつたかも知れぬ。

　自分は軈て彼女に問返されるまゝ、此度は自分の主義を述べる事になつた。然しそれは主義主張意見なぞ云ふよりは全て夢か囈言うはことのやうな空想であらう——自分の胸には夢より外に何物もない。

　自分は結婚を非常に厭み恐れると答へた。此れは凡ての現實に絕望して居るからである。現實は自分の大敵である。自分は戀を欲するが、其の戀の成就するよりは寧ろ失敗せん事を願つて居る。戀は成ると共に烟の如く消えて了ふものである。されば得がたい戀失へる戀によつて、自分は一生涯をばまことの戀の夢に明してしまひたい———此れが自分の望みである。ロザリン孃よ。レオナルド、ダ、ヴインチとジオコンダの物語を御存じかと自分は尋ねた。

　宿の妻が裏の井戸から冷い水をコツプに入れて再び座に戾つたので、自分もロザリンも云合したやうに話を他に轉じたが、間もなく機會を見てロザリンは時間を訊きながら椅子から立つた。夜は早や十一時を過ぎたと云ふ事である。

　然し宿の主人あるじは村人の催すポカと云ふ骨牌かるたの會にと、宵の口に出て行つたなり未だ歸つて來ない。家中に男は自分一人の事とて義務としても、彼の女を其の家まで送つて行くべき場合である。自分は宿の妻が點してくれた小な提灯ランターンを片手に輕くロザリンの腕を扶たすけて、かの海邊にと通ずる草徑を辿つて行く。

　劇場の舞臺ならぬ現實の生活に此のやうな美しい役目ロールが又

とあらうか。自分はアメリカに來た後とても夜の道花の陰をば若い女と歩いた事は幾度もあるが、今夜に限つて如何したものか、最初はじめての經驗の如くに無暗と心が亂れて來てならなかつた。

唯さへ靜な島の夜は小夜ふけて餘りに靜な爲めか。或は驟雨ゆふだちの來るやうに木の葉や草の葉の折々妙に物凄く打戰うちそよぐ所爲か。或は蟲の聲蛙の聲の云ふに云はれず鮮に星降る空に反響して天地には今や全く自分とロザリンと此の二人しか覺めて居らぬと云ふ意識の餘に強く心を打つが爲か。自分は何とも知れぬ心の亂れをば理由もなく相手に悟られまいと焦り立つて居た。で、片手に提げた提灯の火が凸凹した足許を照す光に、自分はもしや顏を見られはせぬかと、それとなしに空のみ仰ぎながら歩いて行つたのである。

ロザリンも默つて何れかと云へば早足に歩みながら次第に坂道を上つて行つた。やがて高く生茂る草の上に彼の女が家の屋根が見えるあたりまで來ると二人の前には忽ち大空が一際廣く打廣がり、眞暗な海上瀬戸内の彼方此方には燈臺の火が幾個となく數へられ、又遠く大西洋の出口サンデーフツクの方に當つては終夜危險なる内海一帶の航路を照すサーチライトが望まれた。自分の後と直ぐ目の下には村の夏木立が眞黑に横はつて居る。

自分は覺えず立止ると彼の女は夢に物云ふ如く――Beautiful night, isn't it? I love to watch the lights on the sea. と云つたが、自分の耳にはこの語が非常に快い韻を踏んだ詩のやうに聞きなされた。

何と答へやう。自分は唯領付いたなり首かうべを垂れたが其の時

彼女はあわたゞしく自分の袖を引いて――――鳥が鳴いて居る。何だらう、駒鳥ぢやないか知らと云ふ。

成程、細くて高い笛のやうな優しい聲が一度途切れて又續いた。

自分はこの度は躊躇はず――ロメオが忍會ふ夜に聞いた「夜の鶯」であらう。Nightingale と云ふやうな夜に歌ふ小鳥は亞米利加には居ないと聞いて居たが現在あの優しい鳴音なくねはどうしても詩に歌はれた其れに違ひは無い。と斷定した。

實際、この國に育つたロザリンもさだかには鳥の名を知らなかつたのだ。二人は別に異論もなく、「ロメオの聽いた鳥」と云ふ事にしてしまひ、さて改めてもう一聲なり二聲なり、其の鳴く聲を聽かうとしたが、早や何處へやら飛び去つてしまつたらしい。

自分は小山の頂からほん丶丶の五六歩下りかけた道の右側にある彼の女の家まで送つて行き、廣い芝生ローンと花園を圍んだ垣根越に輕い握手と共に good night の一語。かくして其の夜は別れて歸つたのであつた。

自分は次の日、目を覺ますと前夜の事がどうしても夢であるやうな氣がしてならなかつた。現實にあつた事としては餘りに詩的である。餘りに美し過ぎる。同時に自分の生涯にはもう二度とあのやうな美しい事は起るまいと妙に果敢はかない氣もした。

午飯の時に宿の妻が問ひもせぬのに、いろ□□とロザリンの事を話してくれた。父親は元英吉利の商人で一度家族をつれて亞米利加へ來た後、ロザリンをば宗教學校の寄宿舍に預けて更に南亞弗利加のケープタウンへ赴き、其の地でかなりの財產を作つて七八年前に

歸つて來た。そして今の處に別荘を構へて隱居して了つたので、ロザリンは全く親の手を放れて育つたも同樣、その爲か極く氣の勝つた淋しい性質らしく、今日まで此れと云つて親しい友達も作らず、又何につけ物事をば兩親はじめ誰にも相談なぞする事はなく、何時も〳〵己れ獨りきりで決斷分別をつけ、然も別に淋しい顏付悲しい樣子なぞ見せた事もないと云ふ事である。

　食事を濟すと、自分は例の通り櫻の木蔭に赴き讀み掛けたマラルメの散文詩を開いたが、すると其の興味に引入れられるまゝ、次第に昨夜の事も、世の中の事も、自分の身の上も、皆も忘れてしまつて、芝生の上に橫はる木の影道の上に落る眩まばゆい日の光のみ目に映じて、あゝ夏は美しいと思ふばかりであつた。夕方になつていざ散步の折、自分は初めて今宵かの浮洲を見に行くには一本道の是非にもロザリンの家の前を行き過るのだと心付いた位である。

　自分は逢ひたいやうな又逢ひたくないやうな、極めて朦朧とした考で、いつもの草徑を步んで行つたが、まだ小山の頂まで達せぬ中烟のやうに暮れかゝる野草の蔭から、――――Hallow! here I am!――――と云ふ雲雀ひばりの樣なロザリンの聲を聞き付けた。彼の女は今宵も（自分にとは明かに云はなかつたが）自分の宿の妻を訪ねに行く處だと話した。

　で、其の夜も晚くまで話をして、昨夜の如く夜道をば提灯を片手に、再び名の知れぬ夜の鳥の囀る聲を聞き、彼女が家の垣根際まで見送つて行つたが、また其の次の日の午前には圖はからずも村の本道で、彼の女が郵便局へ行くとやら云ふ途中に出會ひ、そのさしかざす日傘の下に步調あしなみを揃へて步いた。

何しろ、狹い村の事、道は多からず、散步する時間も大抵はきまつて居るので、その後は殆ど每日のやうに、自分は一日の中、何處かで一度、顏を見ぬ事はないやうになつたのである。その結果として或日二日ばかり雨が降通して何處へも出られず、從つてロザリンの姿を見る事の出來ない場合に遭遇したが、すると、自分は寂しくて寂しくて、燈下に唯一人田舍家の屋根を打つ雨の音をば聞澄して居るには忍びないやうな心地になつた。———尤もこれは紐育に居た三年間、靜な雨の音なぞ聞いた事が無かつた所爲でもあらうが———遂に自分は每晚夜寢る時には、窓から空の星を仰ぎ見て、どうか明日も散步に出られるやうな好い天氣になるやうにと、心ひそかに念ずるのであつた。

旱ひでりの夏は自分の願つた通り、時々日の中に驟雨ゆふだちの降過ぎるだけで每日の天氣つゞき。殊に夜は月が出るやうになつた。自分はこの年、この夏ほど每夜正しく新月の一夜一夜に大きくなつて行くのを見定めた事はない。

今となつては却て此の月の光が恨である。月の光さへなくば、夜の鳥、蟲の聲、草の薰、木の葉の囁さゝめきに、夏六月の夜は如何に美しくとも、自分は………ロザリンは………二人はかくも輕々しく互の唇くちをば接するには至らなかつたであらう。

自分はこの島の靑葉が黃く、また紅くなりをはらぬ中、いづれアメリカを去らねばなるまいと云ふ事は、前から已にロザリンには打明けて居た。又、或時には自分は此四年が間アメリカの生活をした紀念に、せめては長く手紙のやりとりをするやうなブロンドの友達が欲いものだ………と云へば、ロザリンも笑つて讀みにくいルーズ

ベルト新式の綴字スペリングで手紙を書いて送らうと答へた位であつた。されば二人は唯だ愉快に此の美しい夏の夜を遊んで暮さうと、初めから明かに互の地位境遇を知り抜いて居た筈である。

　然し夏の夜は若いものが唯遊んで暮さうと云ふには、餘りに美し過ぎた。月は糸の様な其の頃から一夜も缺かゝさず靜な其の光に二人が語る肩を照し、自然々々知らぬ間に、われ等が魂を遠い□□夢の郷さとにと誘おびき入れて了つたのである。

　自分はどうしても自分の意思をば弱いものであつたとは云ひたくない。最後まで自分はロザリンを愛する事は出來ぬ、縦へ心の底はどうあつても、それをば若い娘に打明けべきでは無い、と意識して居たからである。

　丁度十五夜の滿月をば夜半過ぎまで眺め明し、亞米利加では月の面に人の顏があるとロザリンが云へば、日本では兎が立つて居るのだと答へて、その何れが正しいかと他愛もない議論をした、其の翌日の事、自分は意外にも早く故郷からの音信に接し、秋を待つ間もなくこの二週間以内には是非とも歐羅巴に向はねばならぬ事情に立ち至つた――――其の事情をも自分は殆ど何の躊躇もする事なく鳥渡紐育の市中へでも遊びに行くやうに、極く簡單に無造作に打明けて了つた。

　するとロザリンも同じく左程に驚いた樣子もせず、行先はフランスかイタリヤか、何日頃に出發するかなど質問して、宿の夫婦とともも□□客間で平日通りに雜談して居たでは無いか。

　然し十時を過ぎた後、毎夜の如く自分は彼の女を送つて外へ出る

と、今宵は卽ち十六夜いざよひの昨日にも勝る月の光。夜毎眺め飽す身にも餘りの美しさに、二人は何とも言交す語さへなく草徑を岡の近くまで步いて來たが、其の時自分は忽然何とも知れぬ悲しさが身に浸み渡つて來るやうな氣がした。ハツと心を取直さうとする刹那、ロザリンは道傍の石に躓いたらしく突如自分の方に倚り掛つた………自分は驚いて其の手を取ると彼の女は其のまゝひし〳〵とばかり自分の胸の上に顏を押當てゝ了つた。

　半時間あまりも、夜露に衣服の重くなるまでも、二人は何の語もなく相抱いたまゝ月中に立竦たちすくんで居たのである。實際何とも云ひ出す言葉はない。二人とも何程戀しいと思つた處で、自分は旅人、彼の女は親も家もある娘、永く幸福の夢に醉ふ事の出來ぬ事情は已に云はず語かたらず知り合うて居たからで。さればこの上に申出づべき事は唯二つあるのみである。自分は故鄉の關係をすつかり斷つてしまつて獨力で生活の道を永遠に此の國に求めやうか。或はロザリンをして兩親の家と此れまで育つた亞米利加の國土を出奔せしめるか。此の二つだけである。然し自分は如何に切なくとも、到底そこまでは進んで云ひ出し兼る。ロザリンとても亦男の身に戀の爲め浮世の凡てを打捨てゝくれよとは、如何して云ひ切れやう。

　二人は遂に常識の人であつたのかも知れない。亞米利加と云ふ周圍の力が知らず識らず恁かく爲しめたのであらうか。或は吾々の戀が未だそれまでに至らなかつたのであらうか。否、自分等二人の戀は命を捨てたロメオやパウロやジユリヱツトやフランチエスカの其れにも劣らぬものと信じて疑はない。二人は今此處で一度別れては何日又逢ふか分らぬ身と知りながら———一瞬間の美しい夢は一生

の涙、互に生殘つて永遠とこしへに失へる戀を歌はんが爲め、其の次の日からは毎日の午後をば村はずれの人なき森に深い接吻を交したのであつたものを………。

船は早くも大西洋を横斷よこぎり盡して程なくフランスのル、アーブル港に着くと云ふ事だ。今朝方アイルランドの山が見えたと人が話して居る。もう、長く筆を執つて居る暇はない。僅か一週間と云ふ日數の中に我が身は今如何に遠く彼の女から離れてしまつたのであらう。

遠く離れゝば離れるほど彼の女の面影はあり□□と目に浮ぶ。彼の女は稍黑みを帶びた金髮ブロンドであつた。西洋人には稀に見らるゝ程長く濃い其の金髮をば、何時も無造作に束ね、額に垂れる後毛をば絕えず指先で掻上げる樣子の如何にも情味が深い。並んで立つと丁度自分の頤おとがひほどしかない――アメリカの女としては極く小作りの方であつたけれど、然し肉付がよいのと、何時も極端に直立の姿勢を取つて居るので、どうかすると非常に丈け高く、大きく見える事もあつた。湖水みづうみの樣な青く深い眼と、細くて稍尖つた其の容貌おもざしは、熱心に話でもする折には、どうしても神經の過敏を示すだけ、ぢツと沈着おちついて居る時には、云ふに云はれない威嚴と強くて勇しい憂鬱を現す。――卽ち明い鮮な輪廓の繪にもしたいやうな妖艶な南歐の美人とは全く反對で、何處か銳い處に一種の悲哀があり、その悲哀の中に女性特有の優しさが含まれて居る北方アングロサキソン人種に能く見られる類型タイプの一であつた………。

突然上甲板の方に人の騒ぐ聲が聞える。ル、アーブル港の燈火が見え始めたのだと云ふ。船室へやの外の廊下をば———Nousヌーvoilàボアラ enアン Franceフランス———（佛蘭西に着いたぞ。）と云つて駈けて行くものがある。甲板の方では男や女が一緒になつて、

Allons enfants de la patrie

Le jour de gloire est arrivé

と歌ふ「マルセイヱーズ」が聞え出した。自分は遂にフランスに着したのだ。

然しこの止みがたき心の痛みを如何にしやう。自分は思ひ出すともなくミユツセがモザルトの樂譜に合せて作つた一詩———

Rappelle-toi, lorsque les destinées

M'auront de toi pour jamais séparé

....

....

Songe à mon triste amour, songe à

l'adieu suprême!

....

Tant que mon cœur battra,

Toujours il te dira:

Rappelle-toi.

「思ひ出よ。もし運命の永遠とこしへに、我を君より分ちなば、我が悲しき戀を思ひ出でよ。別れし折を思ひ出でよ。心の響消えざらば、とこしへに心は君に語るべし、思ひ出でよ思ひ出でよと。」

　心の中に口ずさみながら初めて見るフランスの山に自分は敬意を表する爲めにと、一歩あし一歩甲板の方に歩いて行つた。

Rappelle-toi, quand sous la froide terre
Mon cœur brisé pour toujours dormira;
Rappelle-toi, quand la fleur solitaire
Sur mon tombeau doucement s'ouvrira.
Tu ne me verra plus; mais mon âme immortelle
Reviendra près de toi comme une sœur fidèle.
Ecoute dans la nuit,
Une voix qui gémit:
Rappelle-toi.

「思ひ出でよ。冷き土に永遠とこしへに、わが破れし心眠りなば、思ひ出でよ。淋しき花の徐おもむろに、わが墳墓おくつきに開きなば、君は再びわれを見じ。されど朽ちせぬわが魂たまは、親しき妹いもが如くに、君が傍かたへに返り來ん。心澄して夜に聞け。さゝやく聲あり、思ひ出でよと。」

（明治四十年七月）

Transcriber's Notes

本テキストは昭和四十二年講談社刊「日本現代文學全集33　永井荷風集」（第七刷）を底本にした。近代デジタルライブラリー所収1908年博文館発行の版と比較して以下の訂正を施した。

原文　横顔をばひ、、たと
訂正　横顔をばひた、、と

原文　木枯を搖する風

訂正　枯木を搖する風

原文　瘴煙しやうどく毒霧えんむ

訂正　瘴煙しやうえん毒霧どくむ

●文字・フォーマットに関する補足

「候」の略体は「候」で表記した。「懶」は「忄＋賴」。

- You provide, in accordance with paragraph 1.F.3, a full refund of any money paid for a work or a replacement copy, if a defect in the electronic work is discovered and reported to you within 90 days of receipt of the work.

- You comply with all other terms of this agreement for free distribution of Project Gutenberg™ works.

1.E.9. If you wish to charge a fee or distribute a Project Gutenberg™ electronic work or group of works on different terms than are set forth in this agreement, you must obtain permission in writing from the Project Gutenberg Literary Archive Foundation, the manager of the Project Gutenberg™ trademark. Contact the Foundation as set forth in Section 3 below.

1.F.

1.F.1. Project Gutenberg volunteers and employees expend considerable effort to identify, do copyright research on, transcribe and proofread works not protected by U.S. copyright law in creating the Project Gutenberg™ collection. Despite these efforts, Project Gutenberg™ electronic works, and the medium on which they may be stored, may contain "Defects," such as, but not limited to, incomplete, inaccurate or corrupt data, transcription errors, a copyright or other intellectual property infringement, a defective or damaged disk or other medium, a computer virus, or computer codes that damage or cannot be read by your equipment.

1.F.2. LIMITED WARRANTY, DISCLAIMER OF DAMAGES - Except for the "Right of Replacement or Refund" described in paragraph 1.F.3, the Project Gutenberg Literary Archive Foundation, the owner of the Project Gutenberg™ trademark, and any other party distributing a Project Gutenberg™ electronic work under this agreement, disclaim all liability to you for damages, costs and expenses, including legal fees. YOU AGREE THAT YOU HAVE NO REMEDIES FOR NEGLIGENCE, STRICT LIABILITY, BREACH OF WARRANTY OR BREACH OF CONTRACT EXCEPT THOSE PROVIDED IN PARAGRAPH 1.F.3. YOU AGREE THAT THE FOUNDATION, THE TRADEMARK

distribution of Project Gutenberg™ electronic works, harmless from all liability, costs and expenses, including legal fees, that arise directly or indirectly from any of the following which you do or cause to occur: (a) distribution of this or any Project Gutenberg™ work, (b) alteration, modification, or additions or deletions to any Project Gutenberg™ work, and (c) any Defect you cause.

Section 2. Information about the Mission of Project Gutenberg™

Project Gutenberg™ is synonymous with the free distribution of electronic works in formats readable by the widest variety of computers including obsolete, old, middle-aged and new computers. It exists because of the efforts of hundreds of volunteers and donations from people in all walks of life.

Volunteers and financial support to provide volunteers with the assistance they need are critical to reaching Project Gutenberg™'s goals and ensuring that the Project Gutenberg™ collection will remain freely available for generations to come. In 2001, the Project Gutenberg Literary Archive Foundation was created to provide a secure and permanent future for Project Gutenberg™ and future generations. To learn more about the Project Gutenberg Literary Archive Foundation and how your efforts and donations can help, see Sections 3 and 4 and the Foundation information page at www.gutenberg.org.

Section 3. Information about the Project Gutenberg Literary Archive Foundation

The Project Gutenberg Literary Archive Foundation is a non-profit 501(c)(3) educational corporation organized under the laws of the state of Mississippi and granted tax exempt status by the Internal Revenue Service. The Foundation's EIN or federal tax identification number is 64-6221541. Contributions to the Project Gutenberg Literary Archive Foundation are tax deductible to the full extent permitted by U.S. federal laws and your state's laws.

The Foundation's business office is located at 809 North 1500 West, Salt Lake City, UT 84116, (801) 596-1887. Email contact links and up to date contact information can be found at the Foundation's website and official page at www.gutenberg.org/contact

Section 4. Information about Donations to the Project Gutenberg Literary Archive Foundation

Project Gutenberg™ depends upon and cannot survive without widespread public support and donations to carry out its mission of increasing the number of public domain and licensed works that can be freely distributed in machine-readable form accessible by the widest array of equipment including outdated equipment. Many small donations ($1 to $5,000) are particularly important to maintaining tax exempt status with the IRS.

The Foundation is committed to complying with the laws regulating charities and charitable donations in all 50 states of the United States. Compliance requirements are not uniform and it takes a considerable effort, much paperwork and many fees to meet and keep up with these requirements. We do not solicit donations in locations where we have not received written confirmation of compliance. To SEND DONATIONS or determine the status of compliance for any particular state visit www.gutenberg.org/donate.

While we cannot and do not solicit contributions from states where we have not met the solicitation requirements, we know of no prohibition against accepting unsolicited donations from donors in such states who approach us with offers to donate.

International donations are gratefully accepted, but we cannot make any statements concerning tax treatment of donations received from outside the United States. U.S. laws alone swamp our small staff.

Please check the Project Gutenberg web pages for current donation methods and addresses. Donations are accepted in a number of other ways including checks, online payments and